

富山県小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第6次緊急発掘調査概要

1984年3月

富山県教育委員会

序

小杉流通業務団地の造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、今年度で6年目をむかえ、数多くの貴重な発見が相つぎました。とりわけ、No16遺跡では、奈良時代前半の須恵器窯跡や住居跡が発見され、律令体制下における須恵器生産のあり方を考えるうえで貴重な資料となりました。No21遺跡では、北陸地方最古の瓦陶兼業窯が発見され、多くの資料を得るとともに、須恵器や瓦の生産にたずきわった人々の住居跡や工房跡を明らかにすることができました。この遺跡は、歴史的重要性が考慮され、現状のままで保存することを検討中であります。本書は、こうした発掘調査の概要をとりまとめたものであります、多くの方々に活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。最後に、調査の実施に当たり、御協力をいただいた地元の方々をはじめ、関係各機関の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和59年3月

富山県教育委員会 教育長 山崎弘道

例　　言

1. 本書は、富山県射水郡小杉町・大門町に所在する小杉流通業務団地内遺跡群の第6次発掘調査の概要である。
2. 発掘調査を実施した遺跡名と期間・面積は以下のとおりである。
No16遺跡 大門町水戸田字頃尺所在 昭和58年4月18日～8月23日 約2,900m²
No21遺跡 小杉町青井谷字丸山所在 昭和58年4月27日～12月16日 約13,600m²(表土耕土のみ約9,100m²を含む)
3. 調査は富山県土木部の依頼により、小杉町教育委員会の協力を得て富山県教育委員会が実施した。
なお、調査の実施にあたって、文化庁記念物課主任文化財調査官河原純之・同文化財調査官黒崎直及び奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター文部技官上原真人の三氏から指導を得た。
4. 発掘調査担当者及び調査員は以下のとおりである。
調査担当者 富山県埋蔵文化財センター主任上野章・同岸本雅敏・文化財保護主事山本正敏・同神保孝造・小杉町教育委員会社会教育課主事(富山県教育委員会派遣文化財保護主事)斎藤隆
調査員 富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事閑清・同久々志義
5. 調査事務局は、富山県埋蔵文化財センターに置き、主任出村昭大・文化財保護主事狩野睦・同池野正男が調査事務を担当し、所長古岡英明が統括した。
6. 調査から報告書の作成まで下記の方々から種々有意義な指導・助言を得た。記して深甚なる謝意を表したい。
秋山進午・五十川伸矢・稻垣晋也・岡本東三・神村透・菊池康雄・京山良志・桑原滋郎・小島俊彰・佐原真・白石太一郎・高井悌三郎・坪井満足・中村五郎・檜崎彰一・西弘海・西井龍儀・西村公朝・西山要一・橋本正・春成秀爾・丸山龍平・渡辺晨・山崎隆之・渡辺誠・和田晴吾(五十音順・敬称略)
7. 考古地磁気の測定を富山大学理学部教授広岡公大氏に、また放射性炭素による年代測定を学習院大学理学部教授木越邦彦氏にそれぞれ依頼し、その結果報告を本書に収録した。墨書き器の赤外線写真撮影にあたっては、富山県警察本部鑑識課の協力を得た。
8. 本書の遺物写真は3分の1を基本としている。遺物写真的番号が2段組のものは、下段が実測図番号を示す。
9. 遺物の写真撮影及び整理にあたっては、池野正男・橋本正春(富山県埋蔵文化財センター)の協力を得た。
10. 本書の編集・執筆は、調査を担当した上野章・岸本雅敏・山本正敏・神保孝造・斎藤隆が共同で行った。
なお、執筆分担は各文末に記した。

目 次

I 地形と周辺の遺跡	1
II 調査の経緯	2
III 調査の概要	4
1. No16遺跡	4
(1) 調査の経緯	4
(2) 地形と層序	4
(3) 遺構	5
(4) 遺物	8
(5)まとめ	20
2. No21遺跡	27
(1) 調査の経緯	27
(2) 立地	27
(3) 層序	27
(4) 遺構	27
(5) 遺物	35
(6)まとめ	46
IV 放射性炭素による年代測定	52
V 小杉流通業務団地内No16、21遺跡に残存する 焼土の考古地磁気測定	53
VI 自然科学的年代測定結果について	55
参考文献	
写真図版	

擇 図・付 図・表

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 小杉流通業務団地計画地内及び周辺の遺跡分布図	3
第3図 No16遺跡の地形と区割図	4
第4図 第1号窯跡実測図	6
第5図 遺構主要部実測図	折り込み
第6図 第1号窯跡窯体出土遺物実測図	10
第7図 第1号窯跡灰層出土遺物実測図	11
第8図 第1号窯跡灰層出土遺物実測図	12
第9図 第1号窯跡灰層出土遺物実測図	13
第10図 谷部出土遺物実測図	14
第11図 谷部出土遺物実測図	15
第12図 谷部出土遺物実測図	16
第13図 遺構出土遺物実測図	17
第14図 遺構・その他出土遺物実測図	18
第15図 No16遺跡出土土器器種一覧	21
第16図 出土遺物実測図	24
第17図 出土遺物実測図	25
第18図 出土遺物実測図	26
第19図 No21遺跡の地形と区割図	28
第20図 遺構実測図	29
第21図 遺構実測図	31
第22図 遺構実測・遺物出土状況図	32
第23図 遺構実測・遺物出土状況図	33
第24図 第106号穴実測図	34
第25図 出土遺物実測図	37
第26図 出土遺物実測図	38
第27図 出土遺物実測図	39
第28図 出土遺物実測図・拓影図・布目密度	41
第29図 出土遺物拓影図	42
第30図 出土遺物拓影図	43
第31図 出土遺物拓影図	44
第32図 出土遺物拓影図	45
第33図 須恵器窯跡と集落	46
第34図 発掘された主な瓦屋	47
第35図 No21遺跡出土須恵器の器種組成と7世紀代の須恵器編年諸案	48
第36図 須恵器杯蓋の法量	49
第37図 北陸の主な古瓦分布図	51
第38図 地磁気永年変化とNo16、21遺跡の考古地磁気測定結果	54
表 1. 本調査結果一覧	2
表 2. 主な瓦屋一覧	47
表 3. 古代寺院・瓦出土遺跡地名表	50
表 4. 考古地磁気測定結果	54
表 5~8 磁化測定結果	55
付図1. No16遺跡遺構全体図	
付図2. No21遺跡発掘区遺構全体図	

I 地形と周辺の遺跡

小杉流通業務団地内遺跡群は、射水郡大門町水戸田と小杉町青井谷の両地内に位置し、51ヘクタールにおよぶ範囲内に28箇所の遺跡が含まれている。

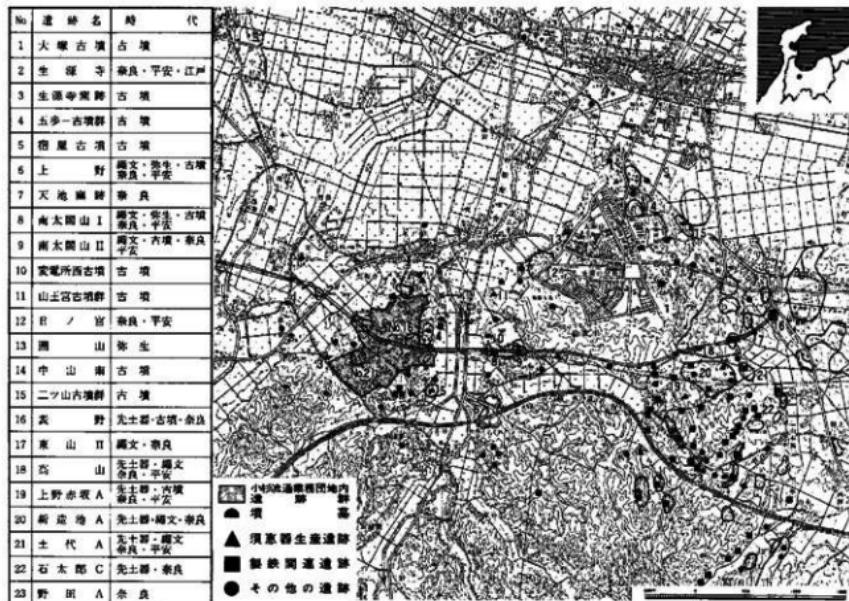
この地域は、射水丘陵の南部にあたり、遺跡群の東側を北流する下条川と、その小支流が谷を刻み樹枝状の地形を呈している。当遺跡群は、この谷で区切られた支丘陵に立地しており、その標高は10m~60mを測る。

一帯の地層は、新第三紀の泥岩・砂岩層からなる青井谷泥岩層を基盤として、礫・砂泥互層と火砕岩層が堆積しており、良質の粘土が採取される。このため遺跡群の近傍では、この粘土を利用した瓦生産が今も行われており、富山県内における残り少ない瓦生産地の一つとして知られている。

周辺の遺跡分布を見ると、上野遺跡・西山遺跡・中山南遺跡・大堀古墳・山王宮古墳群といった古くから著名な遺跡が多い。さらに、近年、当地域周辺における大型開発事業の急増に伴う遺跡の分布調査が進み、当遺跡群周辺の射水丘陵一帯は、県内でも有数の遺跡密集度をもつ地域となっている。その時代は、先土器時代から中・近世の各時代におよんでいる(第1図)。中でも古代の須恵器窯・製鉄炉・炭焼窯等の生産遺跡が、数多く立地し、当地域を特徴づけている。この一帯は樹枝状の谷が入り組んだ低い丘陵地帯であること、良質の陶土が採取されること、燃料用木材が得やすいことなど自然条件に恵まれた地域と考えられ、その必然性をうかがわせる一帯である。

この他、遺跡群の周辺には、弥生時代末から古墳時代の墳墓や集落跡も多い。これらは、時代を異にしてその分布を見ると一つのまとまりとしてとらえることができ、上記の生産遺跡群とともに自然の立地条件の良さとは別に、その背景には強力な政治体制の存在を秘めているように思える。このように当地域は、県内における古代史を完結するうえでの一つの重要な地域として位置づけられる。

(神保)



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II 調査の経緯

昭和48年、富山県は、流通機能の向上と道路交通の円滑化を図る目的で、小杉流通業務団地を建設する計画を策定した。この建設事業は、小杉町・大門町の両町にまたがる約51ヘクタールの丘陵地を造成し、路線トラックターミナル・区域トラック施設・卸売施設等の諸施設を配置して、関連企業に売却するものである。造成事業は、富山県上木部があたり、完成後の誘致・売却を富山県商工労働部が所管している。工事は、昭和54年度から開始され、3期に区分し順次進められている。現在までのところ予定地面積の70パーセント程度が完了し、一部の分譲がすでに開始されている。

富山県教育委員会では、これに対して昭和51年12月に建設予定地内の遺跡分布調査事業〔富山県教委 1977〕を実施し、28箇所におよぶ新たな遺跡を発見するとともに、上述の関係機関とその保護措置について協議を重ねてきた。その結果、昭和52年度から昭和57年度まで5次にわたる発掘調査事業を行い、これまで17遺跡4地区の本調査を実施した(第2図、表1)。その総発掘面積は約6.8ヘクタールにもおよんでいる。

調査は、第1期造成地に係るNo16とNo21遺跡の2遺跡を対象とした。No16遺跡の調査は、昭和57年度の第5次調査時点まで具体化したNo11遺跡の古墳群6基の保存協議にもとづく、工事の設計変更に伴う本調査であった。

また、No21遺跡の調査は、昭和56年度の試掘調査と昭和57年度の一部本調査に引続く発掘調査で、過去2回の調査によって明らかになった北陸最古で飛鳥・白鳳時代の瓦陶兼業窯跡をはじめ、遺跡丘陵部に立地する遺構の確認調査と谷部の本調査を行った。

なお、No21遺跡については、今回の調査結果を含め3次の調査成果にもとづき、保存協議が進められている。

(神保)

年度	遺跡	所在地	時代	種類	主な検出遺構と出土遺物
1次 53	No20	小杉町青井谷字丸山	先土器・縄文・弥生 奈良(主)	集落跡	住居跡3・段状遺構1・穴18
	No9	大門町水戸田字石名山	縄文		溝1
	No13	小杉町青井谷字丸山	奈良		環状遺構1・穴13
2次 54	No16	大門町水戸田字頃尺	縄文・古墳・奈良(主)	集落・墓跡	住居跡1・須恵器窯跡2・段状遺構1・穴9・須恵器
	No17	"	縄文・古墳(主)	古墳	埋葬1・円墳1・木棺墓1・穴5
	No18・A地区	小杉町青井谷字丸山	奈良	集落跡	住居跡1・穴5・溝5
	No3	大門町水戸田字石名山	縄文・古墳	集落跡・古墳	住居跡1・円墳8・穴6
3次 55	No7	"	縄文・古墳・奈良・平安	集落・墓跡	住居跡27・円墳4・須恵器窯跡7・樹立柱建物7・穴・溝多数・須恵器
	No18・C地区	小杉町青井谷字丸山	縄文・奈良(主)・平安	集落・墓跡	住居跡2・炭灰窯跡1・穴・溝多数
	No20・B地区	"	縄文・古墳・奈良		穴2
	No32	"	先土器・平安	墓跡	炭灰窯跡2・穴2
	No2	大門町水戸田字石名山			穴2
4次 56	No3	"	縄文・古墳	集落跡・古墳	住居跡2・円墳1・穴13
	No6	"	先土器・縄文・古墳(主) 奈良・平安	集落・墓跡	住居跡14・溝・炭灰窯跡1・穴多数
	No7・北地区	"	縄文・古墳・奈良・中世	集落跡・古墳	住居跡3・円墳4・穴多数
	No1	"	縄文(主)・奈良		穴2・縄文土器・石斧・須恵器
5次 57	No11	大門町水戸田字頃尺	先土器・縄文・古墳	古墳	円墳3・先土器時代の石器・縄文土器・刺・直刀・鉄鏃・ガラス玉
	No21	小杉町青井谷字丸山	先土器・古墳・古墳(主) 奈良	集落・墓跡	穴多数・製鉄炉・先土器時代の石器・瓦・須恵器・土師器 ・研・製塗土器
	No23	大門町水戸田字西瀬	奈良・平安・中世	製鐵跡	木製品
	No24	"	縄文・古墳(主)・奈良	古墳	円墳1・穴1・縄文土器・石器・土師器・須恵器
	No25	"	先土器・縄文・奈良		穴38・先土器時代の石器・縄文土器・石器・土師器・須恵器
6次 58	No16	大門町水戸田字頃尺 小杉町青井谷字丸山	縄文・奈良(主)	集落・墓跡	住居跡・段状遺構・須恵器窯跡1・穴・須恵器・土師器・土馬陶(白磁)・鏡類・仏像・陰像を施したスタンプ模様品・木製品
	No21	小杉町青井谷字丸山 大門町水戸田字西瀬	先土器・古墳・白磁(主) 奈良・平安・中世	集落・墓跡 製鐵跡	住居跡・段状遺構・瓦陶兼業窯跡1・須恵器窯跡1・穴多数 ・須恵器・製鐵炉・先土器時代の石器・須恵器・土器・瓦・土馬

表1 本調査結果一覧



第2図 小杉流通業務団地計画地内及び周辺の遺跡分布図

III 調査の概要

1. No.16遺跡

(1) 調査の経緯

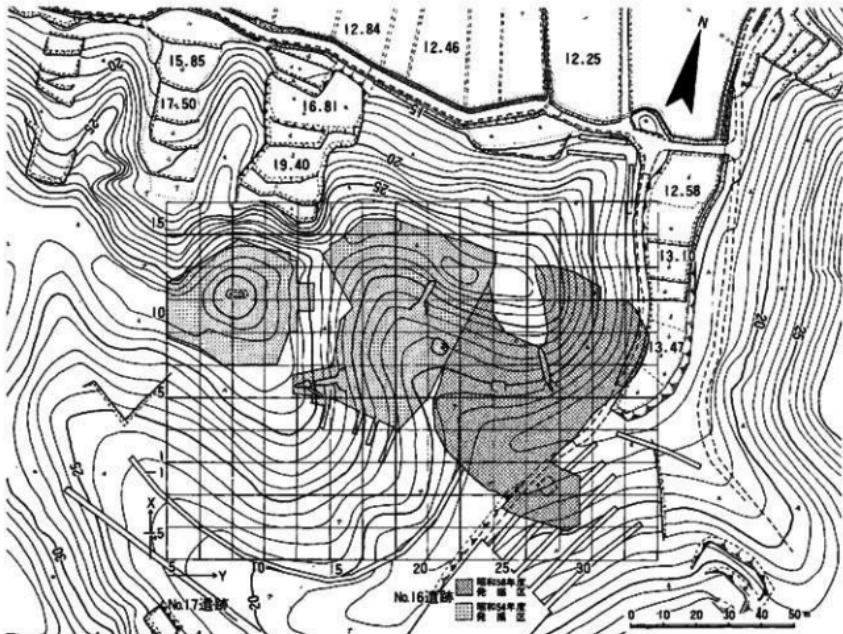
No.16遺跡の西半部は、昭和54年度に発掘調査を実施し、すでに造成工事を終了している。この調査では、古墳時代と奈良時代に属する須恵器窯跡各1基と、住居跡・段状遺構・粘土採掘穴などを発見している。遺跡の東半部については、当初綠地として現状で保存される予定であった。しかしその後、計画の一部変更があり、この東側部分も造成区域に含まれることになったため、発掘調査を行うことになった。調査は昭和58年4月18日から8月23日まで、延べ62日間実施した。発掘面積は2,900m²である。今回の調査の結果、第1号窯跡焼き口付近、谷を隔てた対岸斜面で確認していた住居跡などが、造成関連工事によってすでに削平を受けていることが判明した。

(山本)

(2) 地形と層序

東方に細長く張り出す丘陵支脈の基部、丘陵南側斜面及び谷頭にかけて遺跡は位置する。層序は、丘陵上及び斜面において、20~30cmの暗灰褐色の表土層が堆積し、地山の黄褐色粘土に移行する。谷部では茶褐色~暗茶褐色の土層、暗茶褐色土層のII層、粘質土のⅢ層と大まかに分類できる。とりわけⅢ層は、さらに6層に分類でき(便宜上、上部よりa~fと呼称) a~d層は灰~茶黄色粘質土層で、酸化鉄分の茶褐色土が混ざり無遺物層である。e、f層は、黒褐色粘質土層、暗灰褐色砂質土層であり、ともに遺物包含層である。谷部5箇所の土層断面を観察すれば包含層の厚さは約60~80cm程度である。第1号窯跡付近は上層部に灰層が認められる。

(斎藤)



第3図 No.16遺跡の地形と区割図

(3) 遺構

① 第1号窯跡（第4図・図版第2）

立地・規模 東西にのびる丘陵の南東端の斜面中腹に築かれている。標高は、前庭部付近で約19m、奥壁付近で約22.5mである。第2号窯に比べて、前庭部付近で約3.5m低位に位置する。焚口は、南南東に向けて開口している。窯体の主軸は、等高線に対してほぼ直交し、地表面の傾斜度は、現状で約17度をはかる。主軸の方針はN-29°-Wである。

窯体の全長は、焚口付近が削平されているため明らかでないが、いわゆる舟底状ピット手前から奥壁まで約10m（水平距離）をはかる。最大幅は約1.2mである。窯体は奥壁に向かうにしたがって遺存状態は悪くなり、煙り出しは確認できなかった。

焼成部 前述したように、焚口付近の形状は削平されていて不明である。いわゆる舟底状ピットは、長さ1.8m、幅約1.1m、深さ0.4mの楕円形を呈する。窯体の数度にわたる改修に伴って、土砂・焼土・窯壁細片などで埋まって序々に浅くなり、最終焼成時にはほぼ平坦になっている。傾斜変換点は不明瞭であるが、舟底状ピットのや上方にあたると考えられる。

焼成部 窯体は、地山を掘り込んで構築されている。天井部はすべて落としており、掘り抜きの部分があったかどうか不明である。床幅は1.1m～1.2mではほぼ一定しており変化はない。奥壁は丸みをおびる。

床面の傾斜度は構築当初約24度ではほぼ直線的であるが、改修を重ねるうちに、奥部では焼土等による堆積物が最大約28cmの厚さに達して、急傾斜となる。縱断面でみると、奥壁近くでは4枚の床面が確認できる。

窯体の断面形はカマボコ状となる。壁は何度も改修が行なわれているが、全体にわたるものではなく、部分的な改修がくりかえされたと考えられる（図版第2-4）。C-C'のたち割りでは、奥に向かって右壁で5枚、左壁でも枚のスサ入り粘土貼り壁を認めることができる。そのため、最終的な窯体幅は、構築当初に比べ、かなり狭くなっている。奥壁とその周辺部ではスサ入り粘土の貼り壁ではなく、素掘りのままである。なお奥壁の北側に小ピットがあるが、窯体の形成以前に掘られたもので、性格は不明である。

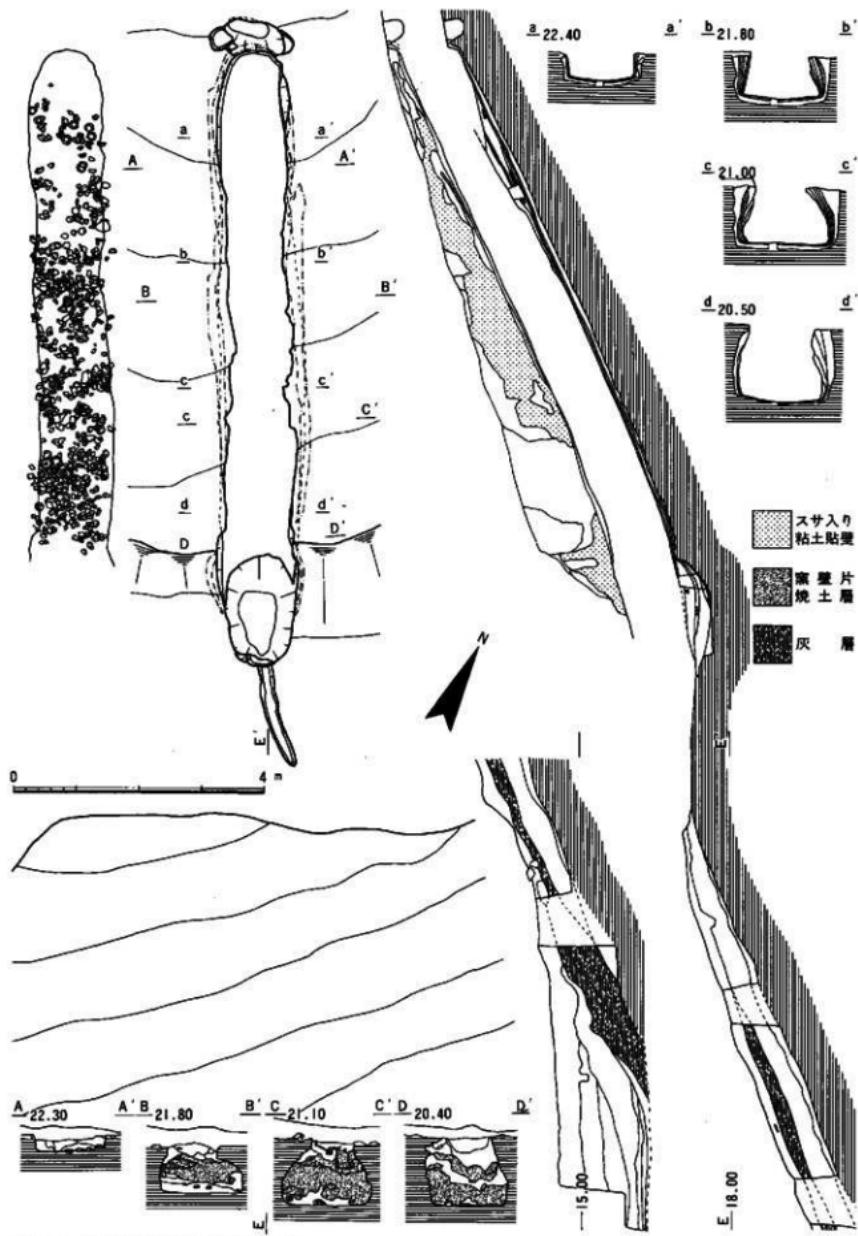
前庭部・排水溝 前庭部も削平を受けており旧状を知ることはできない。舟底状ピットから前庭部にかけて、幅約24cmの溝が弧状に伸びる。長さは現存約1.6mであるが、もう少し伸びていた可能性がある。おそらく排水溝として掘られたものであろう。

焼き台 烧成部の奥壁近くには、杯身の半欠品などを利用した焼き台が、約60個残されていた。置き方は、横に7個程を割れ口を奥に向かって並べ、階段状にしている（図版第2-2）。中央部から焼成部にかけては、原位置を遺留した焼き台が相当数認められる。

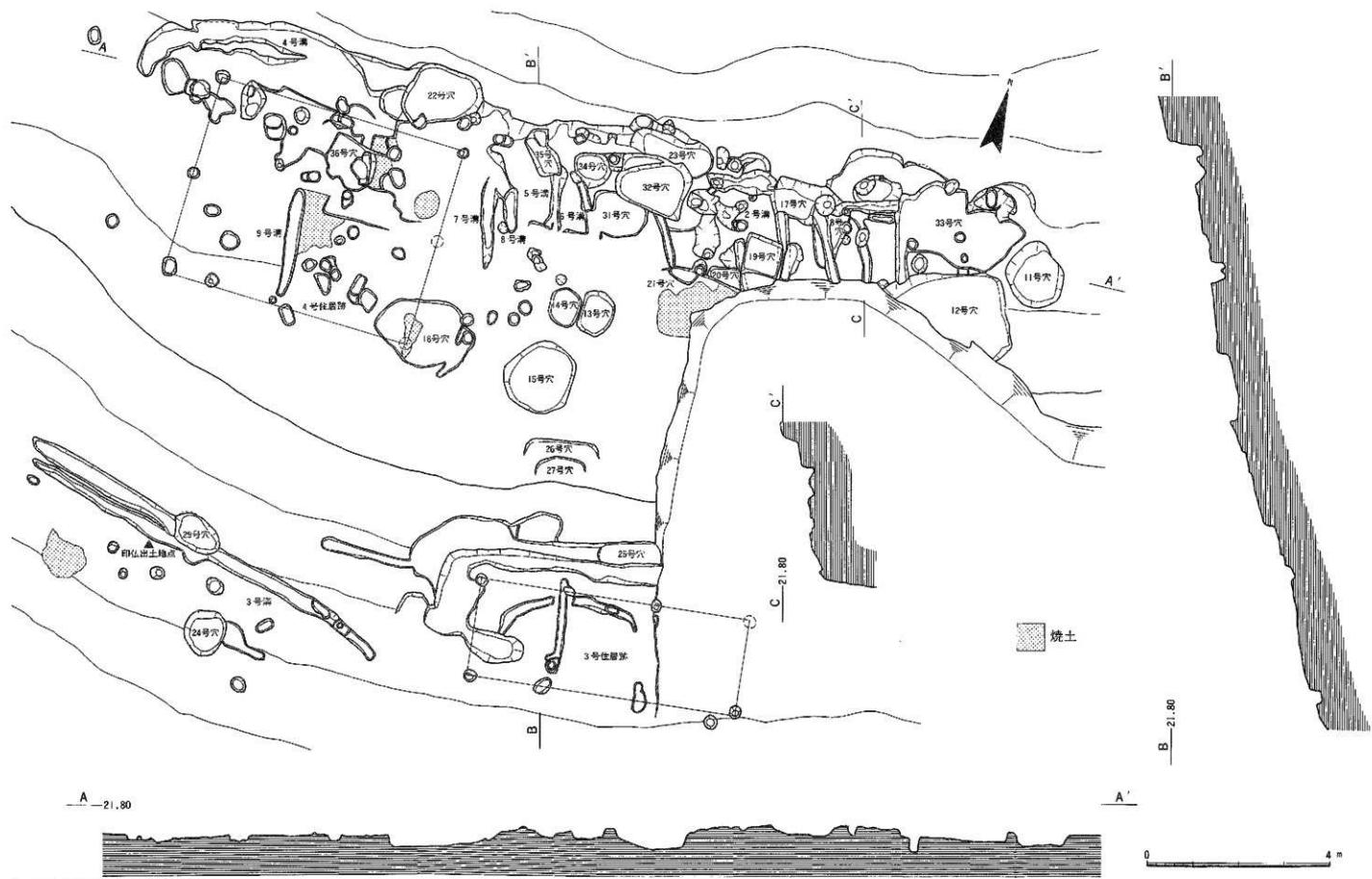
床面遺物 床面には、無高台の杯の焼成不良品が大量に残されていた。最終操業時に焼成失敗したために、そのまま遺棄されたものと考えられる（図版第2-1）。この杯は、外面の一部を除いて、大部分があたかも黒色土器を思わせるような、黒色ないし黒褐色を呈するという際だった特徴を有していて、他の土器と容易に区別がつく。器種はほとんどが無高台の杯である。焼成部の奥部では、焼き台の上に正位で置かれたままのものもあったが、大部分の杯は破片となり、床面に重なって堆積していた。これは、須恵器焼成のあり方を考えるうえで非常に重要な資料となりうる。この他にも窯体内からは、須恵器・土師器をはじめ、七輪・鉄器などがいずれも遺棄された杯の上に重なって出土している。

灰層 灰層は前庭部と推定される部分の前面の斜面に扇状に広がる。規模は幅・長さとも約15m（水平距離）で、末端は谷部にかかる。灰層の厚さは前庭部付近で約15～20cm、斜面下方の谷部にかかる部分では約60cmにもおよぶ。出土須恵器は非常に多く、整理箱で300箱以上である。

（山本）



第4図 第1号窓跡実測図 ($^1/80$)



第5図 造構主要部実測図 ($1/80$)

② 段状造構（第4図、図版第3の2・3、同第4の3）

第2号段状造構 第1号窯跡の西側に位置し標高20.5m～21.5mを測る。L字状に削平された南北に約15m、東西約1.5mの大きさである。この削平された北側寄西壁には溝がある（4号溝）。その他、穴や焼土、溝も多く確認されている。これらはすべて段状造構に伴うものではなく、個々の関係は不詳であるのでこれらを総称して、段状造構と呼称した。第2次調査で検出した第1号段状造構と同じ標高に位置する。

③ 住居跡（第4図）

第3号住居跡（図版第4の2） 第1号窯跡の西側に位置し、標高は18.5m～19.5mを測る。住居跡の東側は掘削により消失している。主柱穴1間×3間の掘立柱建物で、柱穴の外側に沿って浅い溝がはる。北側に壁面状の立ち上がりを認めるが、平坦面を作り出すための削平であろうか。柱穴の掘り方は径30～40cm、深さ30cmと深い。その他の溝や穴が検出されていることから、他遺構の重複が考えられるが、明確にはならなかった。

第4号住居跡 第2号段状造構内の2間×2間の掘立柱建物である。4号溝はこれに付随するかもしれない。標高は20.5m～21mを測る。建物内にも溝、穴、焼土等が重複する。この住居跡に伴うかは不明である。

④ 掘土穴（付図1、図版第4の6、7）

第1号窯跡の東側に位置し、標高は18m～20.5mを測る。第38・39号穴は第37号穴の南側に位置し、規模は東西8m、南北5mの不整形な穴であり、覆土層は黄褐色土等による水平堆積が見られ底面は平坦である。38・39号底面の比高は約80cmである。第37号穴は1.5m×0.8mの楕円形で深さ80cmあり、東壁が袋状になる。土馬が37・38号穴より出土しているが、土馬にまつわる事とは無関係である。第2次調査例と同様の例と思われる所以掘土穴とした。

⑤ 穴（第4図、図版第4の4・5）

第10号穴 0.8×0.8mの隅丸方形で、覆土に褐色土層、炭化物層（焼土粒含）があり、底面と壁面に焼土を確認。
第11号穴 1.5m×1.3mの楕円形で、覆土は4層あり、炭化物、焼土を含む。

第12号穴 現在2.4m×2.0mで東側が掘削される。覆土は黒褐色土（炭化物、焼土粒）が主体をしめる。

第13、14号穴 各々1.0×0.7・0.8×0.7mの楕円形で、長軸は東西向で並列している。覆土は1層一暗褐色土、2層一褐色土層である。13号は2層を主体とし、1層が部分的にはいり、14号は1層を主体とする。重複関係は不明。

第15号穴 1.4m×1.6mの楕円形で6層の覆土層があり、完形に近い、多数の土器が出土した。

第16号穴 2.0m×1.5mの楕円形で覆土は薄いが8層あり、炭化物と焼土粒を含み、底面の一部が焼土化している。

第19号穴 0.85m×0.85mのほぼ正方形を呈し、壁高は40cmあり、覆土は暗褐色土層が主体をなし、互層になっており、底面の一部と壁が焼け、底面付近では炭化物が多い。

第22号穴 1.8m×1.1mの楕円形で覆土は12層あり、上部土層は山側より土の流れ込みの堆積をみる。

第24号穴 1.0m×0.9mの楕円形で覆土は2層あり、焼土粒、炭化物を含む。

第25号穴 現在1.4m×0.6mの楕円形であり、第3号住の溝により一部切られて、壁はやや袋状に立ちあがり、覆土は6層あり、すべての層に焼土粒、炭化物が含まれる。

第28号穴 1.3m×1.3mの隅丸方形で、覆土は黒褐色土層（炭化物、焼土粒）が主体をなす。

第31号穴 1.1m×1.0mの方形と思われ、第32号穴により切られており、覆土は明、暗褐色土層である。

⑥ その他の遺構

焼土 9号溝付近、21号穴、36号穴、印仏出土付近で確認したが、どの遺構に付隨するかは確認できなかった。

溝 多くの溝が検出されたが、遺構の重複等があり、用途と、どの遺構に付隨するかは確認できなかった。

谷 南西より、丘陵に沿って流れしており、数回の流れがわかる。幅は3～6mあり、Ⅲe層一黒揚（泥炭層）粘質土、Ⅲf層一暗灰褐色砂質土層に、たくさんの遺物が検出された。

（斎藤）

(4) 遺物 (第6~14図・図版第6~13)

出土した土器は、膨大な量にのぼり、そのすべてを報告することは不可能である。そこで遺構単位あるいは出土地区ごとに分けて、それぞれの代表的な器種を報告することとする。なお、出土土器の大部分を占める須恵器の分類にあたっては、平城宮調査報告〔奈文研 1962・1976他〕を参考に、器形の違いをA・B・C…で、法量差をI・II・III…であらわすこととする。杯類についてはさらに、体部に沈線を有しないaと有するbに分けたものもある。器種名や器形については2号窯での分類〔上野・池野 1980〕をできるだけ踏襲したが、一部改変した部分もある。

① 第1号窯跡床面・焼き台 (1~20)

前述したとおり、床面から口径12.5~15cmの杯A II a (1~15) が大量に出土している。ほとんどが焼成不良品で、生焼け・ヒビ割れが目立つ。重ね焼きを示すように、一番上に置かれた個体の内面全体と下に置かれた個体の口縁部を除いて黒色土器のような色調を呈する。外底面に「一」状のヘラ記号が多い(約43%)。

焼き台には杯A II a (16~17)、杯B II b (18)、杯B III a (19)、壺蓋II b (20)の他に杯蓋・腰片などがある。

② 第1号窯跡覆土 (21~40)

須恵器では杯蓋A II (21~24)、杯A II b (25)、杯B II a (28)、杯B III a (27・29・30)、杯B III b (26)、杯B IV (31)、杯D I (32)、壺C (36)、壺E II (35)、壺道具(33・34)などがある。29は口縁部が若干外方に開くもので、杯F類に類似する。35は口径約31cmをはかり、把手が付く可能性が強い。

土師器には壺(37)、腰(38~40)、鍋(39)がある。37の壺は、須恵器A IIと同じ器形である。外面全体と口縁部内面は赤彩されている。腰は長胴形の大型のもの(38)と、小型のもの(40)がある。鍋は口径約33cmをはかるほぼ完形品である。外面は、胴上部がカキ目、中央がヘラケズリ、下半から底部にかけて平行タタキが施される。内面は、上半部がカキ目、下半部がハケ目で一部同心円文が残る。

③ 第1号窯跡灰層 (41~120)

内容・量とも一番豊富なので、ここではあわせて分類の基準もできるだけ記述することにする。

杯蓋 (41~46) 杯蓋はA~Eに分ける。Aは扁平な宝珠形つまみを有する。端部は断面三角形で短く下方へ曲げるものである。天井部はヨコナデ・ヘラケズリで調整する。口径でA I (径17.5cm前後)、A II (14~16cm)、A III (13cm)に分類できる。41~43はA IIに含まれる。B (45・46)は天井部が平坦で、肩部から端部にかけて弧状に開く形態のものである。天井部には2本組の沈線を數か所めぐらしている。口径は18.5~20cmで、杯蓋としては大型である。Cは、環状のつまみを有するもの、D (44)は扁平な宝珠形つまみの外側にさらに環状のつまみを加えるものである。変形の宝珠形つまみを持つものはこの他にも若干ある。Eはつまみの無いもので、天井部はヘラキリのままである。C・E類は1点づつの確認している。

杯 (47~69・72) 杯は無高台のA、高台のつくB、体部中ほどに後をもつ無高台のC類、同じく後をもち、高台のつくD類、口縁部が外反する器形の無高台のE類、同じく外反し高台のつくF類に分類する。

A類はさらに、口径15.7~16.2cmのA I (51)、11.6~14.9cmのA II (47~50)、10~11cmのA III (72)、9cm前後のA IVに区分できる。Bは、口径19.0~19.6cm、器高4.3~6.4cmのB I、口径14.3~17.6cm、器高4.5~7.8cmのB II (53~58)、口径12~15.3cm、器高2.7~4.9cmのB III (59~63)、口径9.8~11.5cm、器高2.9~4.3cmのB IV (64~67)、口径7.8~8.6cm、器高3.4~4.5cmのB V (68)に細分できる。杯A・Bの器面調整は、基本的には内面及び体部外面はヨコナデである。底部切り離しはヘラ切りで行われる。70は杯Aの重ね焼きを示す。B IIには体部外面に沈線を持つものが多い。35は口縁部端部が若干肥厚し、角ばるものである。A IIIに属する72はヘラケズリされた底部からまるく体部が立ち上る。口縁直下に沈線のめぐるものとそうでないものがある。69はF類である。52は口径に比べ器高が著しく高いもので底はやや丸味をおびる。

皿 (73・74) 高台のつくBと、無高台のAに分ける。Bはさらに口径によって、23cm前後のB I (73)、20cm前後のB II (74)、17cm前後のB IIIに区分できる。B I・B IIIに付く高台は細くて高いが、B IIに付く高台は低い。Aには有孔のもの (71) とそうでないものがある。

高杯 (81) 杯部の径22.5cm、器高13.5cmの81と、杯部の形態・法量は不明だが、一まわり小さい脚部のものがある。

壺 (75~78) 主として壺A・D類にかぶるものである。口径18.2cmのI、12.5~15.0cmのII (75・76)、7.2~9.4cmのIII (78)、5.2cmのIV (77) に细分できる。宝珠形つまみは扁平なものが多い。天井部や体部に沈線のめぐるものや、天井部に三孔を有するものなどがある。

壺 (83~87・88・89・90・93~99・103・107) A~Jに分類した。Aはいわゆる短頸壺である。体部径によって26.0cmのA I、18.2~23.2cmのA II (96・97)、14.4cmのA III (89)、8.8~11.6cmのA IV (87)、体部径11.4cm、器高3.3cmのA V (86) に细分できる。頸部には蓋をかぶせて焼成した痕跡が残るものが多い。一般的には体部外面下半にはヘラケズリを行い他はヨコナデで仕上げるものが多いが例外もある。B・Cは無蓋の短頸壺である可能性がある。B (90) は、球形の体部で、口縁部がやや外反するものである。Cは肩のやや角ばる形態となる。器高が18cmのC I (95)、5.1cmのC IIがある。D (103) は大型の有蓋短頸壺で、肩に環状の把手が付く。体部は外面に平行タタキ、内面に同心円文が施される。Eはいわゆる長頸壺である。体部径が16~19cmのE I (93・94)、13.6cmのE II、11cm前後のE IIIに细分できる。頸部及び肩部に沈線をめぐらすものが多い。Fはいわゆる広口壺である。体部径21~24cmのF I (98・99)、8.8cmのF II (85) がある。G (84) は低い器高に外反する口縁部がつくもので、口径が体部径を上まわる。I (107) は長胴の体部に外反する口縁部がつくもので、体部外面には格子タタキとヘラケズリ、内面には同心円文が残る。Jは口縁部が不明であるが、肩が鋭く折れる。H (83) は小型の壺で、やや扁平な体部に外反する口縁部がつく。

平瓶 (82) 提梁の付かないAと付くBがある。Aはさらに体部径23.7cmのA I、12.0~13.1cmのA II (82)、10.1cmのA IIIに细分できる。

横瓶 (100~102) 法量差が認められるが、整理が充分でないため、とりあえず体部長が32~34cmのI (100)と、25cmのII (102)に分類しておく。外面にはカキ目、内面には同心円文がみられる。101は特殊なもので中央に仕切りを設ける。体部長・口径ともIより大きい。全体に器壁は薄く、外面はハケ目、内面はヨコナデ・ナデで仕上げる。

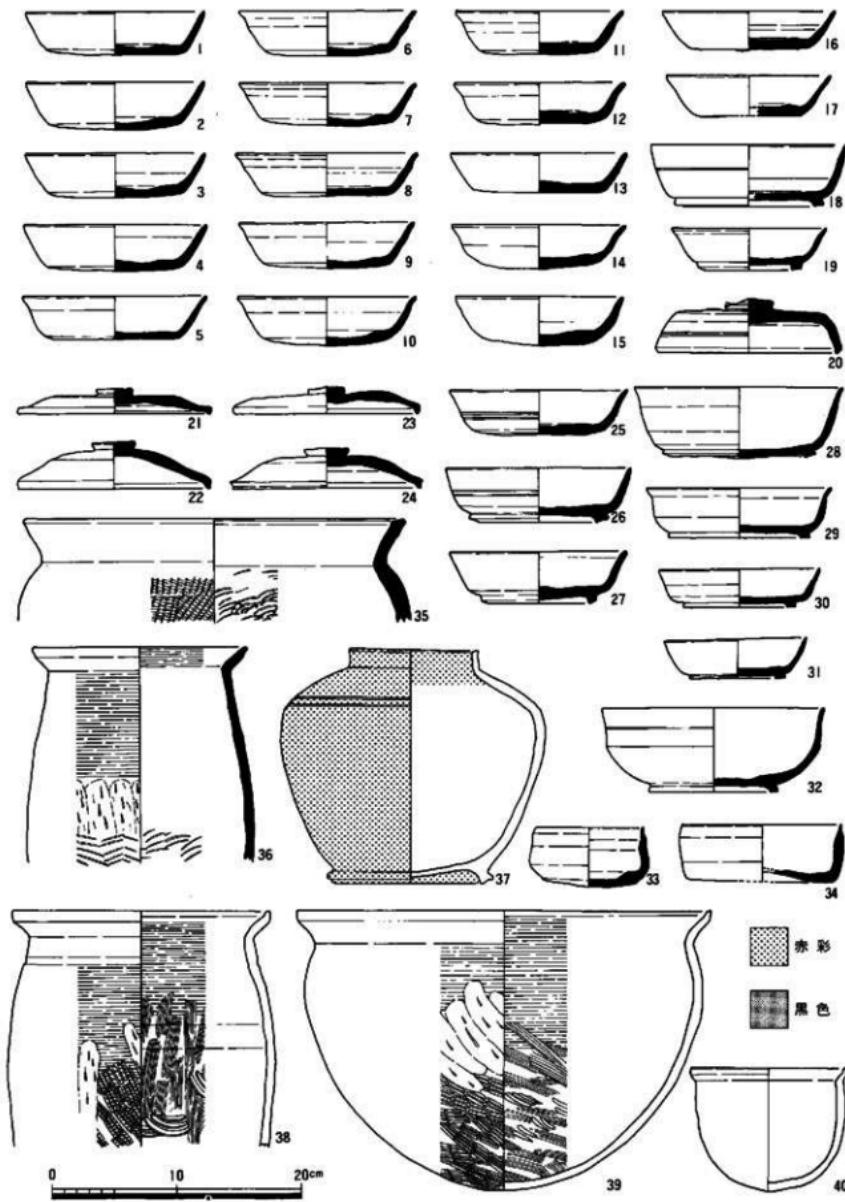
鉢 (88・110) いわゆる鉄鉢形のA、すり鉢形のBの他に、体部がゆるく弧をえがいて立ち上り、口縁部がわずかに外反するD (88)、平底で口縁部が外に開くE、わずかにふくらみながら外方に開く体部に、さらに外反する口縁部のつくF (110)がある。Fは体部下半をヘラケズリし、平底になると考えられる。

盤 (109) 2号窯で出土していたもので、今回さらに破片が増え、把手が付くことが確認された。

壺 (104~108・111) Aは口縁部が強く外反する器形で、頸部外面に櫛描波状文をめぐらす。口径が50~56cmのA I、29cmのA IIがある。Bは口縁部が短く外方に開き、無文のものである。これも口径によって26.2cmのB I、21.2~23.6cmのB II (104)、17.4~18.2cmのB IIIに细分できる。Cは長胴形の上部器體と同一形態のもの。Eは頸部のしまりが弱く、体部上半に把手がつくものである。口径により、38.5cmのE I (105)、34.3cmのE II、30.0~30.8cmのE IIIに细分できる。G (106)は頸部がほとんどくびれずに、口縁部が直立するタイプである。2号窯で報告されたD・Fはまだ確認していない。

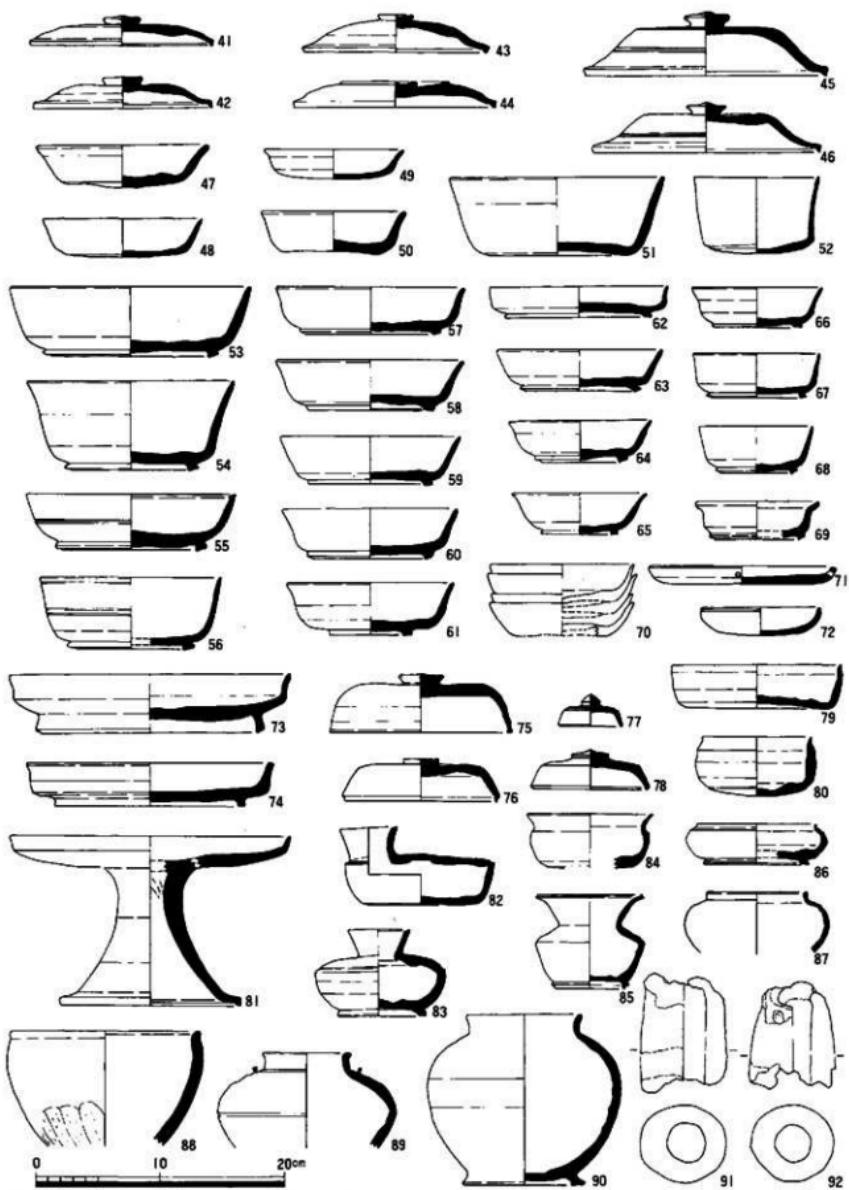
土師器・羽口 (91・92・112~120) 112~114は内外面赤彩の杯である。115~117は小型の土器。118は口縁部がやや内湾する鉢で、鉄鉢形となるかもしれない。119は高台の付く杯、120は器形は不明だが、No18C遺跡から類例が出土している。この他にふいごの羽口 (91・92) が出土している。

なおヘラ記号は-・×・*・=・▽・△などがある。そのうち多いのは-・×である。

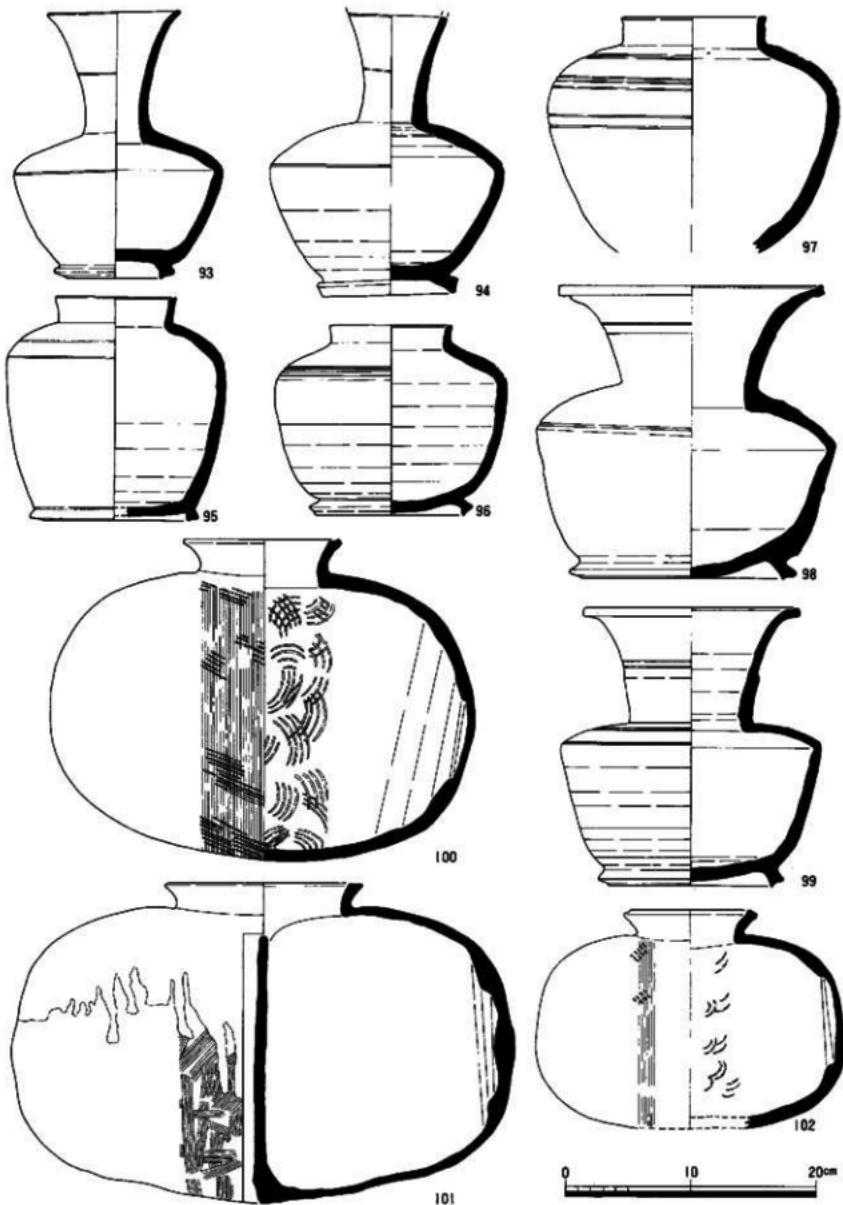


第6図 第1号窯跡出土遺物実測図 (1/4)

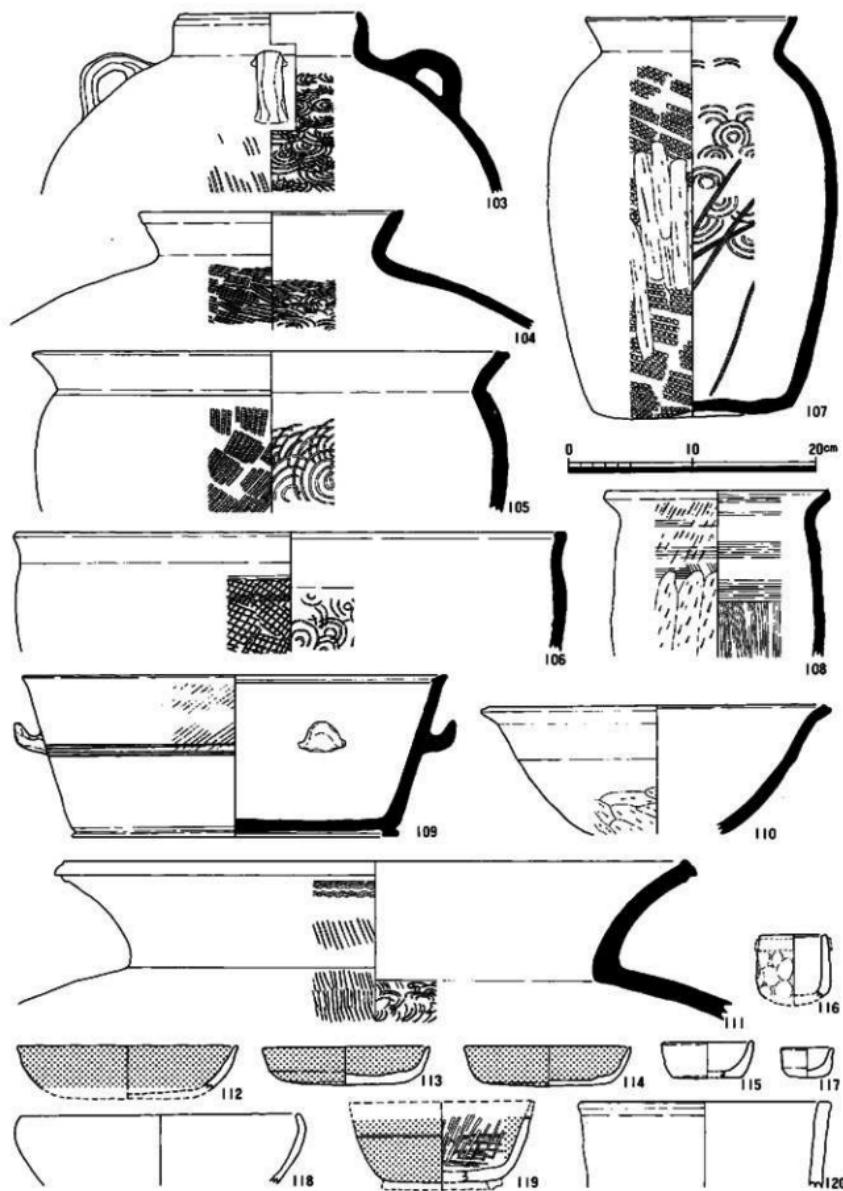
1~15 底面 16~20 焼き白 21~40 瓦土



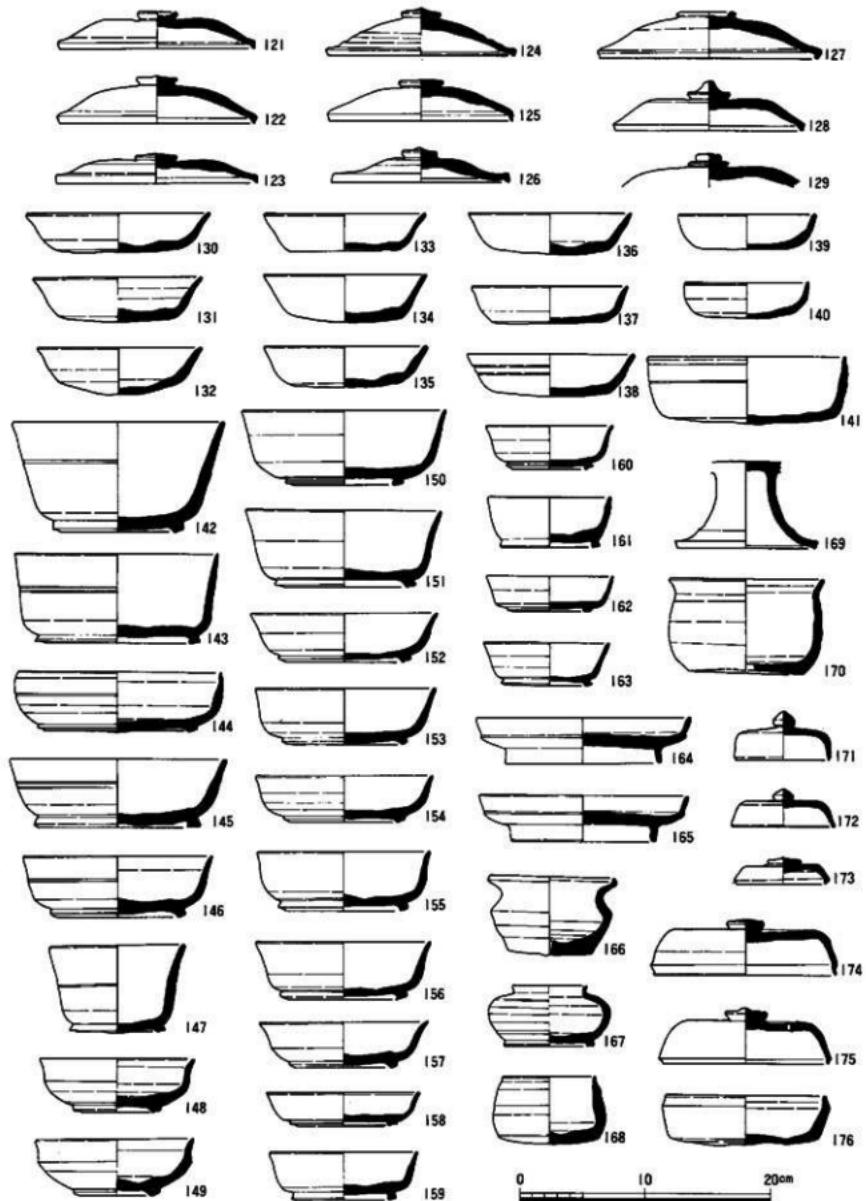
第7図 第1号竪跡灰層出土遺物実測図(1/4)



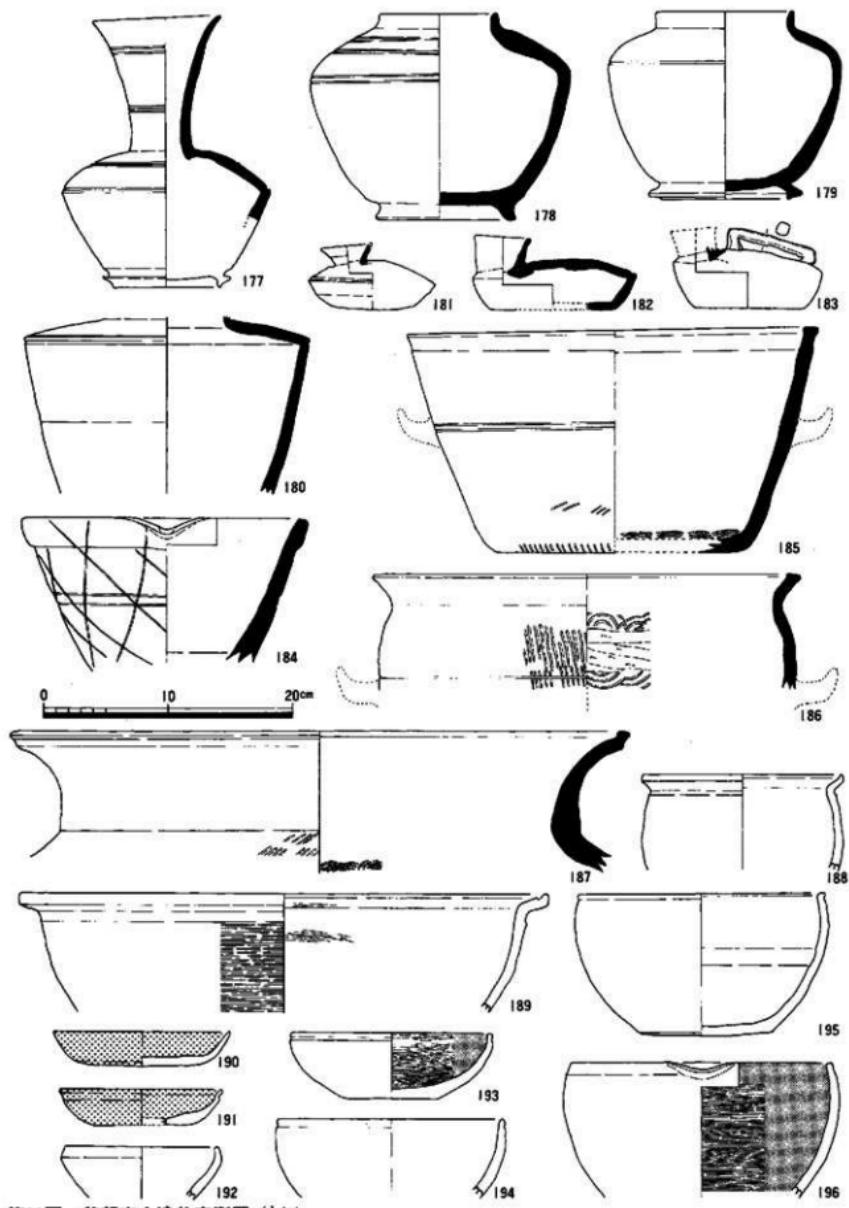
第8図 第1号竪跡灰層出土遺物実測図 (1/4)



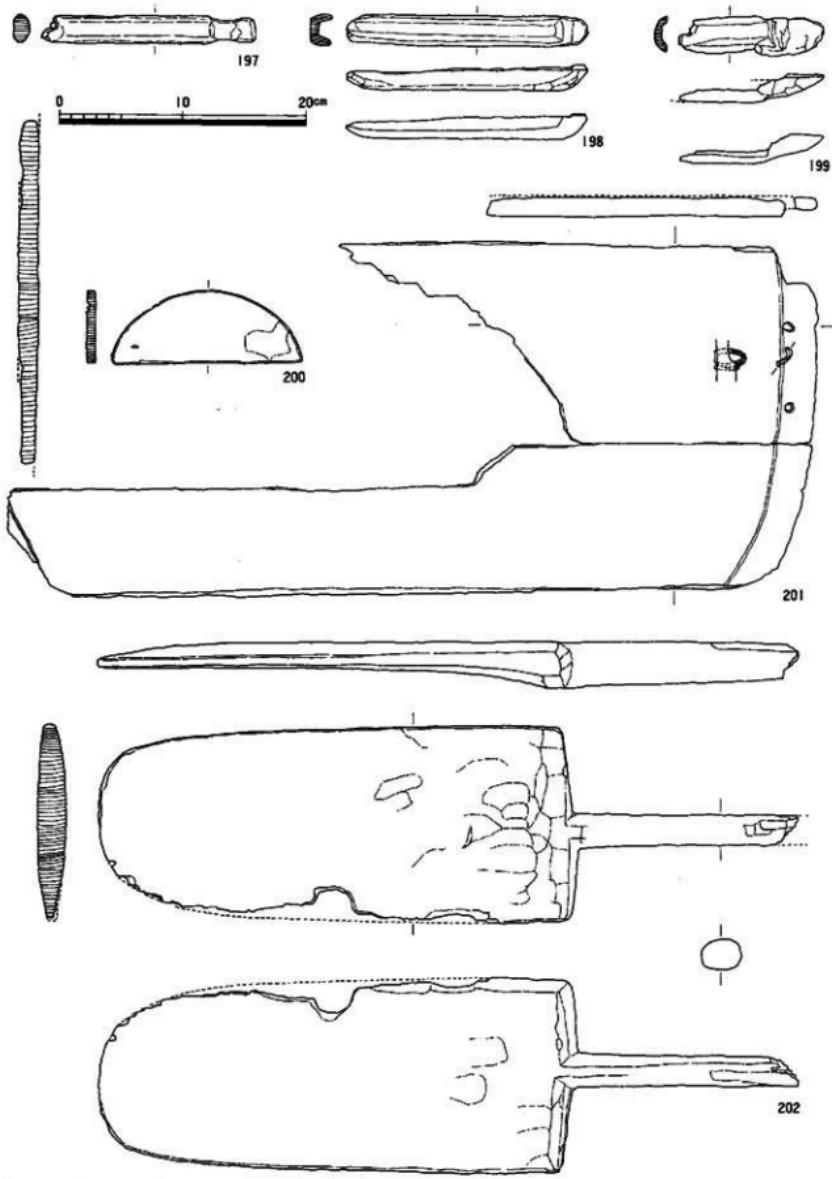
第9図 第1号竪跡灰層出土遺物実測図 (1/4)



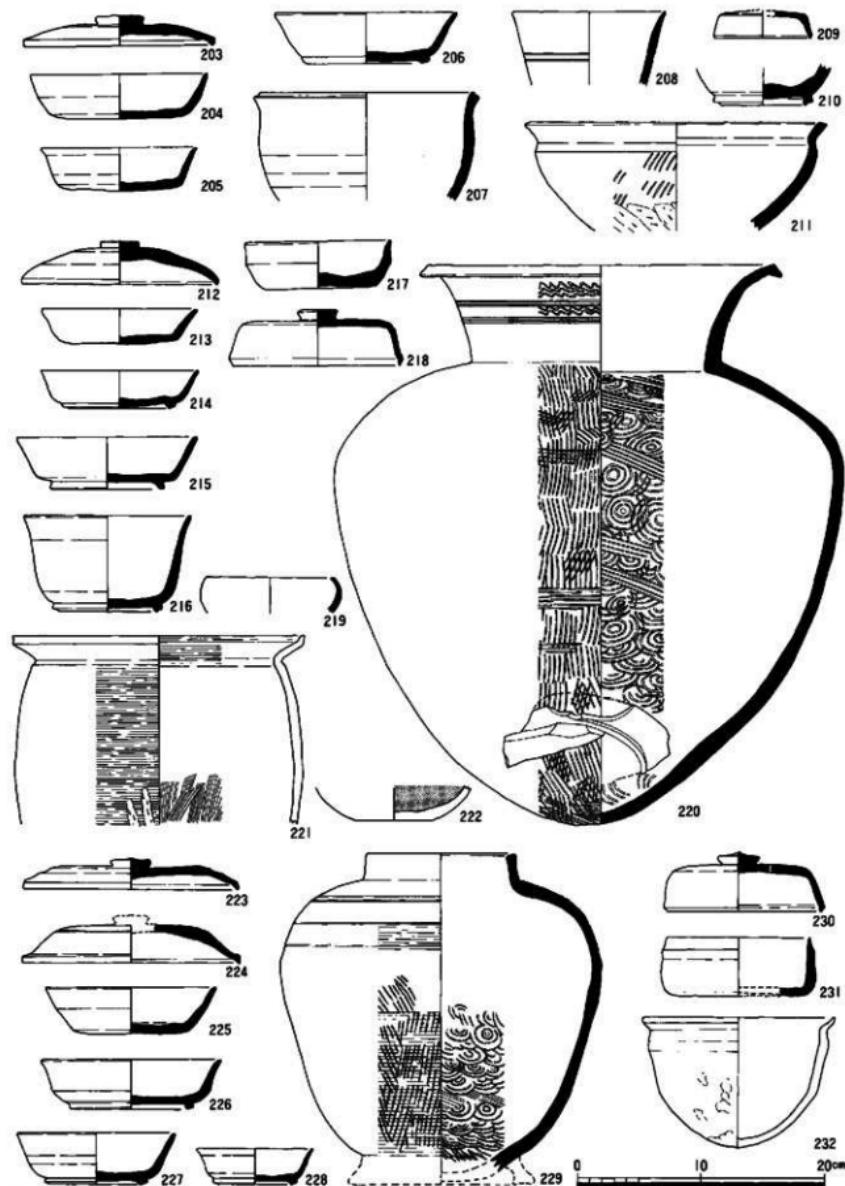
第10図 谷部出土遺物実測図 (1/4)



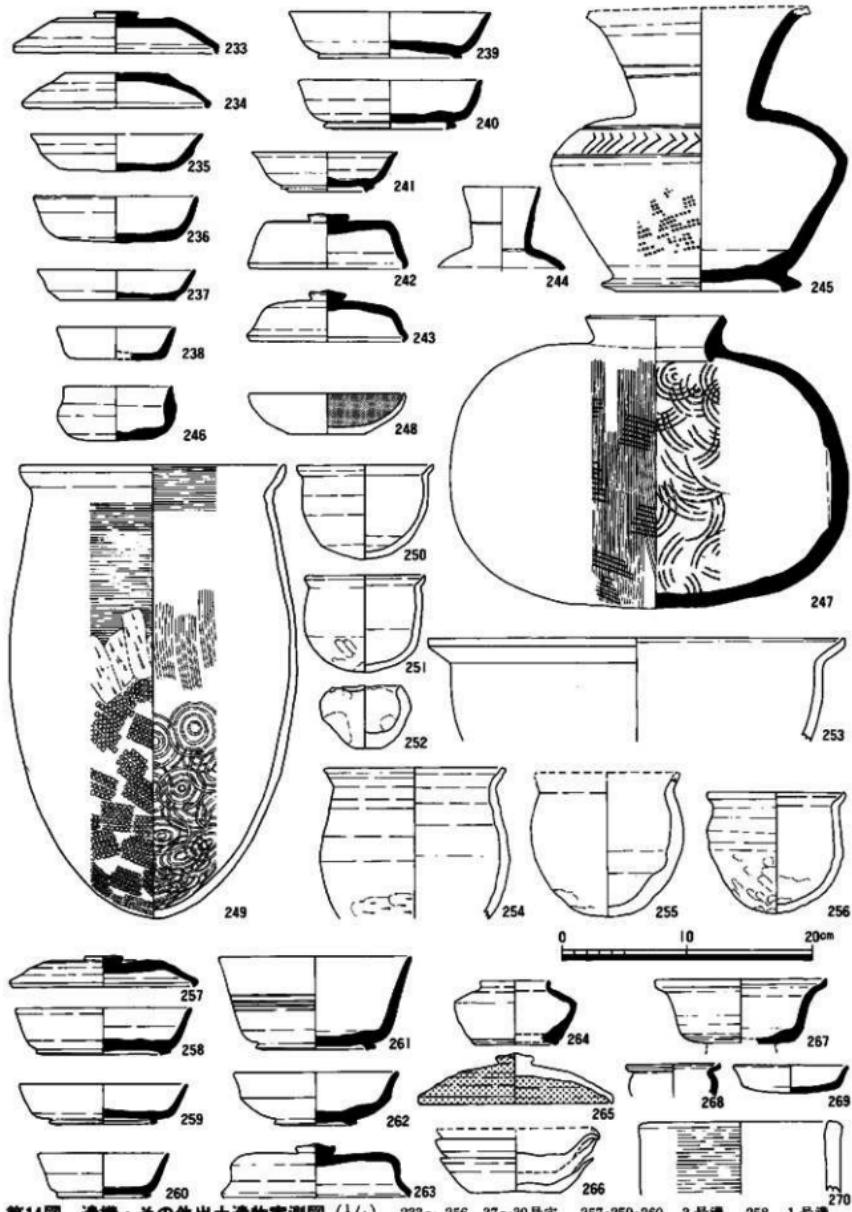
第11図 谷部出土遺物実測図 (1/4)



第12図 谷都出土遺物実測図 (1/4)



第13図 造構出土遺物実測図 (1/4) 203~211 第3号住 212~222 12~34号穴 223~232 第2号段状遺構



第14図 造構・その他出土遺物実測図 (1/4) 233~256 37~39号穴 257~259~260 3号溝 258 1号溝

④ 簃部 (121~202)

X-2~2、Y24~27区付近の谷底からも豊富な一括資料が出土している。この遺物は、1号及び2号窯や、周辺斜面に存在した住居等からの廃棄遺物が混在している可能性が強い。

杯蓋はA II (121~126)が多い。127は直径3.8cmの環状のつまみが付くC、128・129はつまみが通有の宝珠つまみと違う形態のものである。杯は、A I b (141)、B II a (130~137)、A II b (138)、A III a (139)、A III b (140)、B II a (150・151)、B II b (143~146)、B III a (152~157)、B IV (158~163)が出土している。139・140は底部をヘラケズリする。169は高杯の脚部である。164~165は皿B III、170は鉢Eである。174~175は壺G II、171~173は同IIIで、175の天井部には穿孔がみられる。166は壺Gに含めておくが、底部中央に穿孔されている。168~176は庶道具と考えられる。壺はA II (178~179)、A IV (167)、E I (177)、J (180)がある。平瓶は、提梁の付かないA II (182)、A III (181)と提梁の付くB (183)が出土している。184は鉢B Iで、体部外面には斜格子状の沈線文様があり、片口となる。185は盤Aをさらに深くした形態で、高台はつかない。一応鉢としておく。186は壺E II、87は壺A Iである。

土師器は内外面赤彩した杯 (190~191)、内面黒色の椀 (193)、鉢 (194~196)、鍋 (189)、壺 (188)などがある。鉢 (196)は内面黒色で片口となる。

土器類とともに大量の木製品・自然木が出土しているが、そのうち加工痕のあるものは、木材の切り屑、焼痕のある木片などを含めて約1,000点である。現在整理中であるため、代表的なものを報告しておく。198・199は舟形である。198はほぼ完形である。実測図右側が船首と考えられる。船尾はやや低くなり、底面は平底に近い。199は船首部分のみが残るもので、丸底になる。201は精円形の曲物の底もしくは蓋板である。周辺部は段をつけて薄くしており、穴が2か所と側板をとめるためと思われる樹皮のとじひもが残る。200も小型の曲物の底もしくは蓋板。197は浅いくびれを有する棒状品である。202の鐵は、柄の半分以上を欠くが、身はほとんど完全に近く残る。前面は肩部から序々に薄くしていく、後面は柄から直線的に作る。刃先には、鉄刃を接着した痕跡はない。

⑤ 第3号住居跡 (203~211)

須恵器では、杯蓋A II (203)、杯A IIa (204・205)、杯B IIa (206)、壺蓋III (209)、鉢D (207)、鉢F (211)などが出土している。211は体部上半が平行タタキ、下半にヘラケズリが施されるもので、平底になる。

⑥ 第2号段状造構 (223~232)

須恵器では、杯蓋A I (223)、同B (224)、杯A IIa (225)、杯B IIIa (227)、杯B VII (228)、壺蓋II (230)、壺A I (229)、庶道具 (231)が、土師器では壺 (232)が出土している。229は他の壺と調整が異なり、体部外面にはカキ目と平行タタキ、内面下半にはハケ目と同心円文が残る。

⑦ 穴 (212~222・233~256)

杯C (217)・土師器壺 (221)は12号穴、壺蓋II (218)は22号穴、杯B IIIa (214)・鉢A II (219)は23号穴、壺A II (220)は24号穴、杯蓋A II (212)・杯B III (215)及び216は25号穴、内面黒色の土師器椀 (222)は33号穴、杯A II (213)は34号穴の出土である。粘土採掘穴と考えられる37~39号穴出土の土器としては、杯蓋A II (233)、同E (234)、杯A II (235~237)、杯A IV (238)、杯B III (240)、杯IV (241)、壺蓋II (242~243)、壺E III (244)、壺F I (245)、横瓶 (247)などの須恵器と、土師器がある。土師器は内面黒色の椀 (248)、長胴型の壺 (249)、器高の低い小型の壺 (250・251・254~256)、鍋 (253)、小型土器 (252)などがある。

⑧ 溝・その他 (257~270)

第3号溝から杯蓋A II (257)、杯B III (259)、杯B VI (260)が出土している他、包含層などから、壺C II (264)、赤彩土師器蓋 (265)、脚が付くと思われる鉢 (267)、杯A IV (269)などが出土している。

(山本)

(5) まとめ

① 工跡について

今回の調査では、須恵器窯跡とともに、その周辺に分布する諸施設も明らかにすることができた。第2号窯との中間部斜面には、掘立柱の可能性の強い建物が2棟検出されている。2号窯近くと対岸斜面ではカマドを有する堅穴住居が検出されており、これを須恵器生産に係わった工人達の一時的住居と考えると、掘立柱建物は、あるいは作業場的な性格を有するのかもしれない。段状造構については櫛屋が存在したかどうか不明であるがこれも作業場として機能していたと考えられる。窯跡北東側の穴は、粘土採掘穴と考えられ、同様な例は2号窯にも西側に隣接してみられる。須恵器の素地を作るための粘土を採掘した穴とは考えにくく、むしろ、窯の補修用の粘土を採掘したものであろう。遺跡内には、粘土の集積場所や水溜などと考えられる遺構は発見されていないので、須恵器の成形までは別の場所で行い、ここでは焼成を中心とする作業が行われていた可能性が強い。

② No.15遺跡の須恵器について

今回出土した須恵器は、大きく、第1号窯灰層と、他の谷部や遺構出土のものに分けられる。厳密には、第1号窯焼成須恵器として取り上げられるものは、窯体床面残存須恵器と灰層出土のものに限るべきかもしれない。第15号器種表では一応それぞれの代表例を分けて示してあるが、両者の比較からは、大きな違いを認めることはできない。また第2号窯出土須恵器との比較でも同様で、これらはいずれもほぼ同時期のものと考えられる。ちなみに第1号窯と第2号窯出土品で接合する資料が2点確認されている。それぞれ一方は焼き台として二次焼成を受けており、焼成順序が推定できるものであるが、1号→2号と2号→1号の両方があり、2基の窯跡は一定期間並行して焼成が行われた可能性が強い。

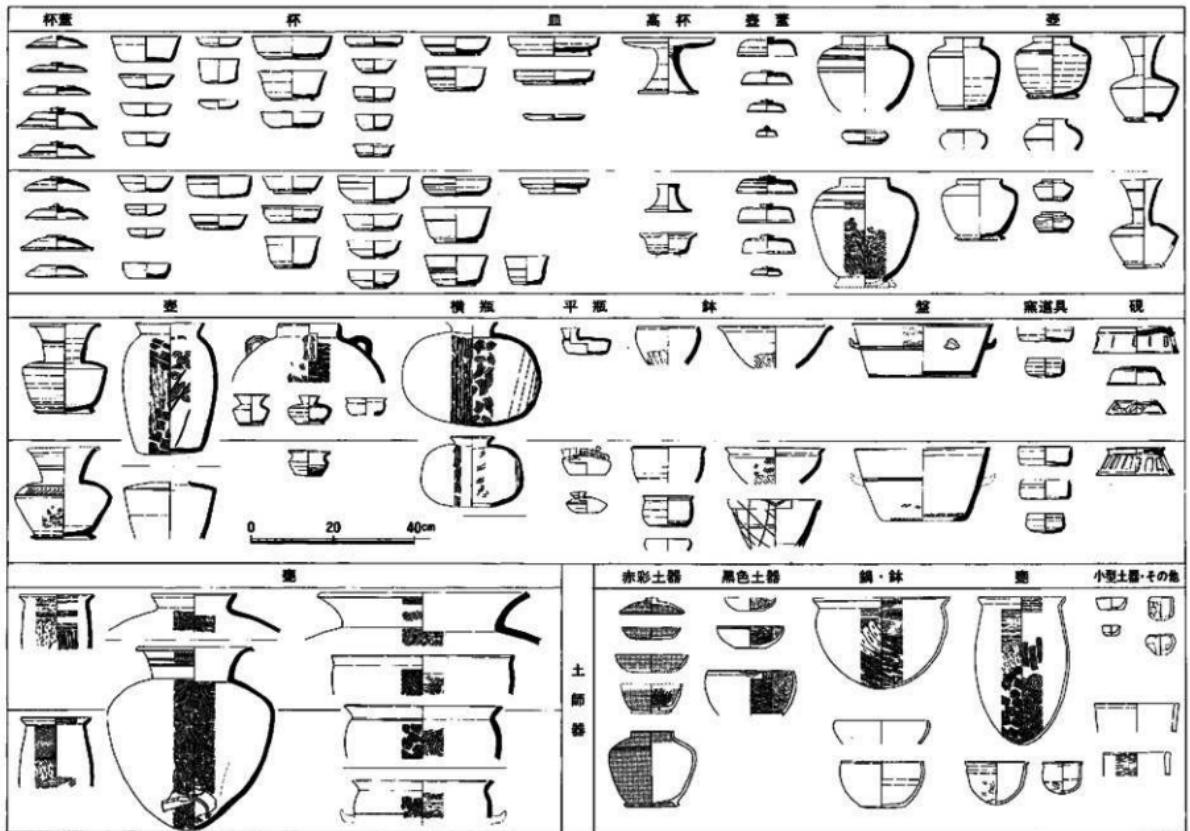
須恵器の器種構成は、第1号窯とその他の遺構、谷部出土品では、杯蓋5種6類、杯5種12類、壺蓋1種3類、壺10種17類、瓶類2種5類、高杯1種1類、皿2種4類、盤1種1類、鉢5種5類、甕5種8類など計37種62類以上になり、2号窯出土品を含せると奈良時代前半期の須恵器のはとんどの器種を網羅していることがうかがえる。須恵器の器種と形態は、すでに指摘されているように〔上野・池野 1980〕〔吉岡 1983〕、畿内中板におけるそれとよく類似しており、実年代についてもほぼ平城宮II段階（略年代 730年前後）と考えてまちがいないだろう〔小笠原・西 1976〕。今回の出土品で時に注目されるのは、

- ① 2号窯ではほとんど目立たなかった皿類が、それほど多量ではないにしろ一定量焼成されている。
- ② 平瓶の中に提梁を有するものが一部出現する（谷部出土）。
- ③ 大型の杯B類の出土が目だつが、法量のばらつきは大きい。
- ④ 杯蓋B~E類・杯B II b・B III b・D類などいわゆる金属器模倣形態のものが多くみられる。

などである。これらの点は、従来の幅年の位置付けと矛盾するものではなく、むしろ補強する材料となっている。県外に類例を求めるに、石川県では若緑3号窯出土の須恵器に類似するが、杯Aの法量では一段階古い春木3号窯との中間的な大きさとなっており、若緑3号窯期の中でもやや古く位置づけられそうである〔吉岡 1983〕。また、東海地方猿投窯の編年〔檜崎 1983〕に対比すれば、8世紀前半の高藏寺2号窯式に並行しよう。一部の特殊な器形の須恵器には猿投窯跡群にみられるものに類似するものがあり、注目される。

⑤ 射水丘陵における須恵器窯の変遷

射水丘陵での須恵器生産は、6世紀末に開始された。良質な粘土と豊富な燃料を背景に、いずれも下条川の西側、射水丘陵西半部に立地している。6世紀末から7世紀初頭にかけての窯跡としては、生源寺窯跡〔塙 1964〕・流団No.7窯跡〔上野他 1982〕・流団No.16-3号窯〔上野・池野 1980〕がある。全国的にみても、この時期は須恵器生産の盛期に当り、地方窯が大幅に拡張する時期とされている〔田辺 1970〕。窯跡のあり方は一様ではない。比較的



第15図 No.16遺跡出土土器器種一覧 (須恵器の上段は1号窯灰層、下段は谷部及びその他の遺構出土) (1/12)

短い期間のうちに連續して5基の窯跡を構築して操業を行う例（流田No7窯跡）や、1基单独で構築されて、ごく短い期間で操業を終える例（流田No16-3号窯）など、様々な様相がみられる。また7世紀中葉のものとして流田No21窯跡があるが、7世紀前半と7世紀後半から8世紀初頭にかけての窯跡は今のところ未発見である。この時期、一時的に須恵器生産が衰退するのか、あるいは生産地が移動するのか、今後の調査をまたなければならない。

奈良時代に入ると再びこの地域の窯業は活気を呈する。流通業務団地内で、8世紀前半（平城宮II段階）と考えられる須恵器窯跡は、No16-1・2号窯を含めて3群認められる（No18A窯跡・No30窯跡）。須恵器の形態的特徴は、前述したように、非常に畿内色の強いもので、律令体制の確立を契機として、須恵器生産の隆盛をはかったものと考えられる。しかしながら、この地域における須恵器生産も長くは続かず、8世紀中頃以降、生産地は、下条川左側の射水丘陵東部地域にその中心を移すのである。

東部地域の窯跡としては、天池1・2号窯（8世紀前半～中葉）〔舟崎 1974〕、南大門山II窯跡（8世紀中葉～後半）〔関他 1983〕、石太郎F窯跡（8世紀中葉～後半？）などが知られている。窯跡群のこのような移動がどのような原因によって行われたのか、非常に興味のあるところである。この問題は、周辺域の集落跡をはじめ関連遺跡の調査を進めながら、今後明らかにしていく必要がある。

（山本）

④ その他の遺物

土馬（第16図1～19、図版第12の10～16） 以下説明は図のNoを使用し、总数19点を出土区に分類する。①窯 1、6、7、11、17、18 ②穴 3、15、③段状遺構 10、19、④谷部 2、4、8、13、14、16、⑤その他 5、9、12。①は窯体覆土（上層）と灰層（谷部近く）。②は採土穴No37・38出土。③は第2号段状遺構。④は谷部の内側より多くまとまって出土。⑤は遺構外である。形状は裸馬が主であり、鞍馬のみ出土。谷部では舟形木器と共におり、流田No21遺跡では採土穴とは別種な単独穴より土馬が確認された。時期を異にするが、じょうべのま遺跡（橋本1975）では馬形木製品がSA037より出土。馬は水、又は祭事に用いたと推定される〔水野 1974〕。

（斎藤）

鳥形土器（第16図20～25、図版第14の12～16） 須恵器は脚部4・尾部1の破片が谷部と第1号窯跡の灰層より出土した。21は土器の接合面で割離した尾部である。23～24は脚部で24の裏面は中凹みとなり、25の裏面は平坦である。

20は尾部が第2号窯跡の灰層からの出土し、他の破片は第1号窯跡の灰層と谷部からである。体部には細かい亀裂があり、尾部が剥離することからも焼き損じ品であり、頭部を細かく打ち欠いた上で廃棄したと思われる。現存總高は20.7cmを測る。体部の正面や側面には、細線刻で羽毛を表現し、尾部は格子目状に斜めに描き簡略化する。

体部の成形は内面をロクロナデし、外面を格子目タタキを行った後、1孔を穿ち管状の頭部を付け、閉塞用小円板を胸部にあてる。頭部内と頭部下の内底面に降灰による釉が融着し、焼成時の被蓋はない。左脚部の先端は一部欠くが3本の縦細線刻と横の線刻1本により爪先を表現している。脚部20・23～25は2種類の陸鳥の足を表わしている。

No18遺跡C地区は8世紀前半の工人集落の遺跡で、羽毛を細線刻した破片と水かきを付けた水鳥の脚部の2点の須恵器が検出されている〔上野他 1982〕。弥生・古墳時代には水鳥は惡靈を防ぎ死者の靈を運ぶものと鳥形木製品や鳥形埴輪から言われている。鳥形須恵器の集成28例〔久々 1983〕から時期・地域・用途などにかなり相違が知られる。当遺跡の形態も写実的な表現で、特別な用途のために製作されたと考える。

（上野）

印仏（第4図、第17図1、図版第15の1） 仏像は長さ6.4cm、幅4.5cm、厚さ2.5cmの粘土板に陰刻され素焼きで裏面に簡単なつまみがつく。仏は5.4cm程の座仏で、通肩、両手先を腹前で衣に包み、二重円光、蓮華座付であり、土製印仏としては本邦初例と思われ、遺物に関して西村公制・田辺三郎助〔田辺 1984〕両氏の見解がある。

台座（第17図2、図版第15の2） 1号窯跡灰層（谷部）より出土、灰白色を呈し生焼けである。種類は蓮華座であり、この最上段に蓮内部があり、これは像が上に立つか又は坐す場所であり、これを蓮弁で囲んでいる形を総称して蓮華部と呼ぶ。この蓮内部は形の特徴により時代鑑定ができる、西村分類〔西村 1976〕によれば「どんぶり鉢型」

に属すると思われ、この形態は天平～平安前期中葉の特徴とされる。蓮部の下突起は茎軸と思われ、蓮内部の上面には蓮実の表現は見当らない。蓮弁は7枚と思われ、これは蓮肉上面より弁先は低く、又先は鋭く尖っている。管見では同様な小形の製品は時期を異にするが、例知られる。姫町田原坂遺跡〔狩野・橋本他 1984〕福島県双葉町五番遺跡〔平安時代、表様〕〔渡辺・大竹他 1980〕がある。

陶製印章（第17図3、図版第15の3） 1号窯跡灰層（谷部下層）より出土、焼成良好、灰色を呈し、全高7.2cm、印方面4.2cmのはば正方形、鉢の上部が角、孔を穿ちほぼ末広がり形である。印文は陰刻であり「由」が表現されている。諸国印の大きさ（方二付）と比較すれば小さい。例をあげれば「越仲国印」一天平宝字3年（757年）、神護景雲元年（767年）「越中国印」一延喜10年（910年）等。但し郡印、都印に関しては公式令に記載がなく大小まちまちである。印の特徴としては奈良時代には孔はなく平安時代に有孔と思われる。当遺跡出土の印章は銅鏡印を模倣したことは間違いないが用途としては不明である。時期は異なるが渡辺系窯より陶印の出土例を見る〔愛知 1981〕。（斎藤）

円面鏡（第18図1～9・図版第14の1～5） 出土地区は3・4が第2号窯跡灰層からで、8が第32号穴内で、他は第1号窯跡の灰層および谷部より出土した。1・9は陸が摩滅し使用されている。台脚の透し穴は、1が1個、2が14個、3・4が5個、5が四角形と細溝を3単位で配し、7は6単位の細線刻文様をもつ。9は台脚周りを細かく打ち欠く。鏡面は陸と海を分ける有堤式〔稽崎 1982〕と有溝をもつ無堤式がある。

北陸地方の鏡の集成は吉岡氏によりなされ〔吉岡 1983〕、県内では16遺跡18例が示された。その後小矢部市杉内地床ノ山〔小矢部市教委 1983〕、桜町遺跡、姫町富崎遺跡の各1例とNo21遺跡3例を含め、19遺跡31例を数える。この内28例が圓足鏡〔余文研 1983 b〕で占められ、生産遺跡出土数が20点を数え奈良時代を中心とする。生産開始例は7世紀中葉であり、有・無堤式の両者がみられ、8世紀代では形が多様化、小型化し、地域性を示す。

杯蓋鏡（図版第14の6・7・9） いずれも谷部からで9点が出土した。着墨は杯蓋A IIの天井部内面4例と、A IIIの内面、杯B III・B IVの外底面、杯B IIIの内底面、杯Aの底部片内面各1点で、識字層の存在を物語る。

漆の容器（図版第14の8・10・11） 杯A IIに2点、杯B III 1点を数え、谷部出土である。No21遺跡の3点と9世紀前半の井波町高瀬遺跡に2例が知られ、遺跡での漆利用例の一端を表わしている。（上野）

球形土製品（第18図11・12） 土師質の上製品で用途は不明。12には指頭圧痕が残る。19は土製筋輪車である。（山本）

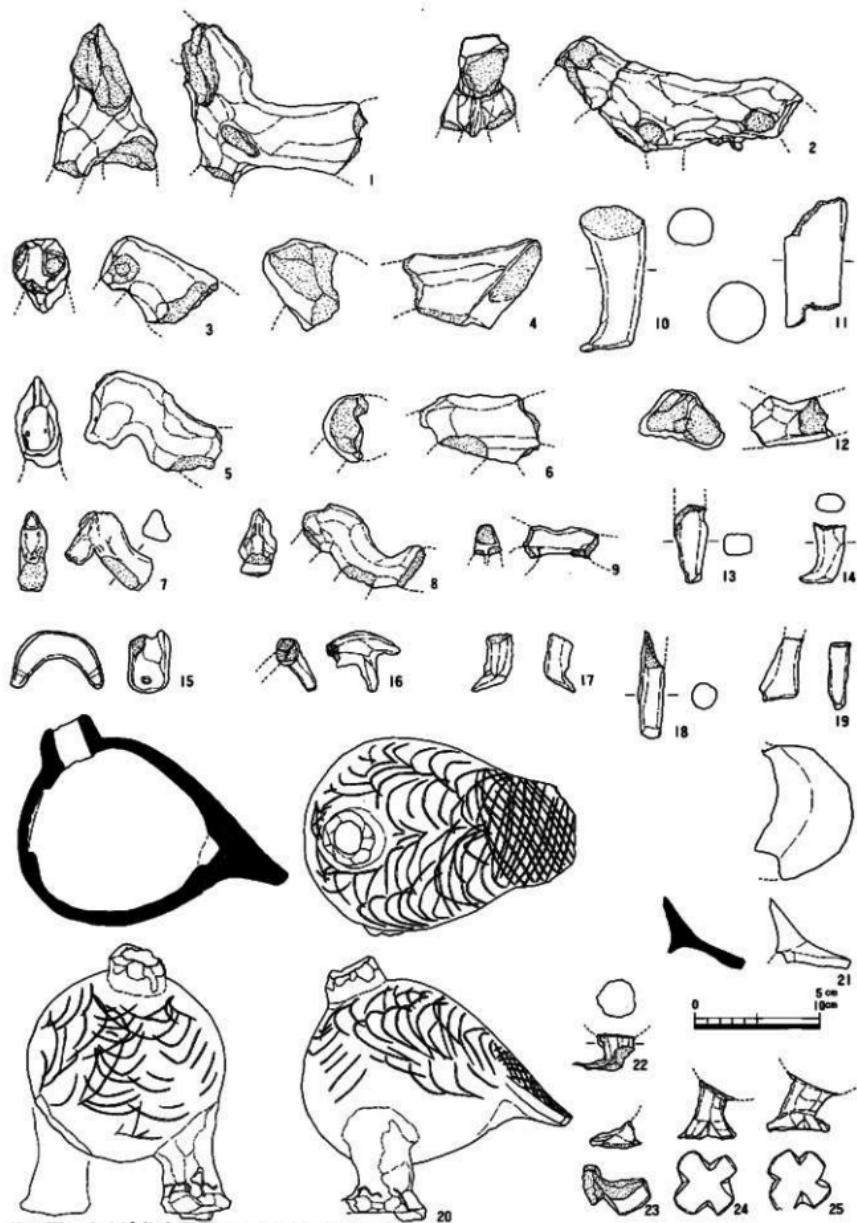
管状土錐（第18図16～18、図版第12の17～23） 総数17点確認されており出土区は灰層、谷部、段状遺構、穴、表土と種々である。全て土師質で体長8cm、胴径4cm、孔径1.5cm、重量110～150g。流団内出土土錐（No21合）を便宜上形態分類すると以下になる。a) 直径1.5cm程度の凸棒に粘土を付け、体部を整形した後にその円棒を引きぬき体形がつくられ体部表面は整形時に付けられた指頭圧痕が残る。（体長8cm、胴径が体長の約2/3、重量110～150g）b) aと基本的に同じで孔と接する上・下端には平面で体部表面に指頭圧痕が残らない。c) 切子玉状の形態を持ち、孔直徑2cm、重量200～250g。d) 体長と胴径の差が1～2cmもので全体的にすんぐりしたもの。橋本氏分類B種〔橋本 1974〕。

この分類に従えば、当遺跡はa)に相当、奈良時代。d)はじょうべのま遺跡〔橋本 1974〕早月上野遺跡〔岸本 1976〕佐伯遺跡〔松本 1977〕等より出土。県下の例より年代を想定すると、c)→a)、b)→d)（古→新）と考えられる。尚富山市丹羽富田町遺跡〔藤田 1978〕の管状土錐（細み）はd)種と同時期又は以後と思われる。（斎藤）

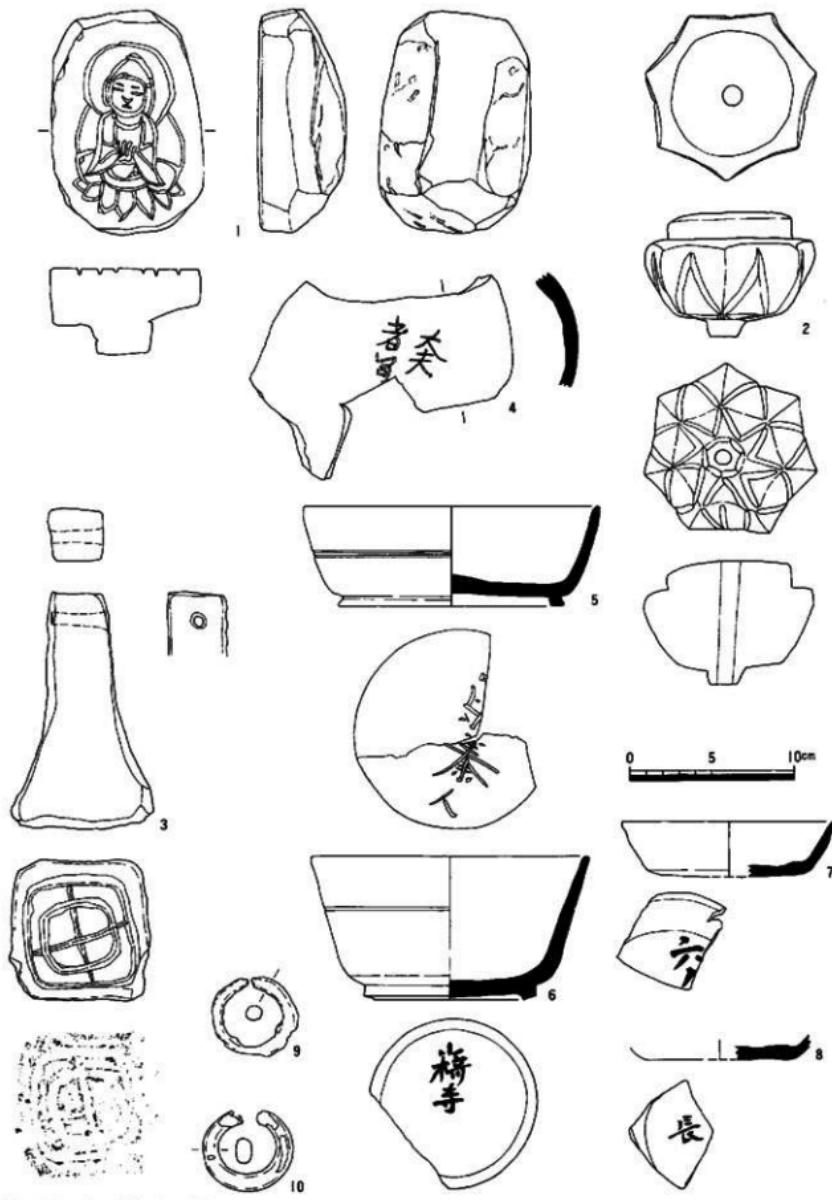
墨書き器（第17図6～8）²⁰ 墨書き器は3点出土している。いずれも谷部出土の須恵器である。

第17図6 「小寺」 杯Bの底部外面、同図7 「六口」 杯A IIの底部外面、同図8 「長」 杯A IIの底部外面。

6の「持」は機の具体字で、寺院名を記したものと考えられる。本遺跡からは上製印仏や仏像台座など仏教関係の遺物が出土しており、寺院と何らかの関連を有していたものと推察できる。古代の射水郡及びその周辺で小寺（橋）



第16図 出土遺物実測図 (1-19・ $\frac{1}{2}$, 20-25・ $\frac{1}{4}$)



第17図 出土遺物実測図 (1~3・9・10は $\frac{2}{3}$ 、4~8は $\frac{1}{3}$) 9はNo.7遺跡 15号住出土

寺が存在したかどうか、まだ確認されていない。遺跡の周辺でも古代の寺院跡は未発見であり、今後の課題である。

ヘラ書き文字（第17図4） 1号窯灰層から出土した横瓶の体部破片で、2行にわたり、「大夫／者以司口」と記す。文意は不明。第2号窯からも「□□秦人」とヘラ書きした文字の例が出土している（第17図5）。 （山本）

耳環（第17図10、図版第5の5、同第15の3） 段状遺構内より出土、中央の鋼環に銀箔をかぶせたもので鈎の為やや黒みがかかる所々落がめられており、その部分に綠青がふいている。長径2.7cm、短径2.4cmのはば正円形、環体の断面長径8mm、短径5mmで扁円形。盛行した時期は後期古墳時代、主に小古墳や横穴の副葬品中に見られ、県下での出土例は主に古墳（丹羽山古墳、城ヶ平横穴群、馬場横穴群、番神山横穴群）に多く、流田地内ではNo.7遺跡15号住居跡（第17図9）覆土より出土。 （斎藤）

鉄器（第18図13・15） 第1号窯・第2号段状遺構などから4点出土している。第18図13は第1号窯覆土からの出土である。一部に木質が残るもので鍔の一部かもしれない。14は試掘で第2号段状遺構から出土している。（山本）

有溝石錘（第18図20、図版第5の7、同第14の18） 段状遺構内より出土。錘が長軸、短軸、側面を各1周し重量は50.5gである。渡辺氏研究に従って分類（以下同氏の分類に従う）【渡辺 1973】すればE種である。有溝石錘に於いてはA～Q種と17種、有溝石錘に於いてはA、C種の2種だけ確認されている。同E種は初例である。今、時期を想定するうえで、有溝石錘の編年を使用する。E種は秋田県山田遺跡、福島県浦尻貝塚の2例のみで時期は不詳であるが、縄文時代後期中・後葉に属すると推定される。県下に於いてC種は朝日貝塚、D種は北代遺跡・古沢遺跡で確認される【渡辺 1973】。このC、D種は全体的に例が多く後晩期に比定される。E種の形態は、渡辺氏によればC、D種があれば代用できる形態であると言ふ。当遺跡の例は縄文時代後晩期の範囲内に属すると思われる。 （斎藤）

註① 担当者の1人瀧島が渡辺誠氏を介して越崎彰一氏の教示をえた。福島県大戸窯跡跡と共に白鳥伝説のように魂を運ぶ鳥という。

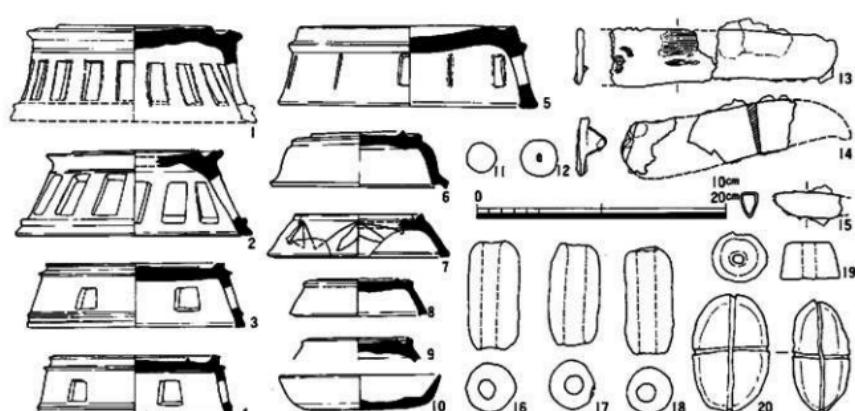
註② 同氏が印仏を実際に見ての所見を要約すると①如来擦ム ②炳衣で印相を覆っているので化仏 ③印相に見えるのは裾の結び目

④止利仏跡系の作風がうかがえる ⑤白鳳時代 ⑥把手が付けてるのでスタンプ用

註③ ①陰刻であるので砂や香泥用と考えるべきか ②瓦や磚等の押出仏に通する ③千仏瓦経の押型で、早い例である可能性もある。

註④ 岡氏の見解を踏え意見を述べれば①陰刻なのでこれがもとになり原型（陽刻）を作り使用？ ②仏の大きさが共栄県東吉寺の例（一仏一字瓦経）、倉敷市安養寺瓦門堂付近（水原翁田藏）、福知山市牧の古墳封土中出土品等と同じである。印仏の時期は出土状況から奈良時代のものとする考え方もあるが、平安以降と私見したい。

註⑤ 文字の解説・解釈にあたっては宮出道一氏の教示を得ている。



第18図 出土遺物実測図 1～12、16～19 (1/4)、13～15、20 (1/2)

2. №21遺跡

(1) 調査の経緯

昭和56年度調査 10月30日～11月26日の間に9日で重機により約3,400m²試掘を実施した結果、範囲は約25,000m²と推定された。丘陵上から西側斜面にかけて遺構の密度が高く、弥生、白鳳、奈良～平安時代の遺構・遺物が確認された（須恵器、瓦の窯、炭焼窯、製鉄炉、住居跡、穴、溝等多数）。X30Y30区付近の東側谷部や、X10Y28区付近では性格不明の穴が多く点在するが遺物量は少ない。当地は流団地内でも最大規模で、瓦、須恵器、鉄生産、集落跡と多岐の内容を持つことを確認するに至った。瓦は叩き目より57年初春、（西井氏の探査の結果）供給先が判明した。

昭和57年度調査 7月19日～12月6日の間に58日で、約1,800m²本調査を実施した。調査地区は瓦陶兼業推定窯跡の存在する斜面の下方谷部の一角を発掘し、結果谷に沿って両側に多数の穴が検出され、古墳時代と白鳳時代の2時期に渡る穴が確認され、後者の一部は須恵器、瓦生産に必要な粘土を採掘した穴と推定した。遺物は先土器時代、古墳時代初頭の土師器、白鳳時代前半の須恵器、土師器、製塙土器、木製品、瓦、奈良～平安時代の鉄津、須恵器等である。瓦が多量に出土したことにより、供給先がより明確となるにいたった。

昭和58年度調査 4月27日～12月16日の間に114日、約4,500m²の本調査と9,100m²の表土排土を実施した。住居跡3棟、段状遺構2箇所、瓦陶兼業窯の一部発掘、灰層の範囲確認、第2号窯跡の試掘確認、谷部穴群（粘土採掘穴、流水道に沿って西側に多数検出）また表土排土により工人集落、製鉄関連遺構等の全貌が、よりいっそう明確になった。なお遺跡全体の取り扱いは、現在各関係機関と協議中である。

（著者）

(2) 立 地

遺跡は、小杉流通業務園地建設予定地の南側部分に位置し、南北に伸びた小丘陵とそれをとり囲むように入り組む谷に広がる。丘陵部は標高が23m～34mで、西側が緩斜面、東側が急斜面となっている。また、谷部は標高が20m～22mで、南東に向かって低くなる地形を示す。谷部一帯は、温潤で近年まで水田として利用された跡を残す。（神保）

(3) 層 序

丘陵部の土層は、地山（赤褐色粘質土）面まで大層3層に区分される。I層表土（10cm～40cm）、II層黒褐色土（15cm～30cm）、III層暗茶褐色土（5cm～10cm）である。このうちII層は、X24・Y10区付近の丘陵斜面一帯にのみ確認できた。また、III層は、漸移的な層で場所により部分的に見られる土層である。丘陵部の大半は、I層直下がすぐに地山層で、丘陵裾部に向かうほどその間の厚さを増す。遺物は、遺構覆土内出土のもの以外このI層に多く見られた。

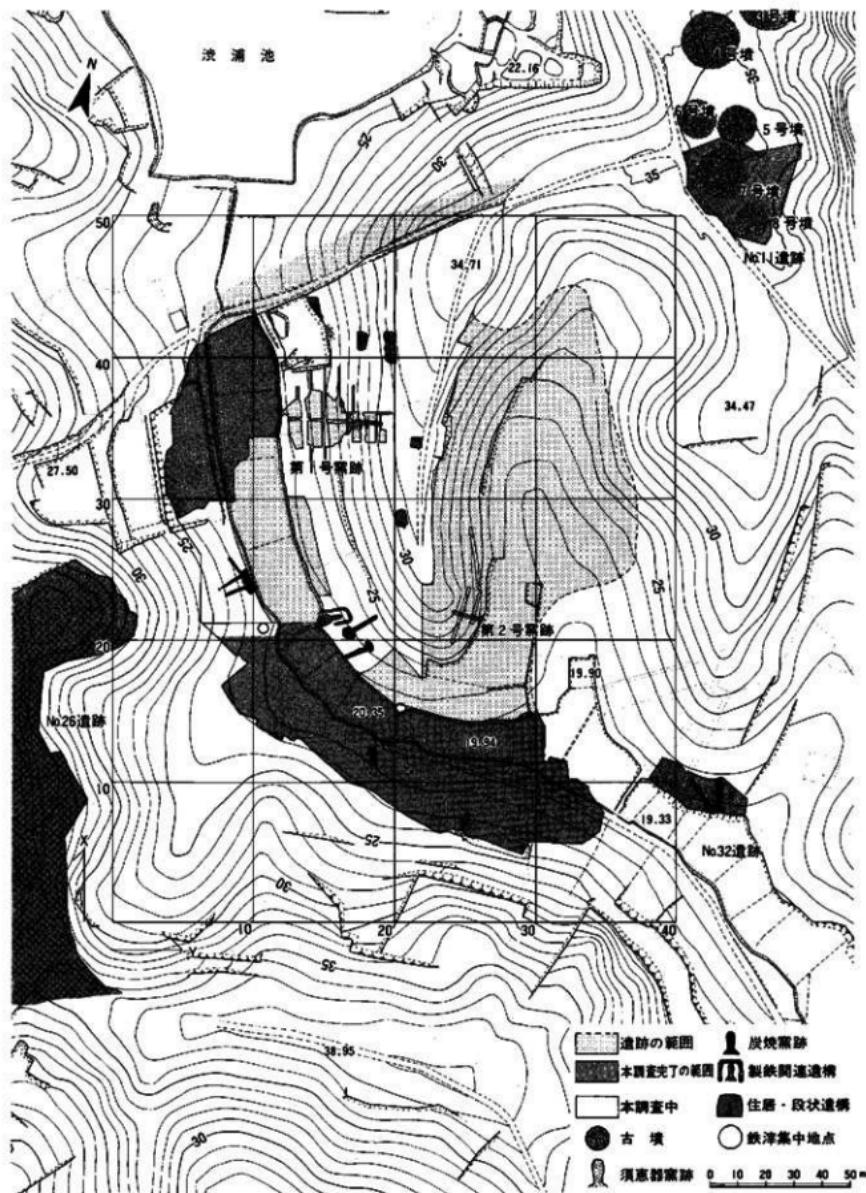
谷部の土層は、6層暗褐色土まで大層5層を数える。1層耕作土（20cm）、2層灰褐色土（60cm）、3層黒色土（30cm）、4層茶褐色土（20cm）、5層灰黑色土（80cm）である。2～5層の厚さは一定せず、場所により変動する。遺物は、3層下部から5層上部に含まれ、4層と5層を境として、奈良時代以前の物と以後の物に分れた。（神保）

(4) 遺構（付図2）

今回の調査範囲は、遺跡全体のはば2分の1にあたる。確認した遺構は、完掘・未掘を合せ、須恵器窯跡2基（うち、1基は瓦陶兼業窯）、竪穴住居跡24棟、段状遺構5箇所、製鉄関連遺構3箇所、炭焼窯跡7基で、その他、住居跡もしくは段状遺構と考えられる穴約23箇所、粘土採掘穴と考えられる穴群3箇所、穴約75箇所、大溝1箇所がある。

これらの遺構は、発掘区全体に広がりを見せる。須恵器窯跡は、丘陵部西側斜面と東側斜面の標高25m～30mに位置し、1号窯と呼ぶ瓦陶兼業窯の周辺には、それをとりまくように住居跡や段状遺構が密集する。また、丘陵南側の谷部には、製鉄関連遺構、炭焼窯、粘土採掘穴と考えられる穴群が立地し、上記した各遺構とともにその構築にあたって、一帯の地形に即した場所のつかいわけがなされたことを窺わせる。

これら遺構の年代は、大溝（近世）以外、全て飛鳥・白鳳時代、ならびに奈良～平安時代ものと考えられる。



第19図 No.21遺跡の地形と区割図

以下、完掘した遺構を主に、その概要を記す。

(神保)

① 窯跡

第1号窯跡（第20図の1・図版第17） 本窯跡は須恵器・瓦を同一の窯で焼いた瓦陶兼業窯である。

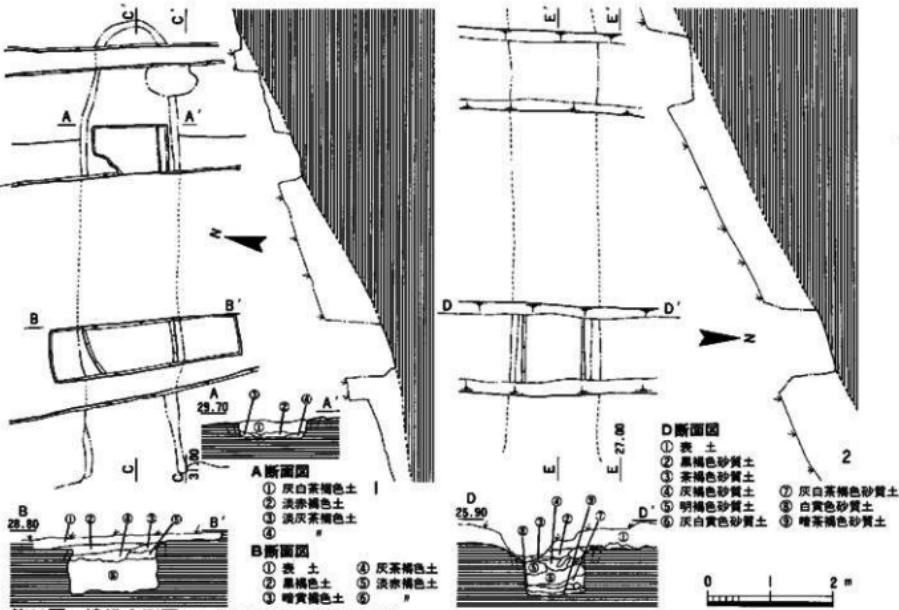
立地・規模 窯跡は南北に長い丘陵のはば中程の西側斜面上半部に位置し、焚口付近の地山面標高は28.65mを測り、煙出し部の地山面標高は30.18mを測り、比高差は1.53mである。窯体の主軸方向はN-89°Eで、等高線とは直交する。遺存状態は窯体の下部を中心に残り、天井は落下し残らない。窯体の全長は約7.3mであり、幅は約1.5mで細長く煙出し部で狭くなる半地下式の構造で、床面は無階段式である。

前庭部 表土排土後の地山面上での状態から、約3m四方程の広さをもつと推定される。覆土は炭化物を多く含む黒褐色土が入る。焚口の東側には、覆土中に瓦類を多く含む遺構があるが、窯跡と関連する遺構かどうかは明らかではない。

焼成部 窯体の調査2箇所は焼成部を行った。上方では地山面からの深さが約25cmと浅く、覆土中には側壁・天井部の破碎物を多く含み、須恵器片数点が出土した。床面は淡灰青色で弱く還元した砂質土層である。側壁は貼り壁を施し、地山面上では約20cmの厚さまで、還元・酸化層が達する。一方下方では地表から床面までの深さが約90cmと深い。覆土下層は天井部・側壁の大なる破碎物を多量に含み、中より須恵器片数点を得た。側壁はスサ入りの貼り壁であり、床面からの立ち上がりは少し内湾する。床面には須恵器片数点と共に第28図6の軒丸瓦の瓦当部が検出されたにすぎず、窯体内は製品を出した後の状態である。

灰層 灰層の広がりは、前庭部の下方にみられ、南北約10m、東西約5mの範囲は灰層の厚さが5~30cmの厚さをもち、この周辺部では灰層がうすく、丘陵末端までは殆どおよばない。遺物は軒丸瓦・須恵器が混存して出土し、量は整理箱5箱程度である。

(上野)



第20図 遺構実測図 1 第1号窯跡 2 第2号窯跡

第2号窯跡（第20図2） 窯跡は丘陵先端近くの東側斜面に立地する半地下式の須恵器窯跡である。煙出し部は丘陵尾根付近に達する。前庭部の一部から灰層にかけては削平され、平坦な水田跡である。窯体の主軸方向はN-58°-Eであり、等高線に対し若干斜交する。窯体の全長は不明で、幅は約1.4mを測る。窯体への調査は焼成部の1部を発掘した。覆土上半部には天井部の落下物がみられ、覆土中より須恵器約10点を検出した。
（上野）

② 住居跡

第2号住居跡（第21図1、図版第17の2-4） 住居跡はX29Y21区の丘陵尾根上に位置する。覆土は上層より黒褐色土がレンズ状に厚く堆積し、暗灰黄色土と暗茶褐色土の順に入り、東壁側では茶褐色土が斜めに入る。

平面形態は長方形を呈し、主軸方向はN-24°-Eを示す。規模は南北5.0m、東西3.5mを測る。壁体はやや斜めに立ち上がり、掘り方は東壁で約50cm、西壁で3~5cmと浅い。床面はほぼ平坦であり、壁溝は検出されなかった。柱穴は7個検出され、主柱穴は不明である。深さはP₅が60cmと深く、他は6~18cmと浅い。

カマドは南壁に配され、住居跡のはば主軸上にのる。両袖は遺存し、焚口は床面まで掘り凹めている。壁側は地山を若干掘り残し、暗黄褐色土と暗茶褐色土で構築される。燃焼部は長さ約70cmで、幅は約60cmを測る。煙道は長さ約80cmで幅が約35cmの規模をもち、4層にあたり周壁が赤く酸化する。天井部は5層に該当する。

住居跡覆土中より、丸瓦5、須恵器・土師器・鉄器1点と共に北東床面より製塙土器・土師器が若干出土した。

なお、住居跡廃絶後には南東隅に約1mの方形の穴を設ける。周壁は赤く酸化し、多くの炭化物を伴う。（上野）

第7号住居跡（第21図2、図版第18の1、2） 住居跡はX34、35Y22区の丘陵尾根上標高31.5m~32mに位置する。覆土は上層より、暗茶褐色土、黒褐色土、灰褐色土が凸レンズ状に堆積し東壁では明茶褐色土、西壁では地山上に似た明茶褐色土が入る。平面形態は隅丸方形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを示す。規模は南北3.8m、東西4.0mを測る。壁はやや斜め立ち上がりを示す。掘り方は東壁で約30cm、西壁で10cmと浅い。床面は、ほぼ平坦であり、溝はなく、柱穴は8個検出され、主柱穴はP₁・P₃・P₄・P₅である。深さは10~20cmと浅い。カマドは南壁に配され、中心より、やや東側に位置する。両袖は遺存し、焚口は床面まで掘り凹めている。袖部は地山を掘り残し、黄茶褐色土と明茶褐色土で構築される。燃焼部は、長さ約50cm幅40cmを測る。煙道は35°の傾斜で立ちあがる。覆土より丸瓦（黒褐色土）・土師器・須恵器（茶褐色土）・管状土錐（床面）等が出土。丸瓦は主に北壁隅に、土師器は西壁隅に集中している。

第12号住居跡（第22図2、図版第18の3・4） 住居跡はX33Y17区の丘陵裾部近く、標高26.5m~27mに位置する。表土排土後に暗茶褐色土と黒褐色土色の南北に約5m、東西に約2mの遺構を確認できた。覆土を約20cm掘り下げるとき須恵器（縹・高杯・壺）・土師器・丸瓦（完形品）・平瓦等が混在して出土。層的には黒褐色土層中より、多くの出土を見た。但し本遺構は、完掘していないので、現段階の観察事項である。
（斎藤）

第19号住居跡（第22図1、図版第19の1） 住居跡はX44Y15区の丘陵裾部近くに位置し、現存する規模は東西約4.5m、南北約7mの大きさをもち、西側の半分程が採土により消失している。また住居跡の南端は、時期の異なる新しい穴が掘り込まれ、更に住居跡の北側は新しい時代の溝が住居跡覆土の黒褐色土を掘り込み、底面は床面まで達する。住居跡の周壁溝断面は、V字状に深く掘り込まれ、底面の高さは西端が最も低い。

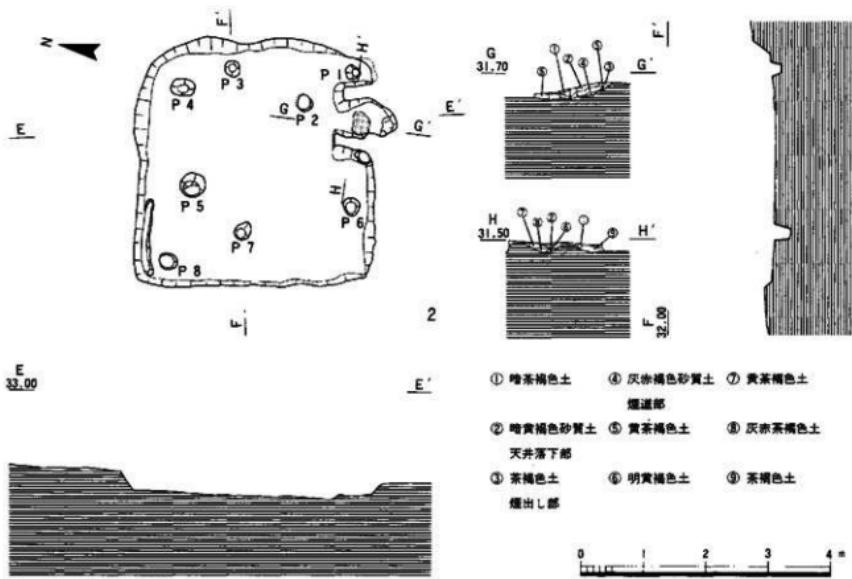
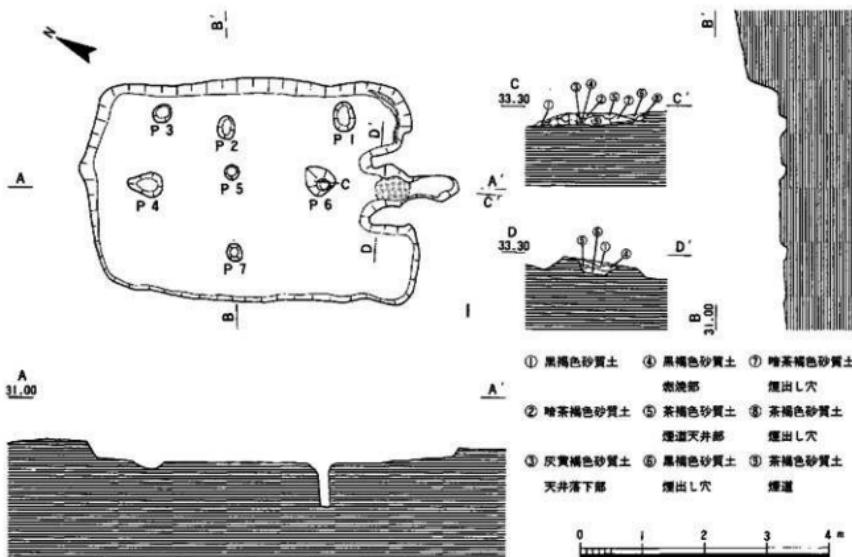
主柱穴はP₁・P₂・P₃であり、床面からの深さは30~60cmと全体に深い。床面はほぼ平坦で硬くしまる。

遺物は溝上面の黒褐色・茶褐色土中に瓦・須恵器・土師器片が流れ込んだ状態で出土した。
（上野）

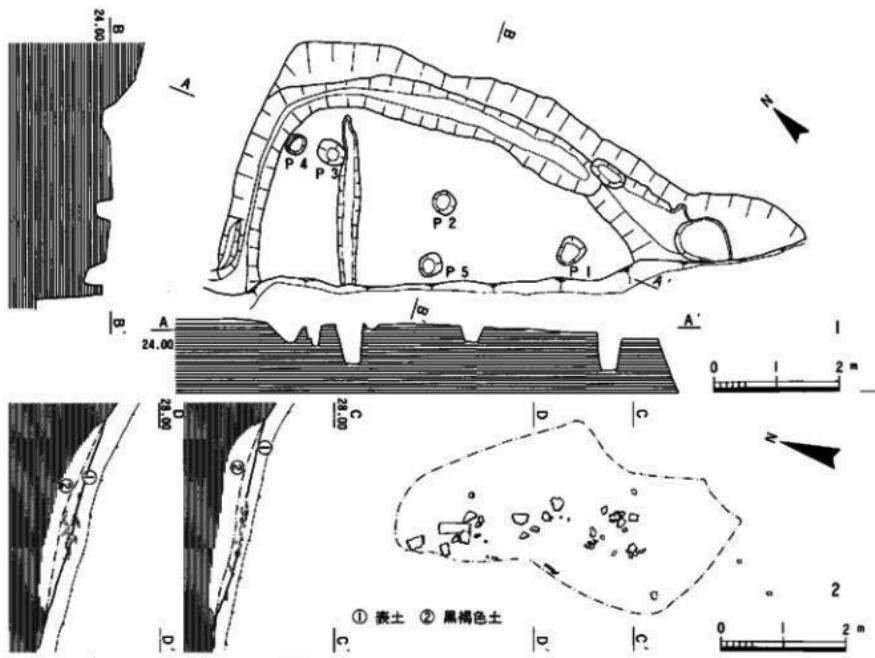
③ 段状遺跡

第2号段状遺構（第22図の1、図版第20の1~3） 本遺構はX42Y20区に位置し、丘陵斜面上部に築かれる。覆土の層序は上層の灰褐色土が厚く次いで黒褐色土、暗茶褐色土の順に堆積し、壁際には黄褐色土が入る。

平面形態は隅丸方形であり、遺存状態のよい東壁では、長さが約9.7mを測る。壁体は斜めに立ち上がり、壁高は60



第21図 造構実測図 1 第2号住居跡 2 第7号住居跡



第22図 造構実測・遺物出土状況図 1 第19号住居跡 2 第12号住居跡

cm前後である。床面はほぼ平坦で、しまりが弱く、南側は木根等の擾乱層がある。また周壁溝は断面U字状で30~40cmの幅をもち、溝底面の高さは一定しない。床面と斜面側との境には、直径約1mの焼土面が広がり、この焼土を建物の中心と想定すると、床面の範囲は東西約6.7mであり、南北が約10mの規模となり、主軸はN-19°-Eとなる。柱穴は浅く不明確で、P₆・P₇・P₈が周壁溝に沿って並ぶ。深さは約20cmである。壁体にはP₂・P₃・P₄が内傾して掘り込まれる。穴底面の高さは床面近くから上約20cmまでの間である。遺物は周壁溝の覆土上面や北東隅の床面近くから出土し、平瓦・須恵器・土師器と共に多くの製塙土器片を得た。

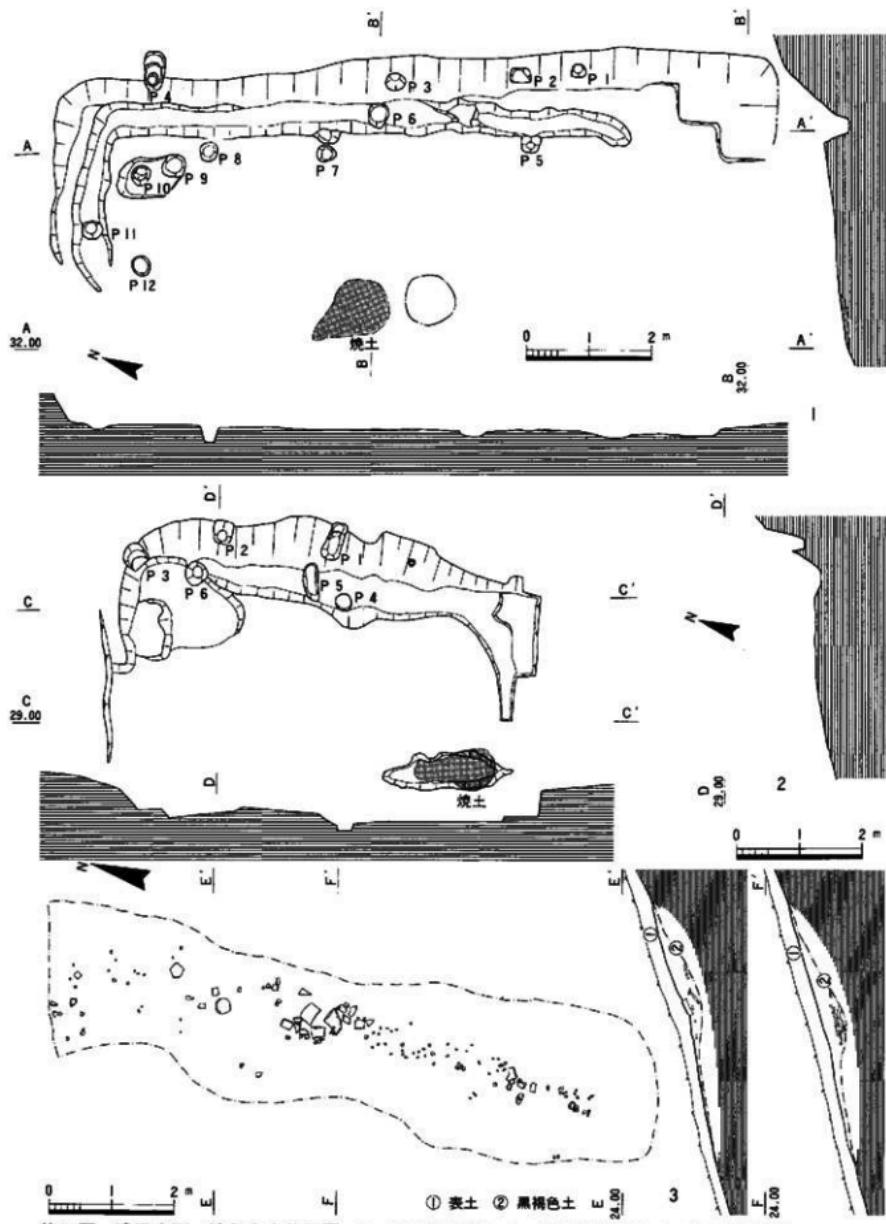
(上野)

第3号段状造構（第23図2、図版第18の1~3） 本造構はX42Y18区に位置し、丘陵斜面標高27.5m~29mに基かる。層序は1層-灰茶褐色土、2層-黒褐色土、3層-暗黄褐色土、4層-黄褐色土、5層-灰黄色土となる。東壁際には黄褐色土が入る。平面形態は隅丸長方形を呈し、遺存状態のよい東壁では長さ約6.5mを測り、焼土までの平坦面は約4mを測る。北壁側に0.9m×0.6mの1段高い平坦面がある。周壁溝は断面が皿状で、30~60cmの幅を持ち、溝底面の高さは一様ではない。床面と斜面側との境には1.2m×0.6m（ひょうたん形）の焼土の広がりがあり約10cm程の堆積が見られる。主柱穴はP₃・P₄・P₆が考えられ、深さは約15cmである。壁体にはP₁・P₂が内傾して掘りこまれる。遺物は周壁溝の覆土中や上面、および南東隅の床面近くから検出され、平瓦・丸瓦・土師器・須恵器・製塙土器・鉄斧等が出土している。

(斎藤)

第5号段状造構（第23図3、図版第18の4、5） 本造構はX33・34Y18区丘陵裾部、標高25m~26mに位置する。表土排土後に黒褐色土と茶褐色土色の南北約10m、東西約2.5mの造構が確認できた。覆土を10~20cm掘り下げるとき、軒丸瓦・丸瓦・平瓦・土師器・須恵器・製塙土器等が混在して出土。層序的には茶褐色土層より、多くの出土遺物を確認した。但し、本造構は完掘していないので、現段階の観察事項である。

(斎藤)



第23図 遺構実測・遺物出土状況図 1 第2号段状遺構 2 第3号段状遺構 3 第5号段状遺構

④穴 (付図2、図版第21)

今回確認した穴は、丘陵部に立地するものと、丘陵南側の谷部に立地するものに二分される。

丘陵部の穴は、丘陵の頂部からその西側斜面部にかけて散在している。未掲のため規模・形態など詳細に述べられないが、平面形が円や方形で、黒褐色・茶褐色土などの覆土をもつ穴が散見できる。

丘陵南側の谷部にある穴は、谷の最下部より、やや南に上った標高22m～25mの緩斜面に立地している。その穴は、単独で存在するものと、相互に重複し連なって、一つの群として存在するものに大別できる。前者として検出した穴は、後者の穴群を取り巻くように分布し、その数が約40箇所を数える。平面形は、円形のものが大半で、規模が一定せず、最大のもの(100号穴)で、最大径6m、深さ1.5m、最小のもの(88号穴)で最大径90cm、深さ50cmを測る。その掘り方は、断面形が円筒状のもの(88号穴)、ろうと状のもの(105号穴)、浅い皿状のもの(96号穴)に類別できる。各々の覆土状況は、自然堆積を示し、第94号・105号・106号穴などには7世紀中頃の須恵・土師器片が若干含まれる。特に第106号穴からは、底面よりやや浮き上った状況で、土馬(27図の101)が出土し注目された。

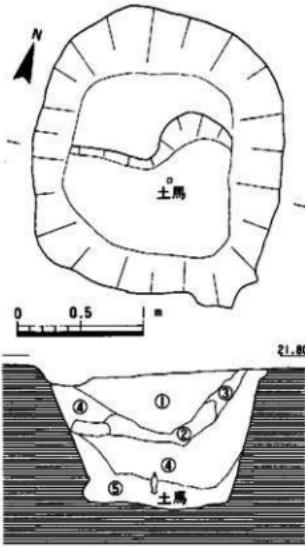
一方、後者の穴群は、X15Y13区付近、X13Y18区付近、X11Y31区付近のおおむね三箇所にまとまる。各穴群は、不整円形の平面形をもつ幾つもの穴から構成されるが、それらの穴の新旧は、重複が複雑ではっきりしない。穴群の規模は、東西20m～30m、南北10m～20m、深さ0.5m～1.5mで、いずれも底面が起伏に富み、遺構全体としては、ゆるやかな傾斜を示す。穴群の遺存状況や立地の環境から考えて、一応、その性格は粘土採掘を行った跡と推定される。その覆土には、前者の穴と異なり黒褐色土に黄褐色土がしあわせに混入する層序が認められ、谷の最下部側ほどその厚さを増す。これは、おそらく粘土採掘が谷最下部側から順次行なわれ、その残土を後方に堆積した結果による堆積で、同土層はその残土の一部と考えられる。これら穴群からは、須恵器・土師器・土鍬・瓦・木製品(板材)などが出土している。X15Y13区付近の穴群から多く出土し、穴の底面直上から出土するものもある。その時代は、7世紀中頃の遺物が大半を占め、当穴群の形成時期を示す資料として位置づけられる。(神保)

⑤ 製鉄関連遺構 (付図2 図版第23)

谷部に面する丘陵斜面の裾で炭焼窯7基と鉄滓集中区3箇所を確認した。後者にはコの字形の溝が外周にめぐらしく製鉄炉が一箇所ある。調査した1号炭焼窯はX12、13Y19区にあり、窯体は全長2.9m、幅90cmで窯体の上端中央に径25cmの円形の煙出しを一つもつ。窯の形態と出土したタタキをもつ土師器の破片から平安時代と考えられる。(岸本)

⑥ 谷部〈流水道〉 (付図2、図版第22の3～5)

層序は1～6層に大別でき、さらに各層が細別される。2層は1～2(炭化物粒をわずかに含み、酸化鉄によるシミ状の斑点がはいる)。3層は3～4(粘性のある黒い腐植土、および砂質土等)4層は1～2(粘性強く下部に砂質を多く含む)5層(粘性を持ち暗茶褐色土が混ざる)6層(泥炭状の泥又は自然の腐植土)になる。土層の堆積状況により新旧2回の流水道が確認できた。X22Y13～15南面断面では3層4層各々底面で確認、X13、14Y31北面断面では2層4層各々底面で確認できた。なお両者の断面を比較すると、後者が新旧面に間層を多く含むが、これは流れの方向が北→南であるとの為と理解したい。とりあえず確認できたのは新旧2回だが、実際には何回かあると思われる。(斎藤)



第24図 第106号穴実測図

(5) 遺物 (第25~27回・図版24~26)

① 墓跡

第1号墓跡 窟体・灰原とともに部分的にトレンチを設けたのみで完掘はしていない。ここでは窓体・灰原とその周辺の出土遺物を一括してとりあげる。

杯A蓋はすべて内面に身受けのかえりをもち、頂部には乳頭状もしくは宝珠形のつまみをもつ。頂部は丁寧にヘラケズリする。口径10cm前後の小型品と13cm前後の中型品との2種があり、前者が大部分を占める。前者には1・2・3・5・6・7・9・11~14・16~22が、後者には24がある。小型品には頂部が丸くふくらみ器高の高いもの(1・5・6)、扁平なもの(19~21)、頂部に平坦面をもつもの(12・16・19)がある。中型品には頂部の高くなるものはない。小型品のなかには2・7のようにかえりの先端が口縁端部の下方にでる古式のものがわずかにある。

杯は無高台の杯Aが大半を占め、高台をもつ杯B(61)はわずかにみられるにすぎない。杯A蓋に対応する杯Aは口径10cm前後のものが多い(31・33・35・36・44・45)。33は口径9.4cm、高さ4.5cm、44は口径11cm、高さ4.5cm、45は口径11.2cm、高さ4.3cmである。径高指数は33:47.9、44:40.9、45:38.4である。大型の58は口径18cm、高さ6cm、径高指数33.3である。高杯は器高10cm前後の低いもので短い脚部をもつ(69・71)。脚部は外方にはりだし、透しはもたない。75は長颈壺の口縁部、76は有脚の盤で口径24cm。中型の70は口縁が外反し、外面をカキ目、頸部以下をタタキ調整する。

円面鏡(100)はいわゆる圓足鏡で脚端部を欠く。堤部の径18.4cm、復原による器高は約8.3cm、脚部径約27cmの大型品である。陸部と海部との境には内堤をもたない。脚部には台形の透しを4箇所にもつ。灰原周辺から出土した製品には陶製のアテ具(102)がある。曲面をなすアテ面には7重の同心円を彫刻している。直径9.2cm。背面には持ち手のつまみを有するが欠損している。須恵器製作用の陶製アテ具としては最古のものと思われる。用途不明の円錐形陶製品(105)は上端近くに細い孔を穿つ。外面はていねいに面どりする。底径3.8cm、器高さ4.6cmである。103は陶製舟形の一部と考えられる。119は紡錘車形土製品で直径9cm、厚さ2.7cmの大型品である。灰原に南接するX34Y15区出土。

第2号墓跡 杯A蓋(15)は内面にかえりをもち頂部には尖りぎみの宝珠つまみをもつ。頂部はヘラケズリする。口径10cm、高さ3.8cm。杯A(34)は無高台で底面はわずかに丸味をもつ。口径9.4cm、高さ3.8cmで径高指数は40.4となる。底部外面をヘラケズリする。この2点はいずれも試掘調査で窓体内から出土した。

② 住居跡

住居跡の出土遺物は大部分が小片であって復原・図示しうるものは数少ない。出土遺物には須恵器の杯・蓋・壺・甕・高杯、土師器の壺・高杯・甕、製塙土器がある。そのうち須恵器の杯蓋はすべて内面にかえりをもつもので、その型式・法量のからみでも杯Aとともに第1・2号墓跡の出土資料とはほぼ同時期のものである。また十師器の甕は内外面をハケ目調整した「古墳時代以来の伝統的な甕」で、No16遺跡等でみられるような奈良時代以降当地方で普遍化するタタキ技法・ロクロ技法・ヘラケズリ技法による「北陸型の土師器甕」(岸本 1982)は認められない。製塙土器はすべてラッパ状の口縁と尖り底をもつ棒状尖底タイプの能登式製塙土器である。これは7世紀代に盛行したものである(岸本 1983)。以上のべた諸点は後述する段状造構の出土遺物についても同様である。こうしたことから今回調査の対象とした住居跡・段状造構は、上記の須恵器の杯蓋によってともに第1・2号墓跡とはほぼ同時期に形成された遺構群とみなしあうことを探しておくる。なお、瓦については別にとりあげる。

第2号住居跡 須恵器の杯A・杯A蓋・高杯・甕・土師器の壺・甕・高杯・製塙土器の破片がある。出土總量は少ない。杯A蓋は復原口径11cmである。製塙土器は覆土中と床面から出土した。口縁部(97)はラッパ状を呈するが胴部から口縁端部までは短い。口唇部は内側へ屈曲する。口径(長径)14.6cmをはかり櫻本澄夫氏による棒状尖底製塙

土器の分類〔橋本 1981〕では小型の「尖底 a 類」に該当する（以下、尖底 a 類とする）。

第7号住居跡 猛惠器の杯A蓋・高杯・甕・土師器の甕・製塙土器・土製支脚の破片が少量ある。杯A蓋にはかえりの先端が口縁端部の下方にでるもののが1点ある。口径は11.6cm。ほかに口径 9.8cm のものがある。土師器の小型甕（91）は口径10.6cm、高さ 6.3cm。短い口縁部は強く外反する。カマド内出土の土製支脚は円柱状を呈し、底径 6 cm、全長10.4cm。

第19号住居跡 住居跡に確實に伴う遺物はほとんどない。ただ、床面に切りこまれた後世の溝内から瓦・須恵器・土師器が出土している。須恵器にはかえりをもつ杯A蓋のほか、低い高台をもつ杯B（63）、糸切り底の杯Aなど明らかに混入を示すものがある。

③ 段状造構

第2号段状造構 須恵器の杯A・杯A蓋・甕・甕・盤、土師器の甕・高杯・甕・製塙土器がある。杯A蓋には口径10cm前後のものが4点、13cm前後のものが2点ある。26は口径13.3cmある。杯A（38）は口径10cm、高さ 3.5cm、径高指数35。外底面をヘラケズリする。49は口径13cm、高さ 3.8cm、径高指数29.2。外底面をロクロによらないでヘラケズリする。口縁部は屈曲して外方へのびる。盤は口径27cm、高さ 4cm。土師器の甕（89）は口径17cm。口縁部は丸く外反する。製塙土器は破片の量・部位からみて数個体分ある。口縁部（93）は口径15.6cmをはり、口唇部は内側へわざかに屈曲する。胴部の上半（98）、下半（99）、尖底部（94）があり、おおよその器形と法量を窺うことができる。いずれも小型の尖底 a 類である。

第3号段状造構 調査した住居跡・段状造構のなかでは最も遺物量が多い。遺物には須恵器の杯A・B・杯A蓋・甕・甕・高杯・土師器の甕・製塙土器がある。杯A蓋は破片総数43点あり、その内訳は口径10cm前後のもの37点、口径13cm前後のもの6点である。4は口径 9.6cm、23は口径12cm。さらに口径22cmの大型の蓋（29）が1点ある。

杯Aには口径10cm・13cm前後のものに混じって16cmのもの1点、18cmのもの（57）が1点ある。57は高さ 6cm で径高指数は33.3である。杯B（62）は覆土中の出土品である。須恵器の甕の口縁部（81）は強く外反し、外面の上端に櫛描波状文を施す。口径42cm。高杯（68）は口径13cm。製塙土器は数個体分ある。92は胴上部で最大径 8.4cmある。口径は約17cmとなろう。いずれも尖底 a 類である。

第5号段状造構 須恵器の杯A・杯A蓋・甕・甕・土師器の甕・製塙土器・砾石がある。完壊していないため出土量は多くない。杯A蓋（10）は口径10.6cm。杯A（48・50・51）は、口径が48；13.1cm、50；13cm、51；12.8cm、高さは48；3.7cm、50；4cm、51；3.6cm。径高指数は48；28.2、50；30.8、51；28.1である。50・51はともに体部外面に×形のヘラ記号をもつ。

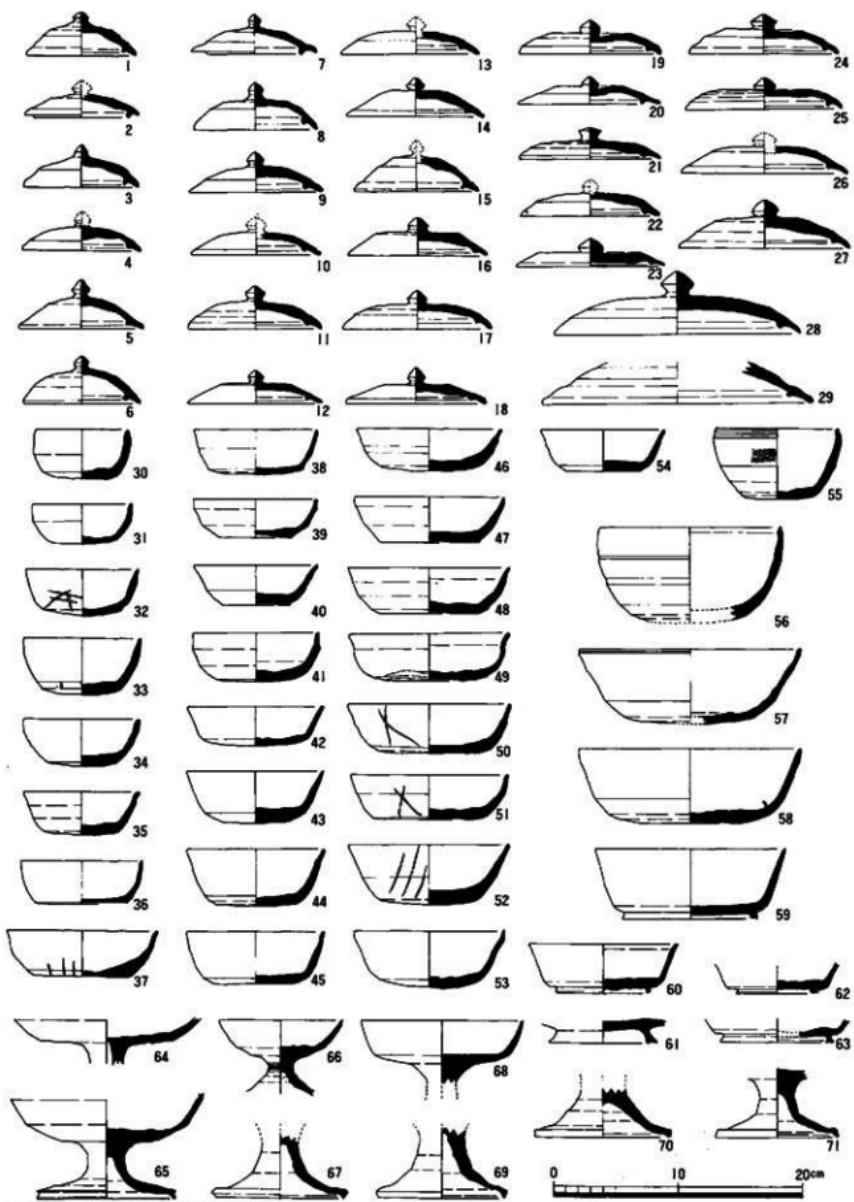
④ 丘陵部

第1・2号窯跡の立地する丘陵上の遺物包含層から出土した遺物を一括してとりあげる。小型の甕A（55）は口唇部に2条の沈線が、その下部に櫛描波状文がめぐる。口径10.2cm、高さ 5.7cm。中型の甕A（56）は外面に2条の沈線がめぐる。口径14.6cm、高さ 7.7cm前後、径高指数は53。いずれも銅鏡の模倣形態であろう。いわゆる薬甕（74）とその蓋（73）がある。蓋は頂部に大きな宝珠つまみをもつ。大型の蓋（28）は口径20cm、高さ 5cm。須恵質の瓶（85）は外面の左右に把手をもち、下端の内側に突起がある。ほかに土師器の甕（86）、滑石製紡錘車（116）、土製支脚（106・107）、管状土錐（108～111・114）、能登式製塙土器がある。

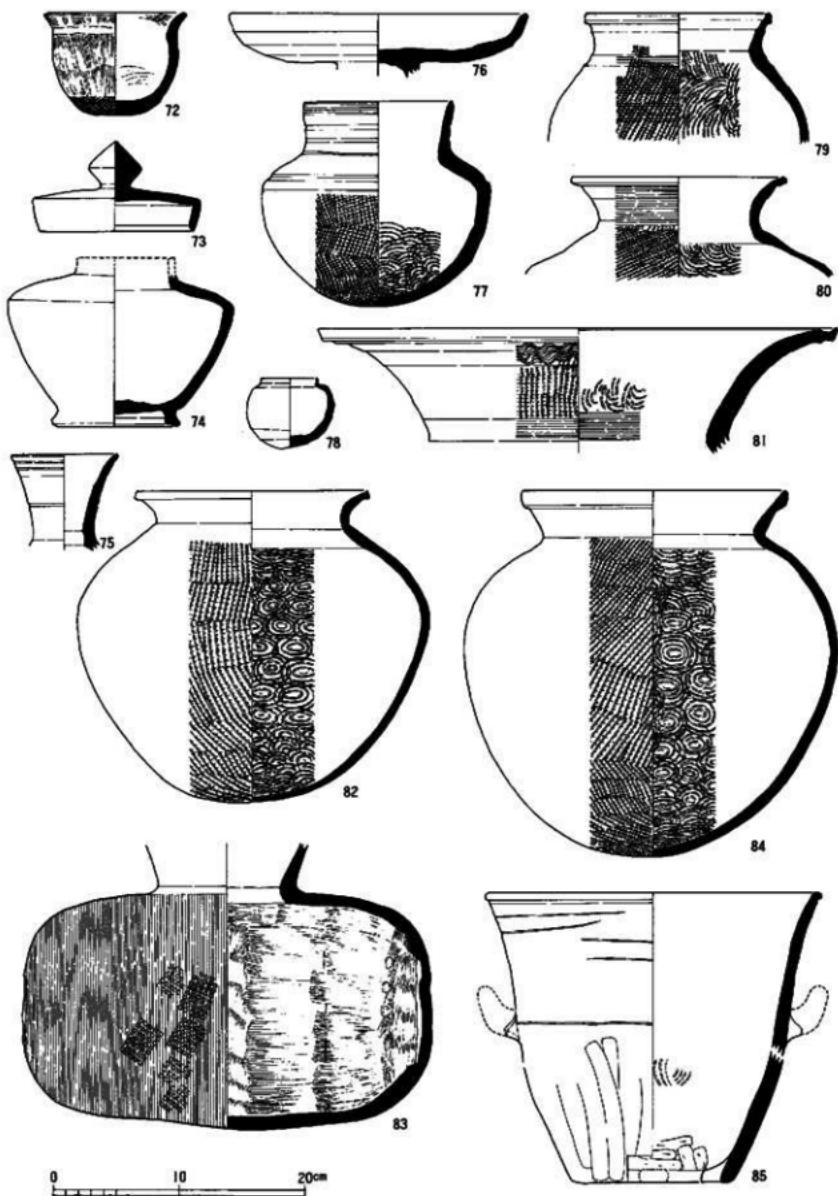
⑤ 谷 部

丘陵の南側の谷部では、谷底の流水道路とその南側緩斜面の穴群から遺物が出土した。流水道路では7世紀代の遺物に混じって先土器・平安時代の遺物が、また穴群では弥生土器・7世紀代の土器が出土した。

122は大型のナイフ形石器で先端部は欠損する。基部両側縁のはば全面にわたって刃挫しがなされ、裏面基部は横



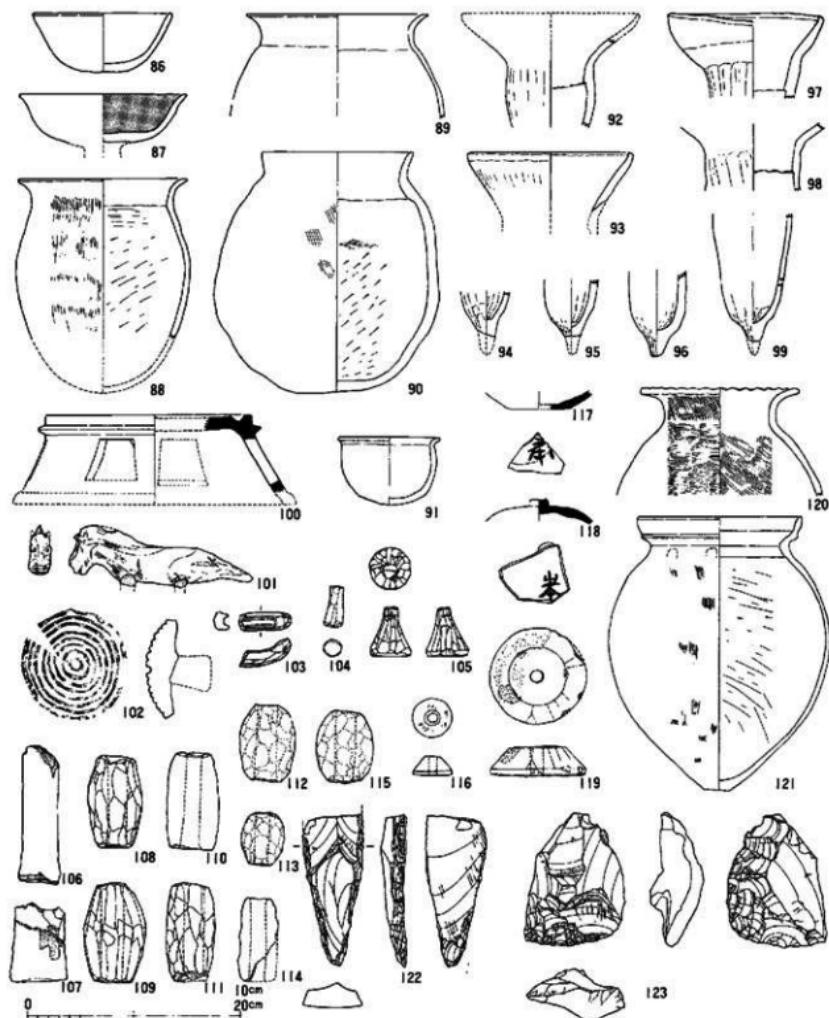
第25図 出土遺物実測図 (1/4)



第26図 出土遺物実測図 (1/4)

からの剥離で調整される。石質はハリ賀安山岩。123は漁飛流紋岩製の搔器である。刃部は方向を90度かえて表裏両面から作出している。先土器時代の石器は、この他にも凝灰岩・漁飛流紋岩を用いた石刀、二次加工ある剥片、折断された剥片などがある。また鉄石英製の小型の剥片も1点出土している。

弥生土器には口縁部が波状をなす中期後葉の壺(120)と複合口縁の弥生終末期の壺(121)がある。7世紀の須恵器は杯A蓋(25)、杯A(32・37・46・52)、直口壺(77)、甕(72・77・82・84)、横瓶(83)がある。小型の



第27図 出土遺物実測図 (122・123; 約 $1/2$ 、その他約 $1/4$)

甕(72)は外面をハケ目、外底面をタタキ調整する。土師器の小型甕との関連が考えられる。土師器の甕(88・90)は外面をハケ目、内面をヘラケゼリする。内黒の高杯(87)が1点ある。

土馬(101)は全長17.3cmをかる。4本の脚部とたてがみの一部そして両耳を欠損する。裸馬である。目と鼻は写実的に表現している。青灰色をした須恵質のいわゆる陶馬である。

土馬が出土した第106号穴からは、瓦片・土師器が出土している。他の穴群と同様第1・2号窯跡が操業されていた時期に主として形成されたと考えられるので、陶馬は窯跡とはほぼ同時期の所産とみてよい。

墨書き土器が2点ある。117は無高台の須恵器杯の外底面に墨書きする。判読はむづかしいが字は「承」あるいは「角」か。118は須恵器杯蓋の内面に「山本」と墨書きする。いずれも谷底の流水道の覆土内から出土したもので、平安時代のものであろう。

以上の他に縄文土器(中期)、擦石・打製石斧、中世珠洲焼などが散発的に出土している。

(岸本)

⑤ 瓦類(第28~32図・図版第28~30)

No21遺跡から出土した瓦類は、小片を含め約1200点を数える。種類は軒丸瓦・丸瓦・平瓦・隅切瓦・懸斗瓦・面戸瓦である。この瓦の分布は、第1号窯跡の灰層を中心に標高約29m以下の丘陵中程の斜面上から谷部にかけてであり、多く出土する範囲は、東西約30m、南北約70mの広さで、この周辺更に20m程までは1区当たり1~数点の出土である。瓦は窯跡から約220m離れた南側の谷部にまで及んでいる。しかし瓦の種類毎の分布に大差がない。調査遺構では窯跡に近い第12号住居跡や第5号段状遺構の覆土中に瓦が多く、丘陵上に近い第2・7号住居跡や窯跡より離れた場所にある第2・3号段状遺構内では、わずかの量であった。

軒丸瓦(第28図1~7・図版第27) 軒丸瓦は周縁部片8点を含め、12点である。瓦当范型は1種である。201は第5号段状遺構内から検出した瓦当部で、6は第2号窯跡床面からの出土である。内区文様は8葉単弁蓮華文で花弁端は丸い。中房は内区の約3分の1に相当する大きさをもち、1+6+8と二重の蓮子を配し周縁がめぐる。内区の文様凸部には木目とは異なる弧状の筋が何箇所もある。周縁は直立縁で面径19.0cmで、中房よりも高い素文縁である。203は周縁上をヘラケゼリ調整する。瓦当部と丸瓦の接合は裏面上半部(図版第27)に幅の狭い凹帯を付け、丸瓦をはさみこむ方法である。

丸瓦・平瓦の凹面・凸面調整は、a類、山面では糸切り痕を一部残し、凹面では布目を残すもの、b類、縱や横方向のナデを行うもの、c類、縱方向のヘラケゼリを主に行うものがある。また側縁や端縁の調整手法には、1類、1面のみを削るもの、2類、側面(端部)と凹面側の2面を削るもの、3類、凹・凸面の3面を削るもの、4類、分割截面の破面の凹凸をそのまま残すもの〔堀内 1983〕がある。

丸瓦(第29・30図8~13・15) 丸瓦片は約336点を数え、いずれも行基丸瓦である。法量は全長によって大型と小形の二種がある。^{注1} 第1次成形は粘土板巻きつけによるもので、狭端部側からみて合せ目を左まわりに巻き付けるS型と逆のZ型が確認できる。第2次成形は凸面に叩き目調整で、215に一部残る。丸瓦は凸面調整により二分され、その割合は半々である。A種(208・209・215)はc手法である。B種(210・211・214)はb手法であり、糸切り痕跡がうすく残る例がある。210は紐圧痕が凹面に残る。丸瓦の側面調整は1~3手法があり、まれに4の214が含まれる。端部では1手法と共に軽くヘラケゼリする2手法がある。凹面調整では殆んど布目を残す。

平瓦(第30~32図) 平瓦の第1次成形は粘土板巻きつけによるもので、狭端部からみて合せ目がS型となる例がある。第2次成形の凸面の調整でA種のナデのあとタタキをもつ495点と、B種のナデの135点を数えた。A種の凹面調整は全面c手法を加えるものと布目を残す瓦に二分され、後者が1割弱を占める。B種では凹面にc手法を施すものはB種中約1割である。平瓦側縁の調整は3手法が多く、次いで2手法と1手法が少数である。端部調整はA種c手法の瓦は1手法が多く、その他の平瓦は軽く角を面取りする2手法または1手法である。図版第30の7には狭

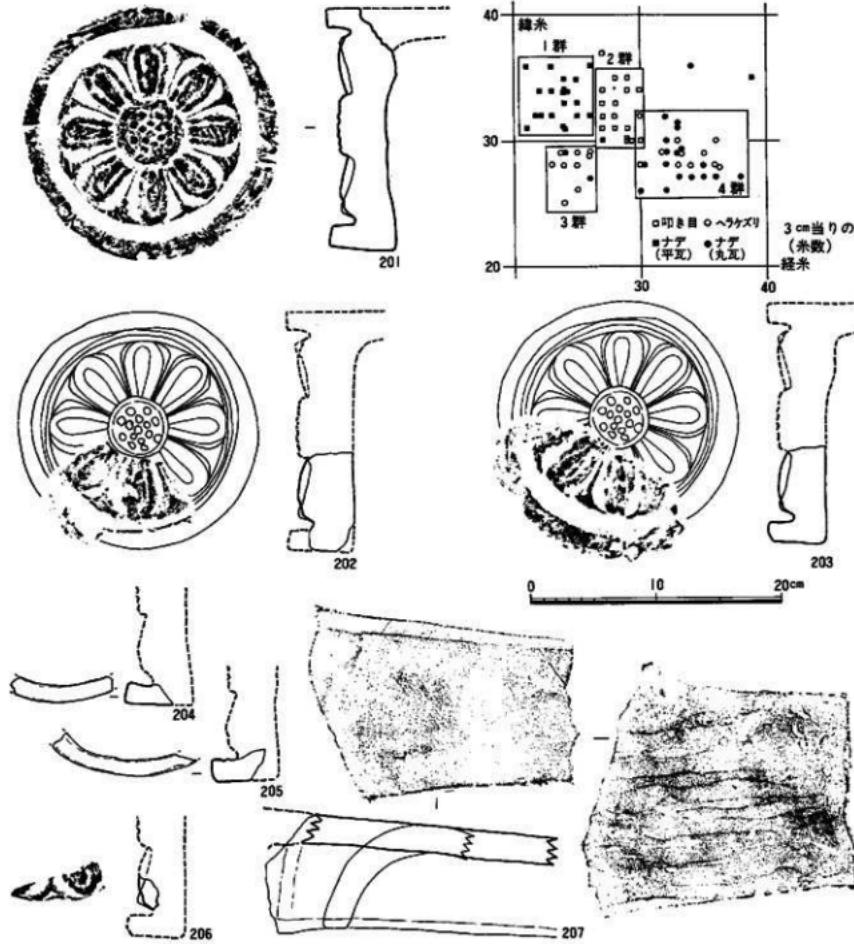
端部近くに紐痕が平行して走り、B種に多くみられる。またA種の叩き板の原体は1種類である。

布目の密度（第28図右上）は、4群に大別される。丸瓦・平瓦の区別と平瓦A・Bの4種の布が存在する。

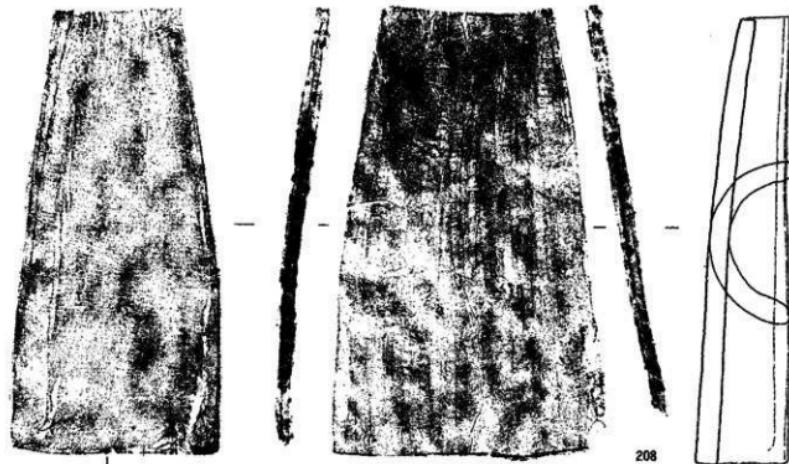
遺瓦 穂斗瓦・面戸瓦・隅切瓦が少数ある。穂斗瓦（226）は2点を数え、平瓦A・B種を二分割したもので、側面調整は1手法である。227は穂斗瓦かどうか不明であるが、側面調整は4手法である。隅切瓦（219・図版第29の3）は平瓦A種を用いることが多い。また隅切部分の破片はA群で凹面は布目を残す。面戸瓦は破片1点がある。

註① 大形丸瓦 209は長さ60cm、広端幅21.0cm、狭端幅10.8cm、重さ約4.3kgである。小形丸瓦 208は長さ47.5cm、広端幅19.0cm、狭端幅10.6cm、重さ約4.0kgである。なお平瓦 224は、広端幅30.0cm、長さ42.5cm、重さ7.3kgを計る。

註② 布目密度は3cm四方の糸数で、種類毎に20点を選び出し、計測箇所は一定でない。

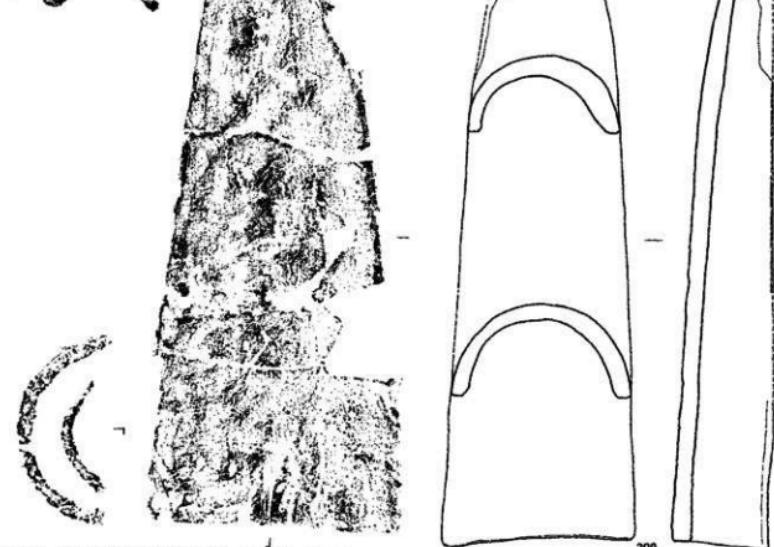


第28図 出土遺物実測図・拓影図 (1/4) 布目密度 (右上)、201・第5号段状遺構



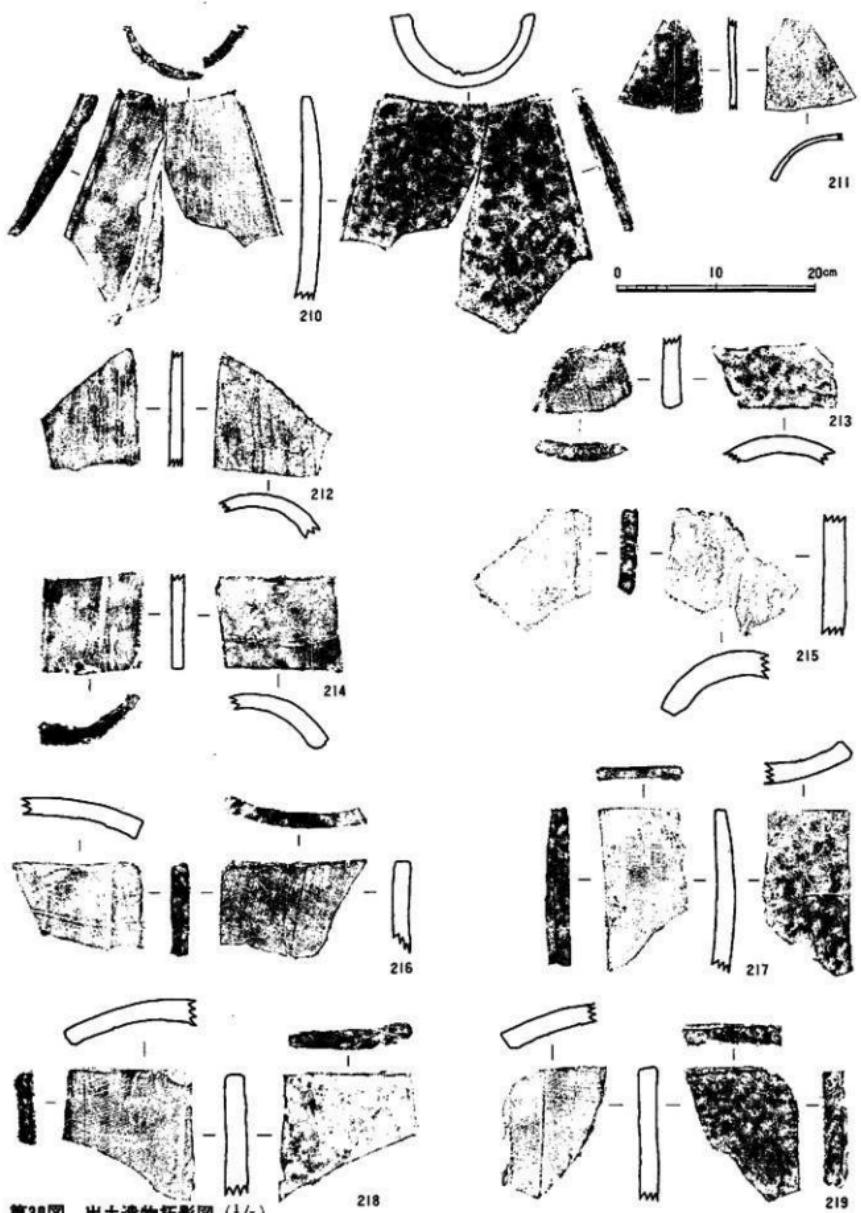
208

0 10 20cm

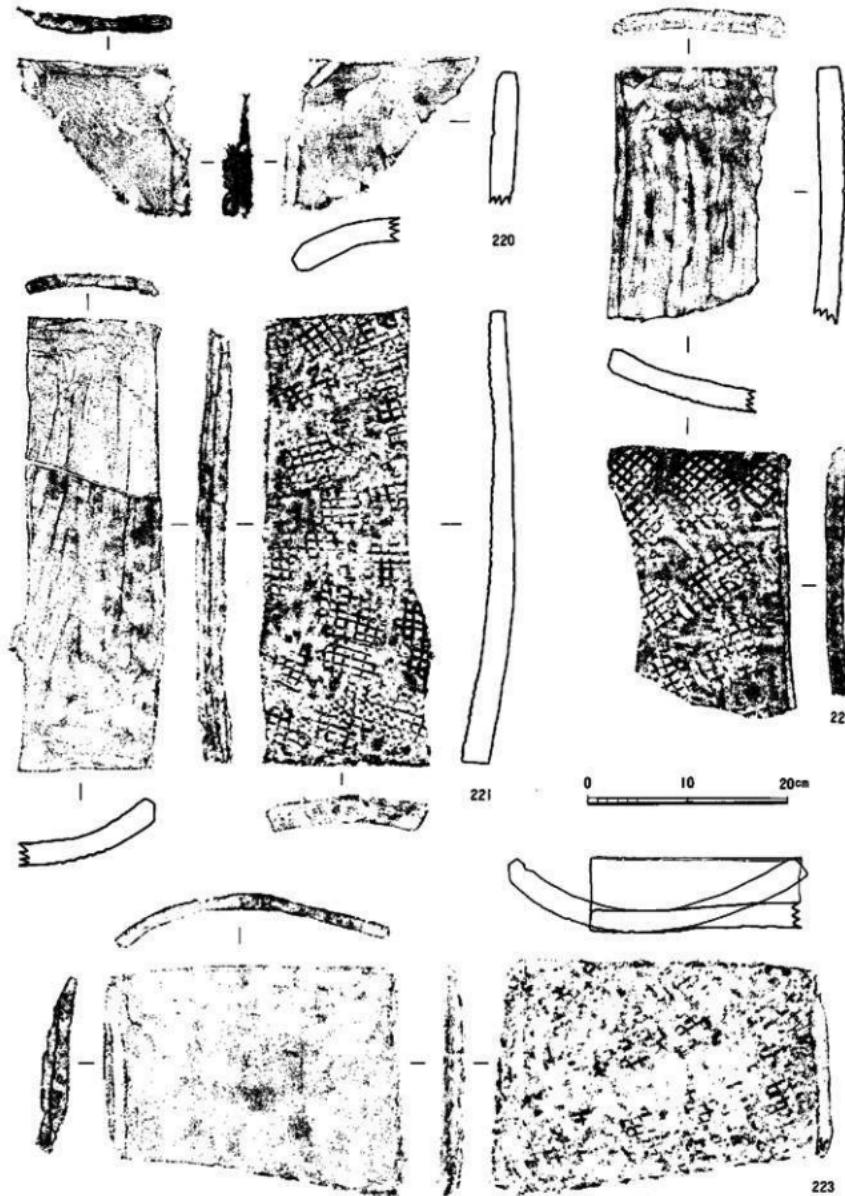


209

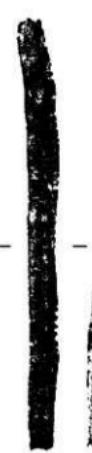
第29図 出土遺物拓影図 (1/5) 208・第12号住居跡、209・X34Y5区



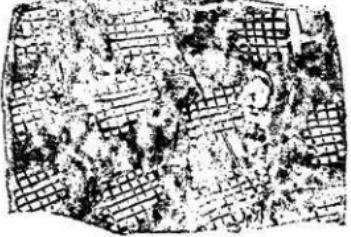
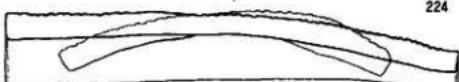
第38図 出土遺物拓影図 (1/5)



第31図 出土遺物拓影図 (1/5)

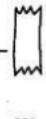


224

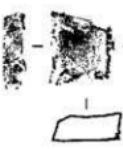


225

0 10 20cm



226



227

第32図 出土遺物拓影図 (1/5) 224・X33 Y21区、225・X36 Y15区

(6) まとめ

① 造構について

No21遺跡の丘陵上からは、飛鳥時代後半から白鳳時代前期にかけての瓦陶兼業窯跡1・須恵器窯跡1・堅穴住居跡24・段状造構5など多くの造構を検出した。その殆んどは造構検出面での確認であり、一部を完掘した。裾部には奈良時代以降の製鉄関係の炭焼窯跡や製鉄炉が存在した。今回のまとめでは奈良時代以降のことは省略する。

窯跡 瓦陶兼業窯は1基が丘陵中程に位置する。窯跡は地山を掘り下げ、スサ入り粘土で天井を構築した半地下式無階無段登窯である。窯体内の一部調査では窯出し後の状態であった。第2号窯跡は半地下式の同じ構造をもつ須恵器窯跡である。第1号窯跡灰層と第2号窯体内の出土須恵器は、ほぼ同時期である。

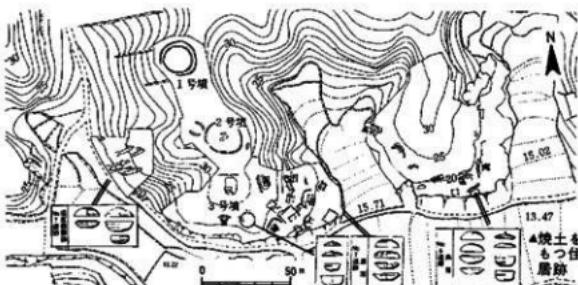
堅穴住居跡 平面形が隅丸方形または隅丸長方形をなす住居跡は、頂部近くに多くみられ、完掘した2例では平面形、カマドの煙出しに違いがみられた。木掘の第1・15号住居跡は南側にカマドが付設され、調査の2例を含め共通する。頂部近くでは未掘第5号と第6号に重複がみられ、また住居跡が集中することから建て替えが推定される。

段状造構 段状造構とは丘陵斜面を削平し、平坦なテラスを設け、そこに堅穴住居跡とは異なる性格の建物跡を統称して、便利的に用いた名称である。No21遺跡では斜面の地山上面において多くの造構を検出した。住居跡と呼んだ中には、以後の調査で段状造構となるものも含んでいる。第2・3号段状造構では中央に地床炉をもち、未掘の第1・10号でも焼土を認めた。これらの上屋構造は柱穴が浅く不明確なことから、比較的簡易な堅穴状建物が想定される。

段状造構は奈良時代前半のNo20遺跡（池野他 1979）（長さ約20m、幅約3m）の長い例やNo16遺跡第1号段状造構がみられ、主柱穴が不明確で上屋構造は明らかでない。近くにはカマドを付設する堅穴住居跡があり、二形態の建物が存在する。須恵器生産に関する簡易な建物跡と思われる。また6世紀末から7世紀初頭のNo7・6遺跡は工人集落跡と考えられる。須恵器窯跡群と時期が一致するのはNo6遺跡であるが、造構の性格・形態はNo7遺跡と似る。全て斜面上に平坦面を作る。堅穴住居跡は4本主柱が多く、外周溝を持つものと持たないものがあり、前者は住居跡中央に地床炉をもつ。別に柱を持たないか、あっても浅く小さいものは納屋などと考えられ、一方掘立柱建物がすでにこの時期に存在する。No20遺跡とは立地条件が似ているが、形態差・構造差が大きい。

工房跡 工房跡と決定する条件は、作業場の痕跡が傍証されることであるが、No21遺跡では粘土等の原料置場など未確認であり、段状造構の性格が明らかでないが、No16遺跡の須恵器窯跡に存在する第1号段状造構の状態から、No21遺跡も作業場的性格の造構と想定したい。

粘土採掘穴 谷部の流水道付近には良質の粘土層が1.5m前後の厚さで広くひろがっている。この西側には多くの穴が検出され、流水道にそって約200mも続く、その間にいくつかの群がみられる。穴は谷側から斜面上に掘り進む。この穴の時期は、出土土器から窯跡と同時期とみなせ、須恵器・瓦製作の粘土採掘穴と推定した。



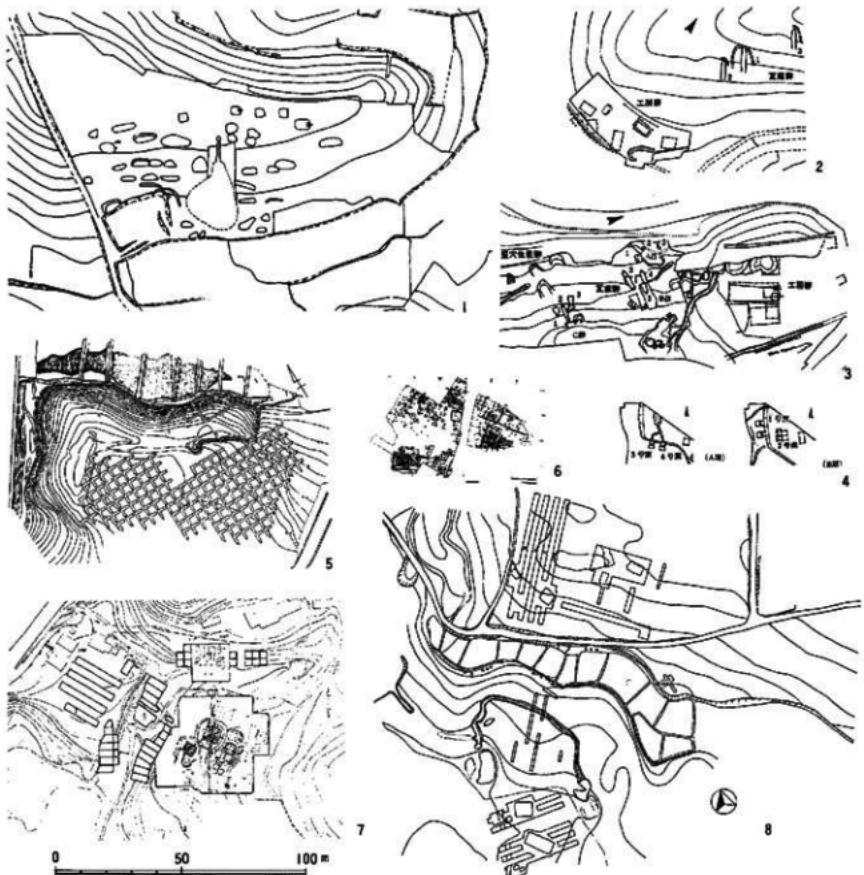
第33図 須恵器窯跡と集落

主に6世紀末～7世紀初頭

古代では瓦生産に携わる現地の
工房跡を瓦屋と呼んでいる。

全国で7～9世紀の瓦窯跡の調査例は多いが、工房跡と住居跡が同時に調査された例は少ない（第33図参照）。工房跡はいずれも掘立柱建物であるが、流団地内は掘立柱建物以外も想定できる。（上野）

註① 古代の記録に「瓦屋」とみえるものにあたると思われる。



第34図 発掘された主な瓦屋 (2・3・4は毛利光1983より)

遺跡名	所在地	時代	検出先	検出遺構	備考・文献
1 小竹瀬通裏庭地内 高士寺跡付近	青井谷 大門町及戸田	奈良後期～白鳳朝(?) (7世紀中葉)	御手角遺跡	瓦窯跡1・瓦窯跡2・櫛穴住居跡24・段状 窓跡1・土坑	[吉田徳 1983]
2 竹上里 遺跡	京都府宇治市鬼籠塚1丁目 白鳥(?)世紀房跡	飛鳥寺	瓦窯跡3・瓦窯跡6・地表遺跡1・西北 柱跡等1・溝	[吉田徳 1982・1983] [松本 1982] 飛行瓦窯跡・北野連家の軒丸瓦と同瓦	
3 桐木東道 遺跡	滋賀県大津市志賀 桑良水・平安南字	南益賀遺跡	瓦窯跡10・獨立柱遺跡6・粘土窯2・櫛穴住居跡	[林忠 1975・1981] [毛利光 1983] 飛行瓦窯跡・川原寺の軒丸瓦と同瓦	
4 曾根ヶ谷 遺跡	京都府相楽郡木津町 曾根ヶ谷	桑良桂井	瓦窯跡4・獨立柱遺跡5・窯・地表遺跡・獨立柱跡1	[岡本 1979] [毛利光 1983] 飛行瓦窯跡・飛行瓦窯跡の軒丸瓦と同瓦	
5 乙女不動瓦窯跡	梅木寺小山田町地区 乙女山田	泰良前牛	窯跡4・工芸跡3・櫛穴住居跡	[毛利光 1977] 水道山瓦窯跡の軒丸瓦と同瓦	
6 神明社 遺跡	宮城県仙台市鶴形6～15番 泰良接跡・平安初		独立柱遺跡1・柱跡3・櫛穴住居跡および櫛穴窓 跡6・瓦窯跡1・井戸跡1・粘土窯2・土柱跡20 ・窓1・ピット	[木村惟 1983]	
7 橋江 遺跡	宮城県仙台市橋江305-1番 泰良後半～平安初		瓦窯跡5・獨立柱遺跡8・櫛穴住居跡2・地表遺跡 8・土柱跡2・溝2・窓2	[橋越雄 1980]	
8 亂の寺瓦窯跡	美誠寺跡付近 亂の寺金久	古渡庵寺	瓦窯跡2・住居跡または工房跡5・革新窯上遺跡1 ・窓	[川崎信 1980・1981]	

表2 主な瓦屋一覧(時代、検出構造の名称は報告書による)

② №21遺跡の須恵器について

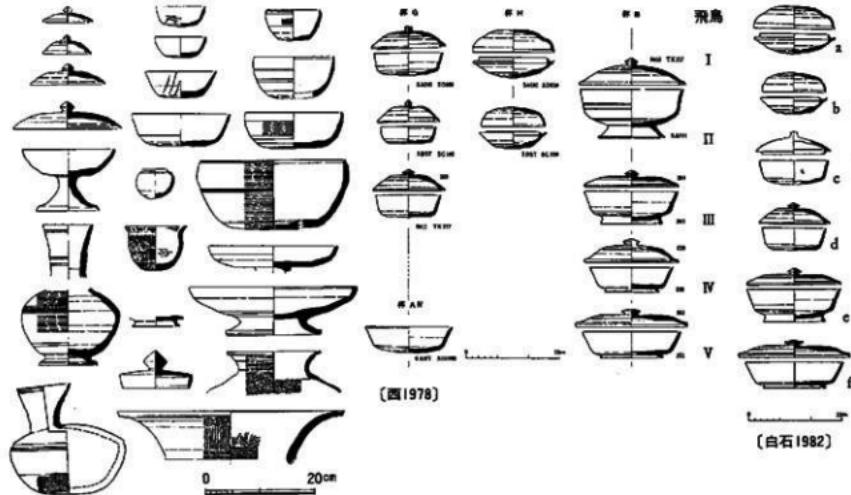
出土遺物の項でのべたとおり住居跡・段状遺構出土の須恵器は、第1・2号窓跡のそれとはほぼ同時期とみなしうる。また、第5次調査の出土資料を含めて谷部出土の須恵器も大部分はその時期のものである。したがって、ここでは窓跡の時期のこれらの須恵器を一括してとりあげ、その器種組成と型式を明らかにし年代についても考えてみたい。

須恵器の器種には杯・蓋・榠・鉢・盤・高杯・平瓶・横瓶・壺・甕・瓶がある（第35図）。たちあがりをもつ杯とそれとセットをなす蓋、この古墳時代以来の杯・蓋はまったくみられない。杯は無高台の杯Aが大部分をしめ高台付の杯Bはわずかに存在するにすぎない。杯蓋はすべて内面にかえりをもち頂部には乳頭状ないし宝珠形のつまみをつける。かえりの先端が口縁端部より下方にでるもののがみられるけれども數点にすぎない。

今回の調査でえられた杯蓋の完形品とおもな破片 190点を抽出し、その口径の計測を試みた。その結果、杯蓋は大きく3群に区分しうる。すなわち、蓋I：口径20~22cm、蓋II：12.0cm~14.2cm、蓋III：8.4cm~11.6cmである。それぞれの点数と全体比をみると、蓋I：5点（2.6%）、蓋II：26点（13.7%）、蓋III：159点（83.7%）であり蓋IIIの占める率が群をぬいでいる。さらに蓋IIIの内訳をみると、口径8cm代：3点、9cm代：31点、10cm代：69点、11cm代：56点であって口径10~11cmに集中する。後二者をあわせた125点はそれだけで全体の66%を占める。杯Aも杯蓋と同じく3群に区分しうる。すなわち、杯A I：口径18cm、杯A II：口径12cm前後、杯A III：口径10cm前後である。杯A IIIがもっと多く、杯A IIがそれに次ぎ、杯A Iがわずかに加わる。杯A IIIは蓋IIIと、杯A IIは蓋IIとそれぞれ組みあうと考えられ、奈文研でいう「杯G」〔西1978〕に該当する。蓋Iは未発見の大型の杯B Iに対応するだろう。

上に示した統計数値はあくまで暫定的な分析結果にすぎないが、口径の小さな杯A III・杯A 蓋IIIが主体をなし杯A II・杯A 蓋IIがこれに次ぐというおよその傾向は認めてよい。このことは口径と器高のわかる個体をもとに図化した第36図からもほんと見て取れる。このように№21遺跡の杯Aは、法量による器種分化がわずかに認められるものの、上にあげた数量的偏在性からいえば比較的単純な様相を示しているといえる。

高杯はすべて無蓋高杯であって有蓋高杯は絶えてみられない。また口径よりも器高が低く、短い脚部は強く外方へ



第35図 №21遺跡出土須恵器の器種組成と7世紀代の須恵器編年譜案

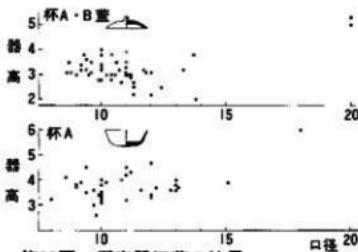
のびる。脚部には透しをもたない。また沈線による段をもつものもほとんどない。こうした諸特徴をもつ高杯は、長脚二段透しの高杯の消滅後に現われたもので、器高がきわめて低いなどそのなかでも後出的な型式である。

その他の器種では、壺・提瓶など古墳時代以来の器種がほぼ消滅しているのに対し、盤や銅模倣形態の鏡など奈良時代に連続するものがみられる。また円面鏡の存在も無視できない。

つぎに、このようなNo21遺跡の須恵器の編年的位置づけを考えてみたい。これを7世紀代に置くことにまず異論の余地はないであろう。さらに細かなその位置づけを行うために古墳時代終末期から奈良時代にかかる須恵器の編年研究に以下少しふれておく。森浩一氏は1958年、古墳時代から奈良時代の須恵器をI型式からV型式に分け、それをさらに細分した〔森1958〕。その後田辺昭三氏は陶邑古窯址群の発掘成果をもとにI～Vの5期を設け、それを4ないし5型式に細分した〔田辺1966〕。そこでは7世紀代の資料はTK 217・209の2型式が示されたにすぎないが、近年ではTK 46・48の2型式を加えてそれを補強している〔田辺1981〕。奈文研は小野原宮推定地の調査報告において杯をA類～E類に5区分し、その年代についても検討を行い〔福田1976〕、さらにそれを承けて飛鳥I～Vの5期区分を示した〔西1978〕。近年では白石太一郎氏が、こうした諸研究の型式区分を大筋で認めながらも絶対年代をめぐって新たな見解を示している。すなわち白石氏によれば、従来の諸研究にみられる7世紀代の須恵器の年代観は藤原宮の時期を除いて全体にやや降下させるべきであるとする〔白石1982〕。

さて、これらの諸研究をふまえてNo21遺跡の須恵器とくに杯と杯蓋をみると奈文研のいう飛鳥IIとIIIの両者に通じる要素をともに備えている。飛鳥IIの基準資料とされる坂田寺跡の池S G 100出土の土器群では、「杯G」は口径約9cmのものであり、その数量はたちあがりをもつ杯Hと相半ばするという。しかしにNo21遺跡では杯Hは消滅してみられず、杯は口径10cm前後の杯AIIIが主体をなす。出土遺跡の性格の違いを捨象していえば、そのかぎりではNo21遺跡の土器は飛鳥IIよりも新しくなる。あるいは飛鳥IIが持米さらに新旧に細分しうるとすればその新段階のものが含まれているともいえる。いっぽう飛鳥IIIの土器はその組成を含めた実体が十分呈示されていないが、杯は「口径10cm前後になり、法量拡大の方向が現われる」という〔西1978〕。この点ではNo21遺跡の杯は飛鳥IIIにも一部該当する。これを全体としてとらえれば、No21遺跡第1・2号窯跡の須恵器は、飛鳥IIから飛鳥IIIにかかる中間的形態を示す良好な一括資料であるとみてよい。このことは飛鳥IIとIIIの中間的形態を含む藤原宮の道路S F 1081・1082側溝出土の杯Gに近似することや、その口径がNo21遺跡と同じく10.0cm～11.8cmの間に集中することからも首肯される。

またNo21遺跡の須恵器は、窯跡の資料では陶邑古窯址群のTK 46号窯のそれに近似するが、これは7世紀中葉すぎに位置づけられている〔田辺1981〕。さらに白石太一郎氏による編年（第35図右）と対比すれば、No21遺跡の杯はそのd型式を一部含んでいるが、むしろc型式とd型式との間に位置づけることができる。白石氏によれば、c型式には「7世紀の第2四半期でも中葉に近い年代」が、またd型式には「7世紀の中葉から一部7世紀の第3四半期にかかる時期」が考定されている〔白石1982〕。以上のべたところからNo21遺跡の須恵器の年代として、7世紀の第2四半期の終りごろから第3四半期にかかる比較的かぎられた時期を想定して大過ないであろう。つまり、端的にいえばおおよそ7世紀の中頃から後半にかかるものであり、これを文化史的な時代区分で言いかえれば飛鳥時代の終りごろから白鳳時代の初めごろと表現しうる。なお、上に引用した奈文研・白石氏による須恵器の編年と年代観も確立されたものではなく、今後その検証ないし内づけを必要とするものである。No21遺跡の須恵器は、むしろこうした諸研究をさらに発展させていくうえでも看過しえない良好な一括資料となりうるものであろう。



(白丸：復原口径・器高、単位：cm)

③ 瓦について

小杉流通業務団地内の窯業史 当地内では6世紀後半から7世紀初頭に属する、No.7・No.16遺跡及び、生源寺窯跡では須恵器生産が操業されると共に、窯跡から漏れて丘陵中に工人集落跡が當まる。この時期は全国的な須恵器の地方窯伝播期に当り、県内でも富山市センカリ山窯跡や上市町堀谷窯跡が知られる。また窯跡近くには主要な群集墳の形成をみ、小杉流通業務団地内には山王宮古墳群が対比されている〔藤田 1981〕。

6世紀末から7世紀前半の工人集落の変遷は、No.6(窯跡群に対比)→No.7→No.6遺跡と工人が動いていたことが出土須恵器から知られるが、後二者の窯跡は未発見であり、近くに存在した可能性が高い。7世紀中葉に至ってNo.21遺跡に工人集落が移り、須恵器・瓦生産を行うが須恵器・瓦生産の前後関係は明らかでない。また須恵器生産の一端を示すものに陶質の内面當て具の出土がある。土製の製陶具の古い例は、弥生時代後期に属する福岡県宮の前遺跡から出土しており〔福岡市歴史資料館 1979〕形状、大きさにNo.21遺跡と共通面がある。また6世紀前半のものとして福岡県野坂遺跡の焼失住居跡内の出土例があり〔松岡他 1970〕、細長く当面が無文である。陶製の同心円文のものは、岐阜県美濃國衛古窯跡群から集中して11個が発見されている〔大江 1982〕。時期は8世紀から9世紀頃である。No.21遺跡は陶製の同心円文を施した當て具であり、握り部を失し使用したかどうかは不明である。なお奈良時代前半のNo.18遺跡C地区からも土師質の1例が知られており、一般的には愛媛県久米塙遺跡出土例〔吉本 1981〕のような木製當て具であろう。小杉流通業務団地内では8世紀前半に至って3遺跡の須恵器窯跡と共に工人集落が丘陵上や谷間に存在する。8世紀後半から9世紀には鉄生産が行われ、製鉄用の炭焼窯跡や製鉄炉がNo.21遺跡など4遺跡にみられる。

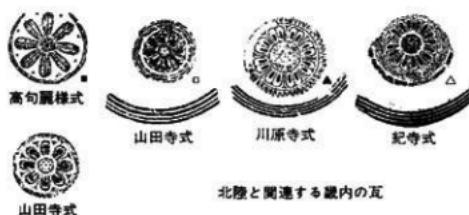
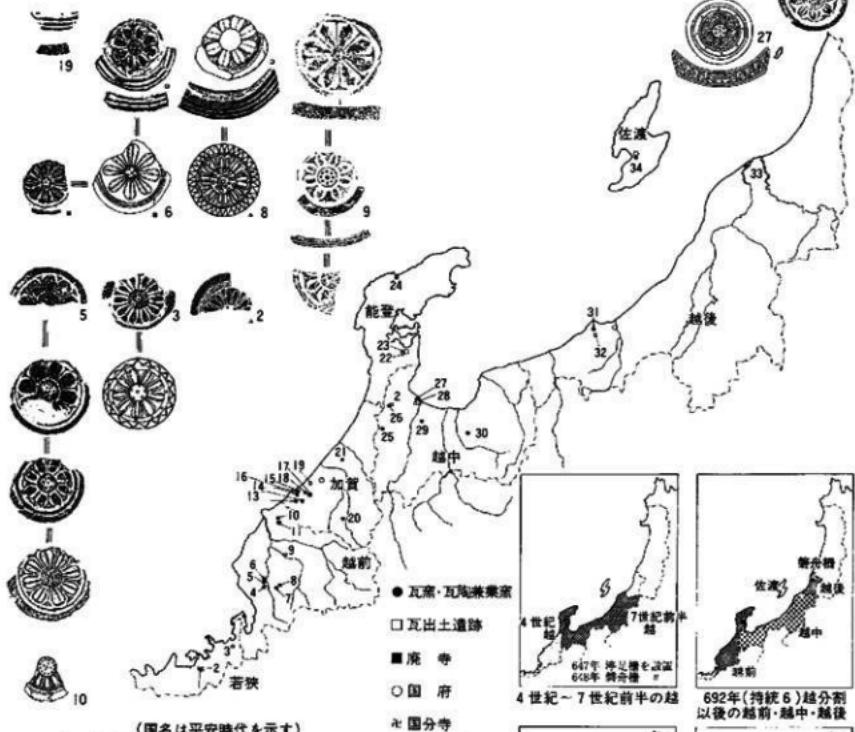
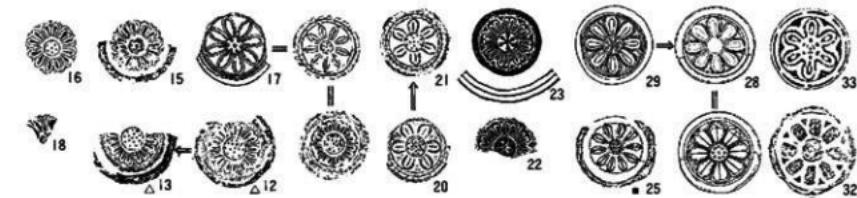
昭和57年の調査研究 No.21遺跡の瓦の供給先は北西約11km離れた、現庄川左岸の伏木台地の高岡市御亭角遺跡であることが、西井氏により明らかとなった。御亭角遺跡では、白鳳期の新丸瓦二型式のうち、一つはNo.21遺跡とはほぼ同型である。平瓦は叩き調整痕の技法の識別から格子叩き4種と斜格子叩き2種が存在し、この内A:叩きと呼ばれる格子叩き痕がNo.21遺跡の平瓦と叩き調整具が同范であり、他の平瓦は補修用(A:はのぞく)ともみられた。また御亭角遺跡を庵寺とみれば、7世紀中葉の創建寺院が想定でき、地方における最古の寺院と考えられる。

一方古岡氏は県下の古瓦の出土地の内容と文献史料の検討から、御亭角遺跡出土の瓦を白鳳後期とした場合には、

遺 坂 名	所 在 地	時 期	類 别・文 章	遺 坂 名	所 在 地	時 期	類 別・文 章
1 有田郡分室	福井県小浜郡分室	奈良末~平安	〔小浜川 1974〕	18 遠 倉 里 寺	石川県加賀市庄内宇津谷合	白鳳末	〔神文研 1962〕
2 大 箱	福井県小浜郡大糸町	白鳳末	〔東文研 1985〕	19 越 津 田 道 院	石川県加賀市鶴来町	・	〔吉岡 1975〕
3 有 道 宮	福井県小浜郡美浜町道守字小篠宮遺跡	白鳳末	〔東文研 1985〕	20 海 連 里 田 道 院	石川県能郷郡輪島市	白鳳後	〔輪島・木立 1963〕
4 片 山 遺 墓	福井県越前郡片山町	白鳳末~奈良初	〔水野 1983〕	21 木 松 里 寺	石川県石川郡野々村町	白鳳後	〔東文研 1985〕
5 大 田 遺 墓	福井県武生市大田町本町字李江	白鳳末	〔東文研 1985〕	22 木 野 里 寺	石川県七尾市千町町	奈 兵	〔東文研 1985〕
6 雨 草 遺 墓	福井県武生市雨草町	白鳳末	〔東文研 1985〕	23 間 里 田 今 乃 木	石川県七尾市西町	奈良末~平安	〔東文研 1985〕
7 吉 井 遺 墓	福井県武生市吉井町上の境内	白鳳	〔水野 1983〕	24 間 介 里 野	石川県輪島市大野町相島	白鳳後	〔東文研 1985〕
8 野 々 旗 遺 墓	福井県武生市五分町字野々旗	白鳳前	〔東文研 1985〕	25 間 田 里 佐 野	石川県小松市宇佐野春山	白鳳末	〔伊藤 1985〕
9 番 月 遺 墓	福井県武生市番月町小篠宮境内	白鳳前	〔水野 1972~1983〕〔東文研 1985〕	26 小 金 里 今 井 野	石川県小松市金屋山	奈 兵	〔椎木 1985〕
10 木 之 木 遺 墓	福井県武生市木之木町	奈良	瓦陶窯跡〔吉井野 1971〕	27 金 中 国 分 寺	石川県高岡市伏木	奈良末~平安	〔高岡教委 1977〕
11 東 山 遺 墓	福井県越前郡今立町東山	奈良	〔東文研 1985〕	28 金 里 角 道 院	石川県高岡市伏木	飛鳥始~平安	〔東文研 1985〕
12 馬 須 五 遺 墓	石川県加賀郡馬須五町	白鳳末	〔東文研 1985〕	29 小村井田山口22遺跡	石川県村上市小村井	飛鳥始~白鳳末	〔古岡等 1983〕
13 丹 斧 遺 墓	石川県加賀郡丹斧町	白鳳末	〔東文研 1985〕	30 中 田 三 王 野	石川県中川郡上市町	白鳳末	〔古岡等 1984〕
14 高 尾 遺 墓	石川県加賀郡高尾町	白鳳末~平安	〔東文研 1985〕	31 小 金 里 佐 野	石川県輪島市内鬼	奈 兵	〔古岡等 1984〕
15 金 須 五 遺 墓	石川県加賀郡金須五町	白鳳末~奈良初	〔東文研 1985〕	32 金 里 道 野	新潟県新潟市東区	奈 兵	〔新井 1985〕
16 須 早 金 里 遺 墓	石川県加賀郡須早町	白鳳末~奈良	〔石川県 1986〕	33 金 里 山 野	新潟県三条市寺泊町	・	〔寺村繁 1986〕
17 月 並 遺 墓	石川県加賀郡月並町	白鳳末~奈良	〔小浜川 1979〕〔東文研 1985〕	34 金 里 四 寺	新潟県南魚沼郡湯沢町	奈 兵	〔寺村繁 1986〕

遺 坂 名	所 在 地	時 期	類 别・文 章	遺 坂 名	所 在 地	時 期	類 别・文 章
1 有 田 遺 墓	福井県小浜郡分室	奈良末~平安	〔小浜川 1974〕	2 金 里 佐 野	石川県加賀市庄内宇津谷合	白鳳末	〔神文研 1962〕
3 大 箱	福井県小浜郡大糸町	白鳳末	〔東文研 1985〕	3 越 津 田 道 院	石川県加賀市鶴来町	・	〔吉岡 1975〕
4 有 道 宮	福井県小浜郡美浜町道守字小篠宮遺跡	白鳳末	〔東文研 1985〕	5 海 連 里 田 道 院	石川県能郷郡輪島市	白鳳後	〔輪島・木立 1963〕
5 片 山 遺 墓	福井県片山町	白鳳末~奈良初	〔水野 1983〕	6 木 松 里 寺	石川県石川郡野々村町	白鳳後	〔東文研 1985〕
6 大 田 遺 墓	福井県武生市大田町本町字李江	白鳳末	〔東文研 1985〕	7 木 野 里 寺	石川県七尾市千町町	奈 兵	〔東文研 1985〕
7 雨 草 遺 墓	福井県武生市雨草町	白鳳末	〔東文研 1985〕	8 间 里 田 今 乃 木	石川県七尾市西町	奈良末~平安	〔東文研 1985〕
8 吉 井 遺 墓	福井県吉井町上の境内	白鳳	〔水野 1983〕	9 间 介 里 野	石川県轮島市大野町相島	白鳳後	〔東文研 1985〕
9 野 々 旗 遺 墓	福井県吉井町野々旗町	白鳳前	〔東文研 1985〕	10 金 里 佐 野	石川県小松市宇佐野春山	白鳳末	〔伊藤 1985〕
10 番 月 遺 墓	福井県吉井町番月町	奈良	瓦陶窯跡〔吉井野 1971〕	11 小 金 里 今 井 野	石川県小松市金屋山	奈 兵	〔椎木 1985〕
11 東 山 遺 墓	福井県今立町東山	奈良	〔東文研 1985〕	12 金 中 国 分 寺	石川県高岡市伏木	奈良末~平安	〔高岡教委 1977〕
12 馬 須 五 遺 墓	石川県加賀郡馬須五町	白鳳末	〔東文研 1985〕	13 金 里 角 道 院	石川県高岡市伏木	飛鳥始~平安	〔東文研 1985〕
13 丹 斧 遺 墓	石川県加賀郡丹斧町	白鳳末	〔東文研 1985〕	14 小 村 井 田 山 口 22 遺 跡	石川県村上市小村井	飛鳥始~白鳳末	〔古岡等 1983〕
14 高 尾 遺 墓	石川県加賀郡高尾町	白鳳末~平安	〔東文研 1985〕	15 中 田 三 王 野	石川県中川郡上市町	白鳳末	〔古岡等 1984〕
15 金 須 五 遺 墓	石川県金須五町	白鳳末~奈良初	〔東文研 1985〕	16 小 金 里 佐 野	石川県輪島市内鬼	奈 兵	〔古岡等 1984〕
16 須 早 金 里 遺 墓	石川県須早町	白鳳末~奈良	〔石川県 1986〕	17 金 里 道 野	新潟県新潟市東区	奈 兵	〔新井 1985〕
17 月 並 遺 墓	石川県月並町	白鳳末~奈良	〔小浜川 1979〕〔東文研 1985〕	18 金 里 四 寺	新潟県南魚沼郡湯沢町	奈 兵	〔寺村繁 1986〕

表3 古代寺院・瓦出土遺跡地名表



北陸と関連する畿内の瓦

第37図 北陸の主な古瓦分布図 (飛鳥-奈良時代・縮尺不同)



702年から 708年の
越前・越中・越後

712年の越前・越後・出羽
(金子1983)に加筆

一般に持統天皇6年（692）頃とされる越国の分割、越中国成立の頃にあたり、御亭角遺跡が越中国宇比定地の古国府勝興寺に南接することから、国分寺に先行する国府関係寺院跡となり、白鳳前期とすれば越国分割以前の国造時代のものとなると両方の考えを示した。国造伊弥頭臣氏については、氏姓を射水臣とし本貫地を射水郡とするのが定説であって、「正倉院文書」天平勝宝4年の牒断簡に射水郡三鳴郷戸主射水臣（名欠）があり、「万葉集」巻18に記されている射水之郷が三鳴郷である蓋然性が高く、射水郡が国府付近にあったと考えれば、御亭角廃寺を射水臣氏の氏寺ないし、地方統治の一環として建立した宮寺的な可能性をもち、その勢力範囲からNo21遺跡に瓦の供給地をおくことや、中央の仏教文化をいち早く接取しうる立場にあったと結ばれた。

昭和58年度の成果 丘陵上の発掘により遺跡の内容が明らかになり、現地指導を頂いた上原氏の見解を列記する。¹¹⁹⁾ 現在発見されている7世紀前半のものは、いずれも瓦陶兼業窯で近畿地方に集中し、7世紀中頃の瓦陶兼業窯はNo21遺跡以外に北陸では発見されていない。工房跡、工人集落跡と瓦・須恵器を焼いた窯跡の調査例は十指（表2参照）にみたない。これらの工房跡はいずれも据立柱を基調としているのに対し、No21遺跡では竪穴住居構造の建物で、地域差なのか、その解明がまたれる。また富山県における地方寺院の成立が予想以上に古く、越國分立以前であり御亭角遺跡の存在は埼玉県寺谷廃寺〔藤原 1982〕と共に地方寺院の成立年代に修正を迫り、その歴史的解明という大きな問題を提起した。

軒丸瓦について No21遺跡出土の軒丸瓦は単弁8葉蓮華文で素文縁である。この文様の瓦は奈良県坂田寺や片岡尼寺〔福井 1970〕など数例があり、愛知県篠岡2号窯跡でも出土し7世紀後半として報告される〔大參・山田 1969〕。坂田寺では池（SG 100）の堆積土から飛鳥II段階の須恵器と共に類似する瓦が出土している〔奈文研 1973〕。時期は7世紀第2四半期である。¹²⁰⁾ No21遺跡の軒丸瓦の中房の蓮子は、1+6+8の三重構成で、坂田寺系軒丸瓦にはない要素をもつ。川原寺式以前の瓦では、奈良県法隆寺若草伽藍発掘品中の素弁8葉蓮華文の瓦当中房に1+8の蓮子を振り加えて、1+5+8の三重構成したものに例があり、7世紀第2四半期とされる〔岡本 1983〕。No21遺跡出土の軒丸瓦は、No21遺跡の須恵器の年代から百済系軒丸瓦の蓮子の多様化現象と関連をもっている。¹²¹⁾ （上野）

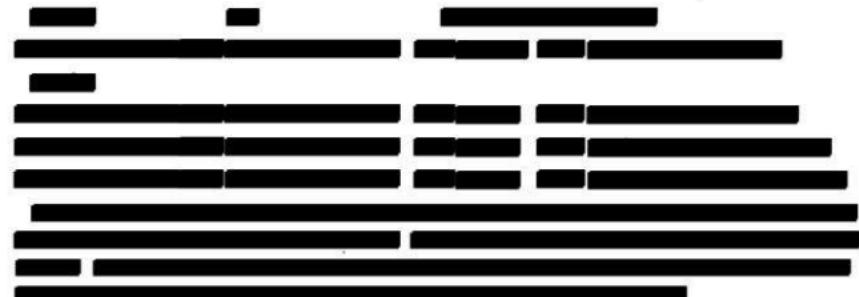
註① 富山県埋蔵文化財センター窓の書簡の内容による。

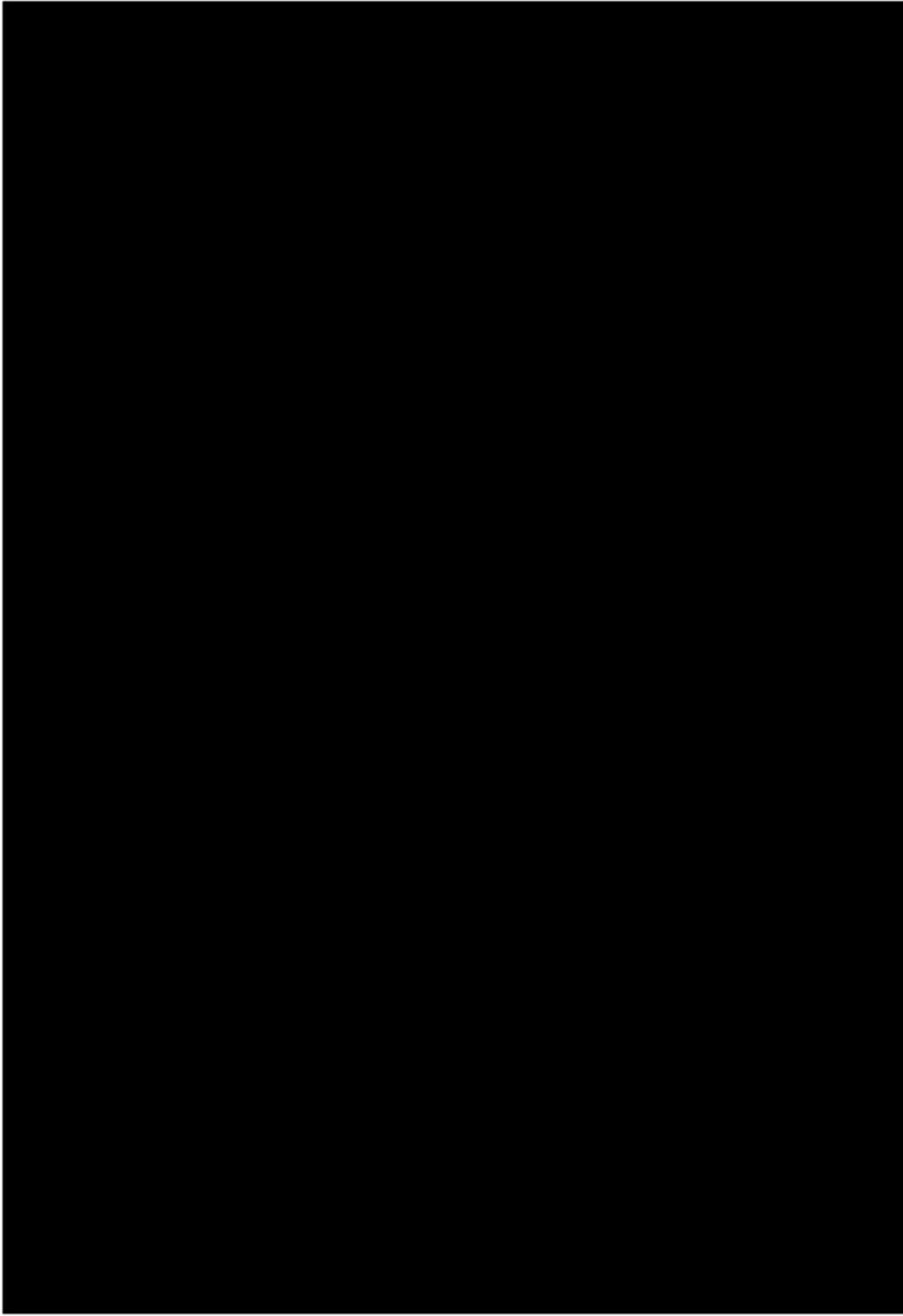
② 西 弘海氏には須恵器・瓦について教示をいただいた。この型式の軒丸瓦には、軒平瓦が伴わない。

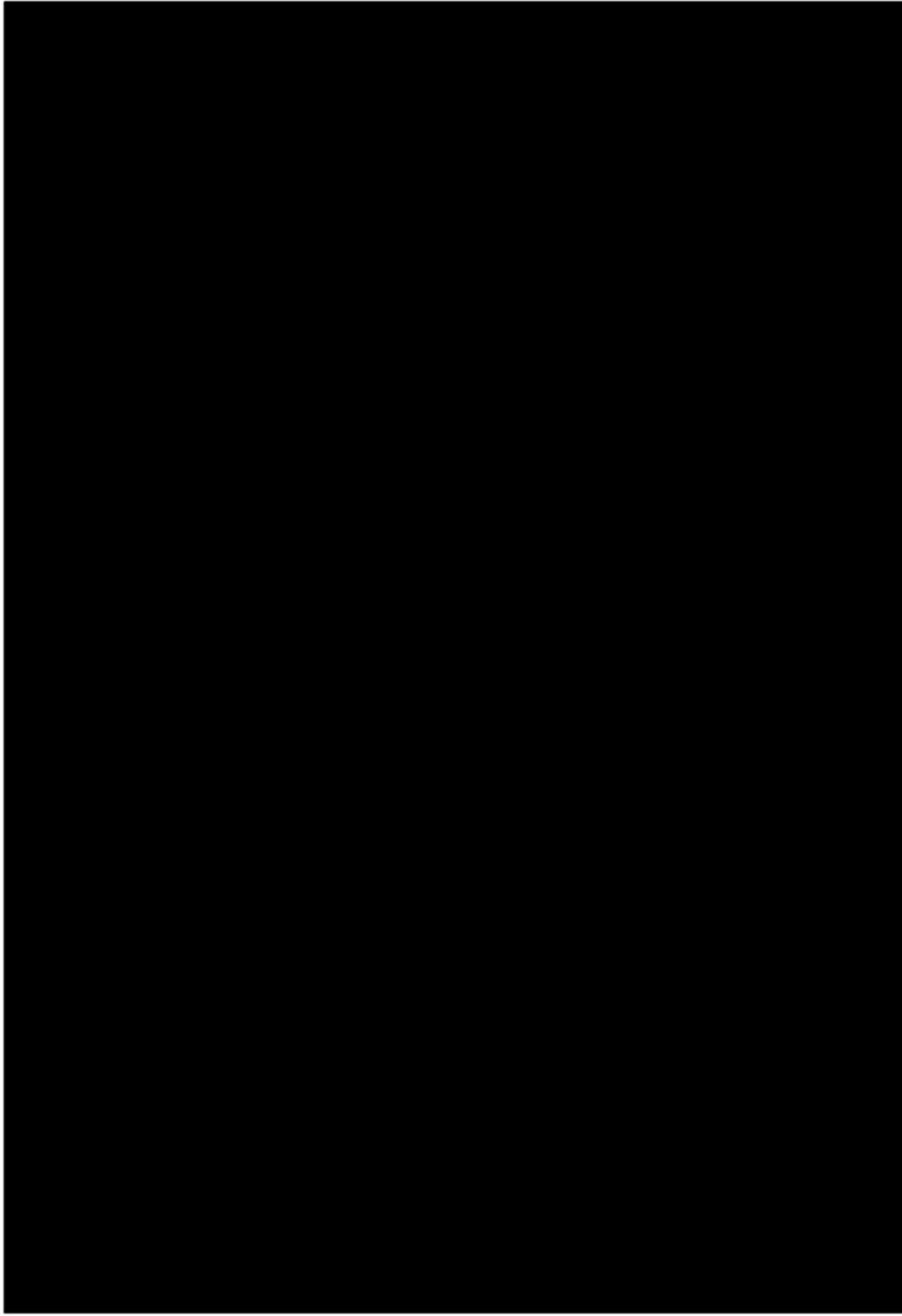
③ 上原真入氏にはNo21遺跡の所見や軒丸瓦の三重構成について多くの教示を得、その一部を記したにすぎない。百済では三重構成は末期的な様相とされ、日本と朝鮮では7世紀中期には併行して出現するとされる。

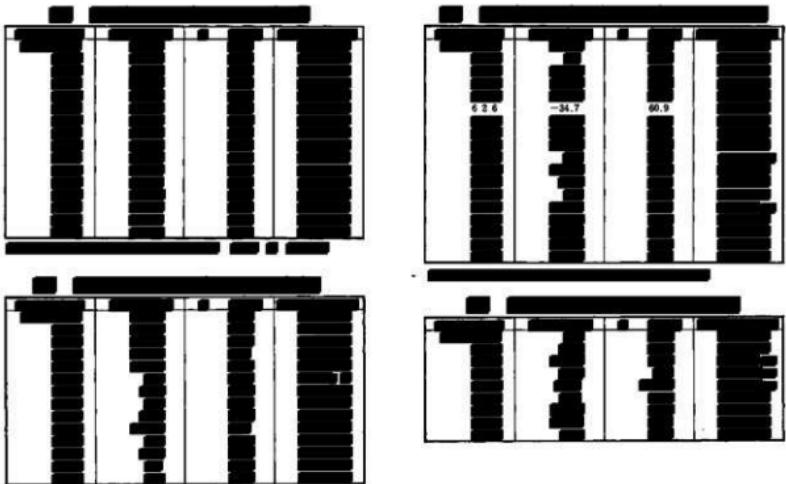
IV 放射性炭素による年代測定結果

学習院大学理学部教授 木越邦彦









VI 自然科学的年代測定結果について

No16遺跡の第1・2号窯跡、住居跡・段状遺構や周壁・底面の焼けた穴は、奈良時代前半期に含まれ、実年代が、前述のようにほぼ平城宮II段階（略年代 730年前後）と考えられている。またNo21遺跡の第2号段状遺構は7世紀中葉である。第1号炭焼窯跡は明確な出土遺物がなく時期は明らかでないが、今までの調査事例から、窯の形態が平安時代のものに似る。考古地磁気の測定結果は、近い年代がえられ、放射性炭素は全体に年代が古く出ている。（上野）

参考文献

- ア 愛知県陶磁資料館 1981 「特別展 猿投窓一須志器・寝器から中世陶へ」
- イ 石川県立埋蔵文化財センター 1981 「拓影」 第6号
- 伊藤隆三 1983 「遣唐新羅窯跡」「北陸の古代寺院とその歴史を探る 研究会資料」 富山市民俗民芸村考古資料館・富山考古学会
- 鶴根貴也 1970 「古瓦の模式と形式・型式」「飛鳥白鳳の古瓦」
- 福田亨司 1976 「人土器・遺物 II」 遺物推定地の遺物、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」 奈良国立文化財研究所
- ウ 上野 章・池野正男 1980 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務園地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 上野 章・池野正男・宮田道一・久々義典 1982 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務園地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 宇治市教育委員会 1982 「隼上リ瓦窯跡」 現地説明会資料
- 宇治市教育委員会 1983 「飛鳥へ運ばれた瓦—宇治市隼上リ瓦窯跡の発掘」
- オ 大江 余 1983 「考古学からみた各務原」『各務原市史』 考古・民俗編
- 大村敬道・伊藤 真 1968 「明星高丘地区埋蔵文化財調査報告」 兵庫県教育委員会
- 大參義一・山田友治 1969 「隕石第2-4号坑」「東名高速道路開闢埋蔵文化財調査報告」 愛知県教育委員会
- 岡本東二・田中哲雄・美津 淳・吉田恵二 1979 「眞言如々谷瓦窯（第9号地点）の調査」『余良山田』 奈良県教育委員会
- 岡本東三 1983 「法隆寺天寶9年焼失をめぐって—瓦からみた西院伽藍創建年代ー」「文化財論叢」同朋舎
- 小笠原好彦・西 弘海 1976 「「V考察 2 土器」『平城宮発掘調査報告書』」 奈良国立文化財研究所
- 小矢部市教育委員会 1982 「富山県小矢部市杉谷内床ノ山遺跡発掘調査現地説明会資料」
- カ 片野 雄・橋本正寿・松島吉信・田上浩幸 1984 「越中友坂遺跡発掘調査報告書」 越中町教育委員会
- 川崎純蔵・鶴志田第二・中野博久 1980 「坂の寺瓦窯跡発掘調査報告書」 藤田市教育委員会
- 川崎純蔵・鶴志田第二・横倉要次・鈴木泰行・川村浩司 1981 「坂の寺瓦窯跡発掘調査報告書」 藤田市教育委員会
- キ 木内式男 1983 「2・3世紀前時代の印加」 牡鹿房
- 岸本雅敏 1976 「N古代」『富山県魚津市早月II遺跡第2次緊急発掘調査概報』 富山県教育委員会
- 岸本雅敏 1982 「東北上遺跡」「北陸自動車道建設調査報告」 上市町上器・石器編一、上市町教育委員会
- 岸本雅敏 1983 「吉山における土器製造の成立と展開」「北陸の考古学」 石川考古学研究会誌 第26号 石川考古学研究会
- 吉備考古学会 1954 「表模絵について」 古墳考古88.9合併号

- 木村浩二・青沼一民 1983 「神明社墓跡」 仙台市教育委員会
- ク 久々志義 1983 「水鳥を形どった須恵器—小杉武道常磐園地内遺跡の調査から—」 墓文とやま 第5号 富山県埋蔵文化財センター
- コ 近藤義郎 1962 「能登式製塙工器の研究」 日本塗業の研究 第5集 日本塗業研究会
- サ 齋藤嘉造 1967 「越前国分寺復原遺跡」 武生市教育委員会
- 酒井電洋・岡田進一・松島吉信・高麗 幸 1984 「富山市上市町弓生城跡第4次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 坂井秀宗 1983 「栗原遺跡第6次発掘調査概要」 新潟県教育委員会
- 坂詰秀一・川原由典・三武正喜・池上 恒 1977 「乙女不動原瓦窯跡発掘調査報告」 小山市教育委員会
- シ 塚 黑夫 1964 「生産寺密室調査報告書」
- 白石太一 1982 「盆地における古墳の終末」 「國立歴史民俗博物館研究報告」 第1集
- 杉本 実 1982 「須磨寺瓦塚の発見」 「古代文化」 第34巻第12号
- セ 濱川芳利 1982 「四天王寺古墳群と出土の須恵器」 「考古学と古代史」 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 國 清・池野正男・神保孝造・宮崎達一・斎藤 雄 1983 「都市計画開拓路七ヶ美・太閤山・高岡城内遺跡群発掘調査概要」 富山県教育委員会
- タ 逸上秀明・木立雅郎 1983 「湯屋1号窯と生松院寺の関係」 石川考古 第150号
- 田辺三郎助 1984 「古代の「印伝」について」 「國立歴史民俗博物館研究報告」 第3集
- 田辺昭二 1966 「陶邑古窯址群I」 平安学園
- 田辺昭三 1970 「陶邑の変遷」 「古代の日本」5 角川書店
- 田辺昭三 1981 「須磨器大成」 角川書店
- チ 村谷光純・久我 春 1960 「寺治のおいたら 先史遺跡について」 寺治町教育委員会
- ト 富山県 1972 「富山県史考古編」
- 富山県教育委員会 1967 「越中郡分寺とその周辺の遺跡調査報告書」 富山県教育委員会
- 富山県教育委員会 1977 「昭和51年度富山県遺跡分布調査報告書」
- 富山市民俗芸文考古資料館・富山考古学会 1983 「北陸の古代寺院とその脈流を探る 研究会資料」
- ナ 齋藤国立文化財研究所 1962 「平城宮調査報告」
- 奈良國立文化財研究所 1973 「飛鳥・奈良宮先孫賀美概要」
- 奈良國立文化財研究所 1976 「平城宮調査報告」
- 奈良國立文化財研究所・奈良文化財センター 1983a 「飛鳥白馬寺院関係文獻目録」 墓文文化財ニース 第40号
- 奈良國立文化財研究所・奈良文化財センター 1983b 「海朝關係文獻目録」 墓文文化財ニース 第41号
- 横崎彰一 1982 「日本古代の陶器—とくに分類について」 「考古學論考」 小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社
- 横崎彰一 1983 「弦振窯の編年について」 「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)」 愛知県教育委員会
- ニ 西 浩司 1978 「土器の時期区分と型式化」 「飛鳥・奈良宮先孫賀美概要II」 奈良國立文化財研究所
- 西村公朝 1976 「仏像の再発見」 吉川弘文館
- ハ 備本 正 1974 「じょうべのま遺跡第5第1、上種」 「富山県埋蔵文化財調査報告書」 富山県教育委員会
- 備本 正 1976 「4、木製品」 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」 入善町教育委員会
- 橋本芳雄 1955 「小庭庵寺の心體と元徳院」 越中史蹟 5
- 林 博道・野野暮樹崩・松浦俊和・宮成良徳 1975 「後白河遺跡発掘調査報告」 滋賀県教育委員会
- 林 博道・野野暮樹崩・槇崎雪博・山口政志・吉谷芳寿 1981 「後木原遺跡発掘調査報告」 III 滋賀県教育委員会
- 七 福岡市立歴史資料館 1979 「土器—技術の変遷と美」 福岡市制90周年記念特別展
- 福岡市立歴史資料館 1979 「富山市吳羽田町堀尾免掘左官石」 富山市教育委員会
- 藤原尚志 1982 「II-6、猪俣村寺谷摩理寺」 「埼玉県古代寺院調査報告」 埼玉県県史編纂人室
- 舟崎久雄 1974 「富山県における須恵器の編年」 「富山県埋蔵文化財調査報告書」 田: 富山県教育委員会
- 古岡英輔・西井龍藏・上野 章・橋本正春 1983 「富山市小杉町・大門町小杉流造業者団地内第5次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 木 堀内明博 1983 「北野寺発掘調査報告書」 法匠会京都市埋蔵文化財研究所
- マ 松岡 史・前川英洋・鶴島邦弘 1970 「野黒坂遺跡」 「福岡市バイパス開通記念調査文化財調査報告 第1集」 福岡県教育委員会
- 松本幸治 1979 「G 土器」 「佐山郡魚住市佐佑除発掘調査概要」 富山県教育委員会
- ミ 木野和雄 1972 「福井市足羽町堀尾免寺調査概要」 福井県教育委員会
- 木野和雄 1983 「福井県における古瓦の桟相」 「福井県埋蔵文化財」 福井県県史編纂刊行会
- 木野九右衛門・赤坂伸介 1971 「瓦谷2号址発掘調査」 福井県教育委員会
- 木野正好 1974 「祭札と儀札」 「古代史発掘」 10 虹誠社
- モ 毛利光彦基 1983 「没叢地方の瓦窯」 佛教藝術 第148号
- 森 浩一 1958 「和泉河内属の須恵器編年」 「世界陶磁全集」 I 河出書房新社
- ユ 結城慎一・渡邉泰伸 1980 「勝浦遺跡発掘調査報告」 仙台市教育委員会
- 三 横山浩一・吉永義俊 1963 「萩原市捕枝の飛鳥時代・从属墓葬群」 「日本考古学協会昭和38年大会研究発表要旨」 日本考古学協会
- 吉岡康慈 1976 「平安前期の地方政府と国分寺(上)加賀国分寺をめぐる問題」 日本海城研究所報告 第8号
- 吉岡康慈 1977 「平安前期の地方政府と国分寺(下)加賀国分寺をめぐる問題」 日本海城研究所報告 第9号
- 吉岡康慈 1983 「奈良・平安時代の土器編年」 「東大寺宝積江庄遺跡」 桧枝岐市教育委員会・石川考古学研究会
- 吉岡康慈 1983 「御穂」 「東大寺宝積江庄遺跡」 桧枝岐市教育委員会・石川考古学研究会
- ワ 進辺一雄・大竹憲治他 1976 「郡山五番塙跡」 从蔵町教育委員会
- 渡辺 誠 1973 「織文時代の漁業」 雄山閣

No.16遺跡



1.遺跡遠景
東から



2.発掘区近景
南から



3.発掘区全景
南から

No.16遺跡
第1号窯跡



1.窯体内の遺物
出土状況
2.焼成部床面の
焼き台



3.窯体内の遺物
出土状況



4.側壁の貼り壁



5.焼成部床面
6.燃焼部のピッ
トと排水溝



7.灰層

図版第2

No.16遺跡

1. 発掘区近景
雨から



2. 第2号段状遺
構西から



3. 第2号段状遺
構東から





1. 発掘区近景
南から



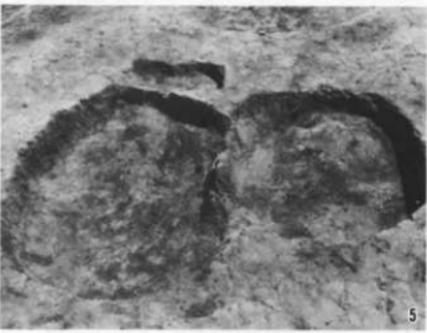
2.



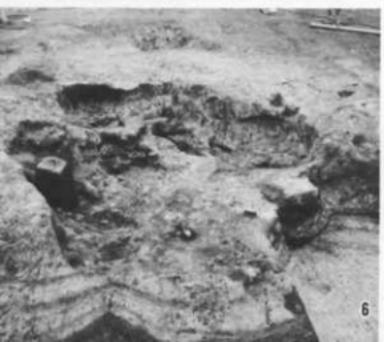
3.



4.



5.



6.



6.7. 第37・38・
39号穴

図版第4

No.16遺跡

遺物出土状況



1.X - 2 ~ 1 Y
26・27区谷部



2.谷部の発掘状況



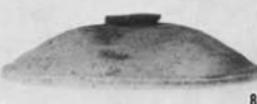
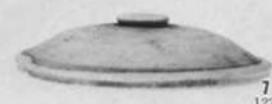
3.X - 1 Y 27区
谷部・鳥形須
恵器



4.X - 1 Y 26区
谷部
5.7.第2号段状
遺構
6.第3号溝付近

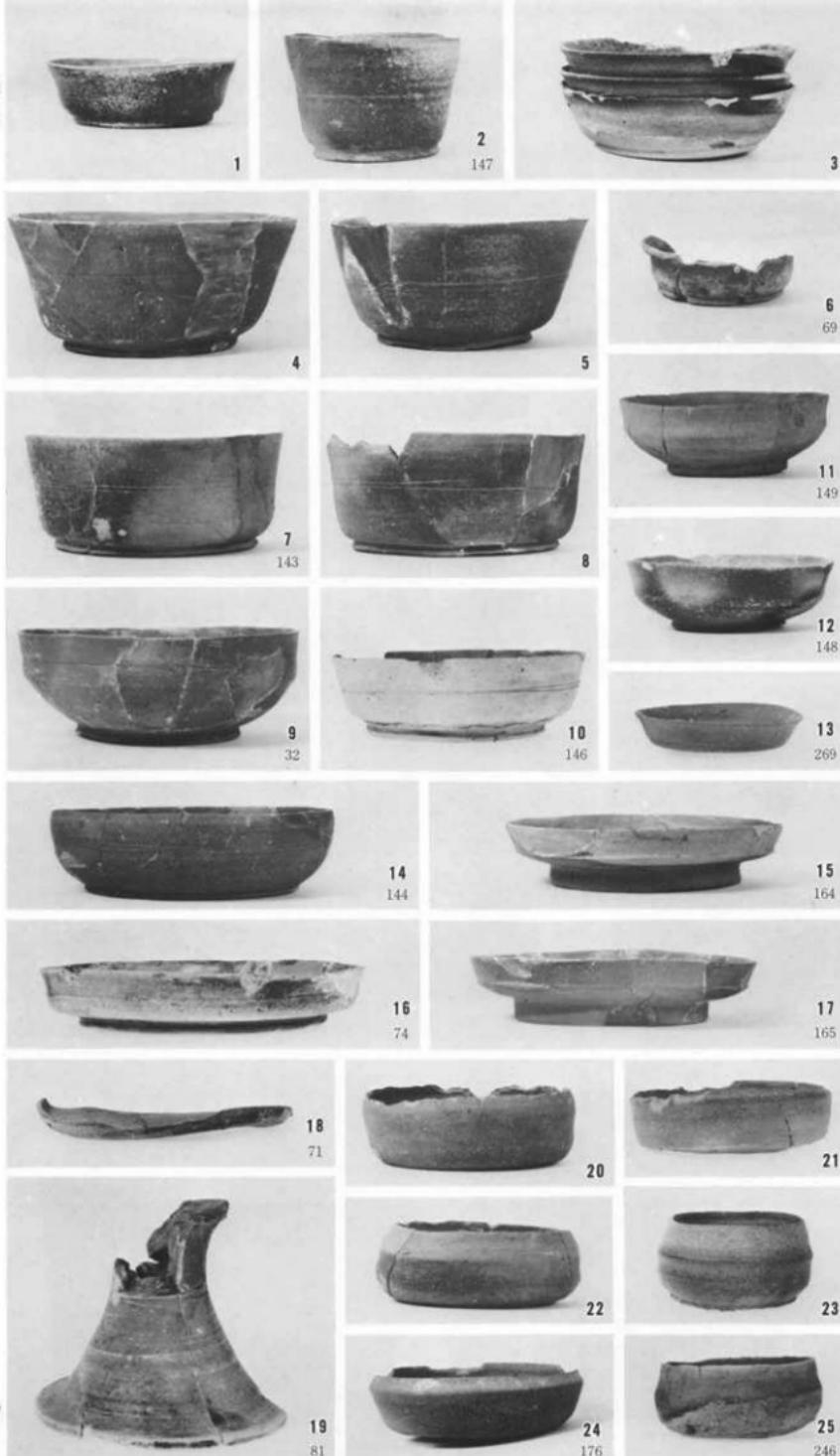


図版第5



No.16遺跡

出土遺物



図版第 1

No.16遺跡
出土遺物



図版第 8

No.16遺跡
出土遺物



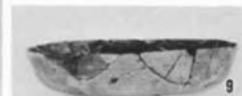
No.16遺跡
出土遺物

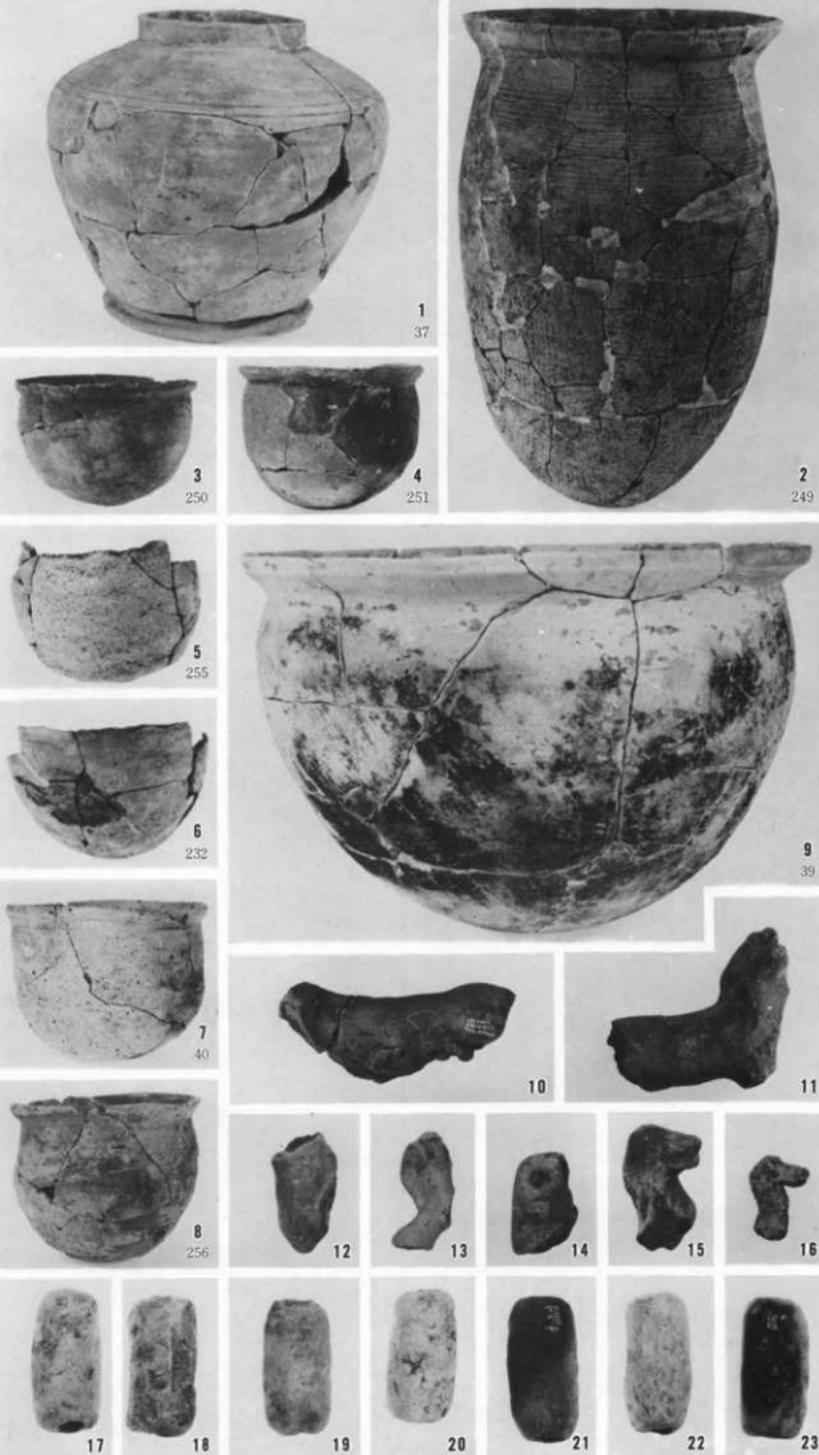


図版第10

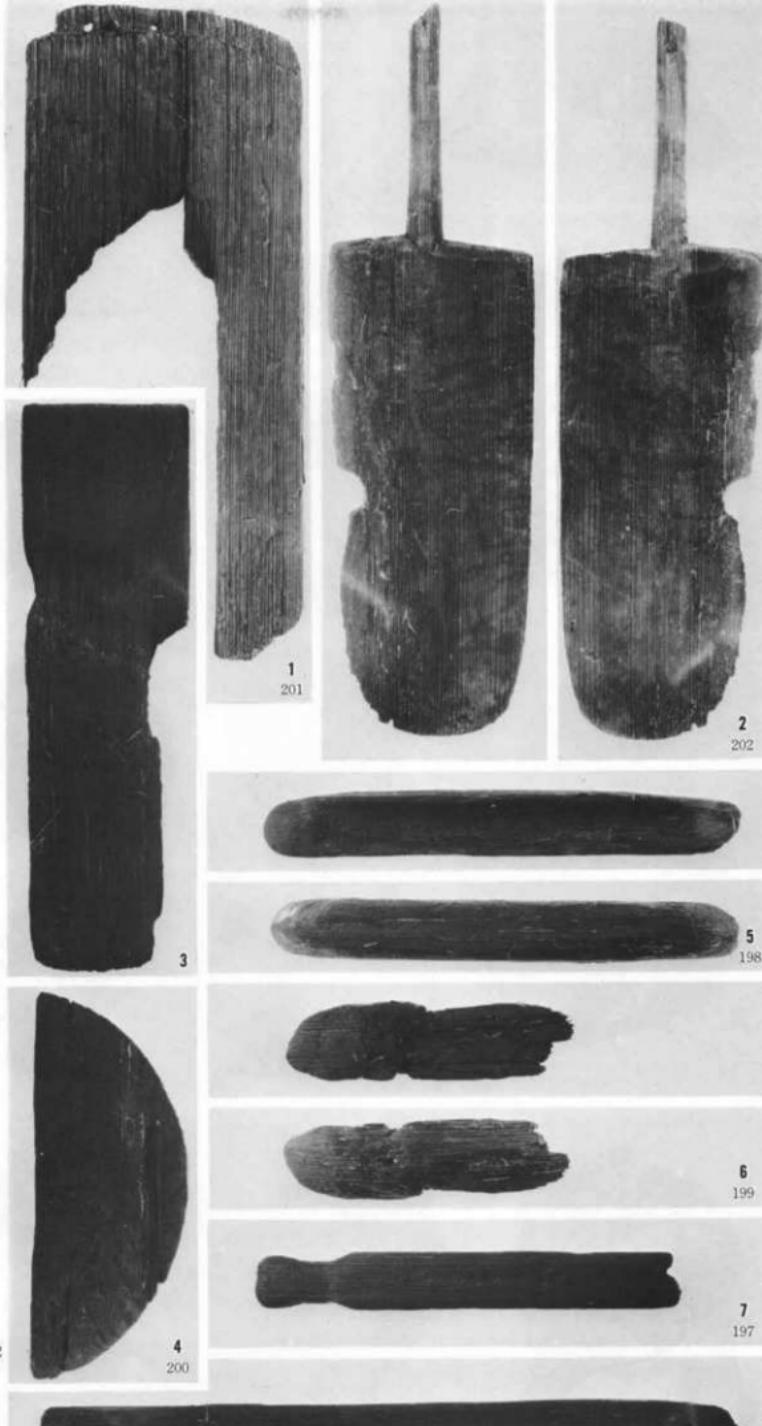
No.16遺跡

出土遺物

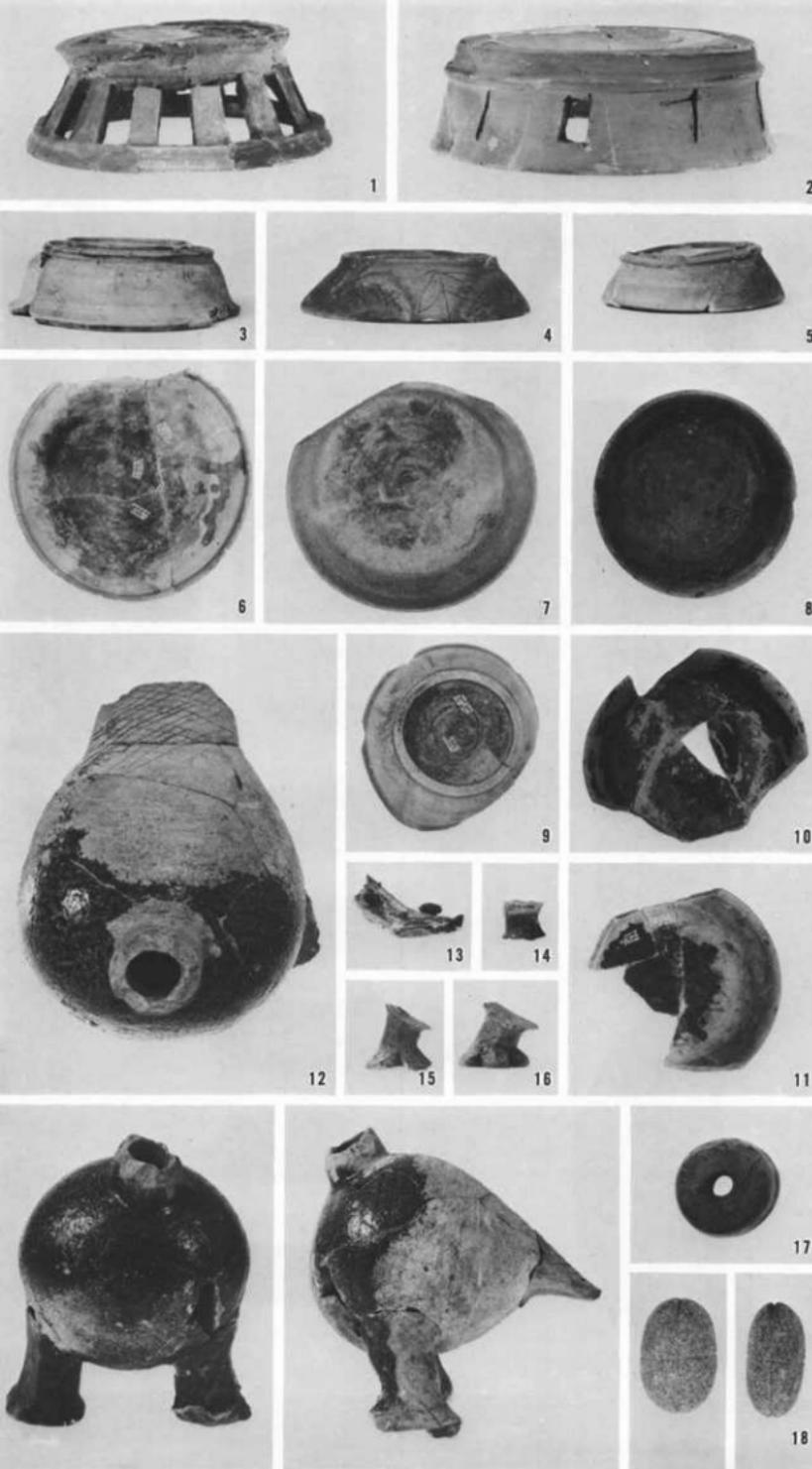




図版第12



No.16遺跡
出土遺物

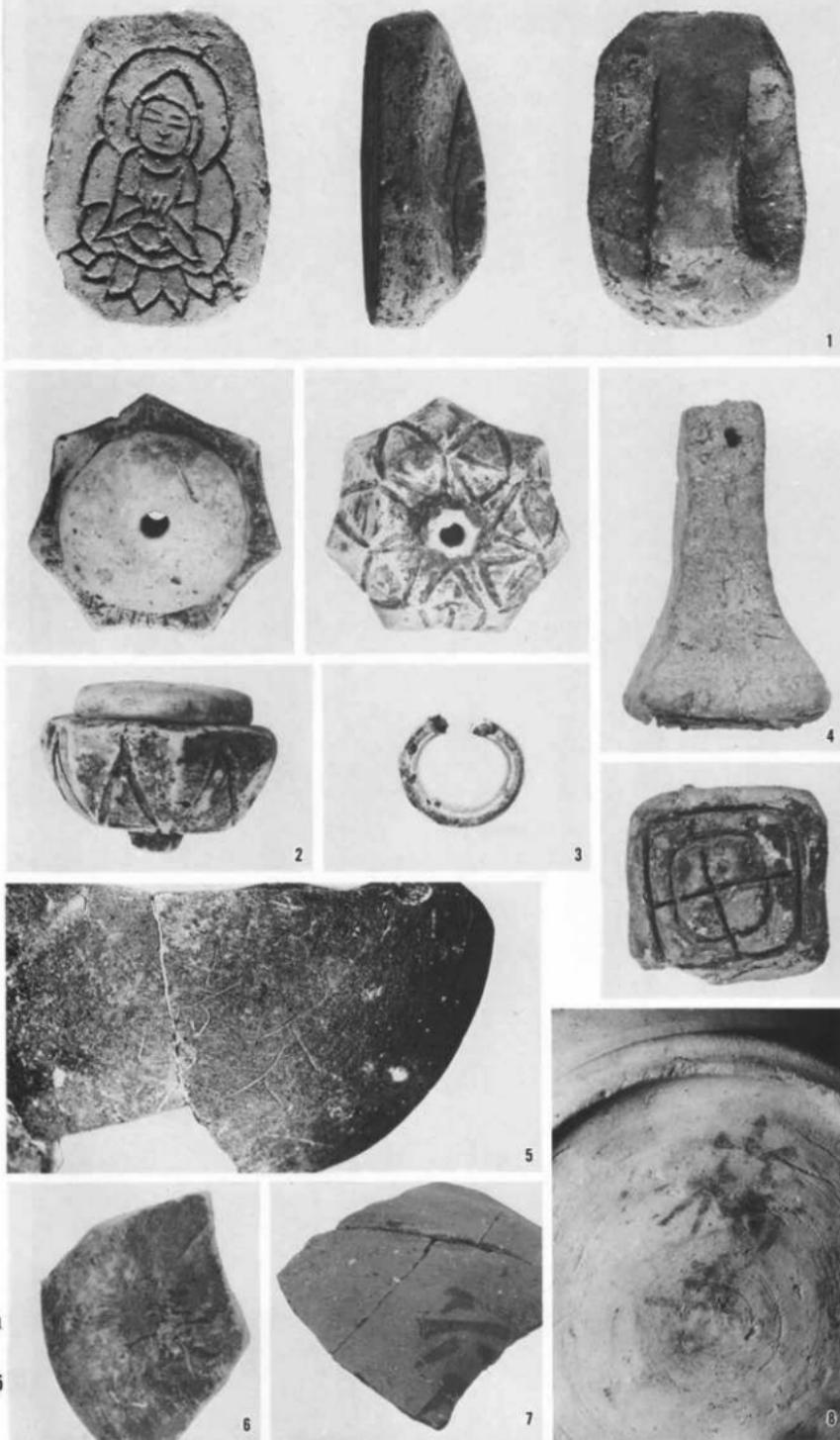


図版第14

18

17・18; 約1:2

No.16遺跡
出土遺物



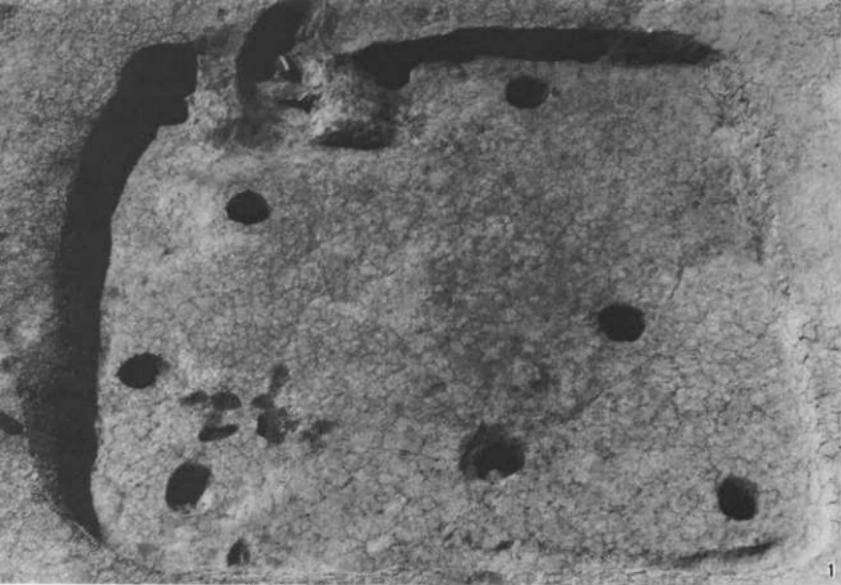
1~8:約1:1



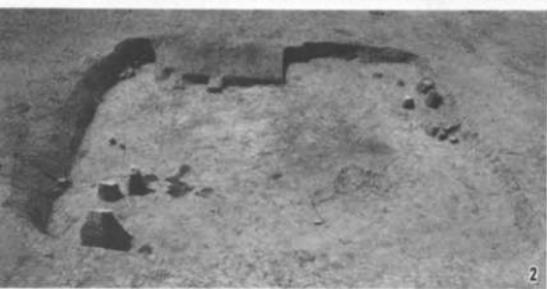
No.21遺跡
発掘区全景・南西
から

No.21遺跡





1.第7号住居
跡



2

2.同住居跡
遺物出土状
況



3

3.第12号住
居
跡
遺物出土状
況

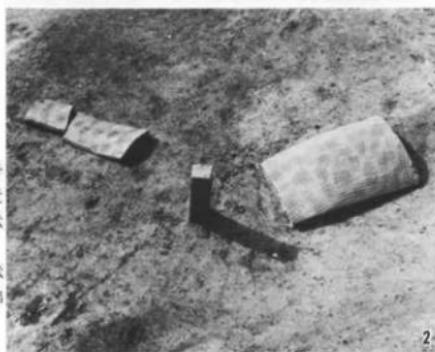


4.同住居跡
遺物出土状
況

No.21遺跡



1.第19号住居
跡
北から



2.第5・6号
住居跡付近
の瓦出土状
況



3.第2号段状
遺構遺物出
土状況



4.同全景
西から



1. 第3号段状
遺構
西から



2



3

2.3. 同段状遺
構
南から



4

4.5. 第5号段
状遺構遺物
出土状況
北から

図版第20

5

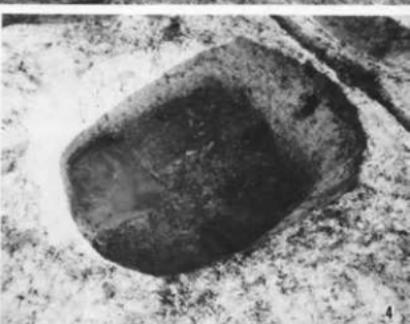
1. 谷部穴群の全
景
西から



2. X15Y13区付
近の穴群
西から



3. 第99号穴
4. 第104号穴



5. 第106号穴
6. 同穴断面と土
馬



No.21遺跡



3. 古い谷流水道
X21 Y13区・
西から



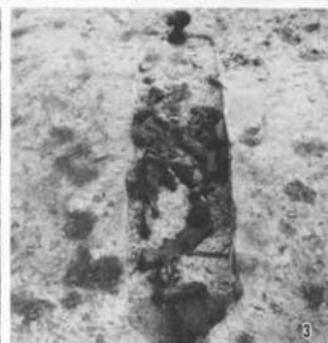
4. 新しい谷流水道
X21 Y13区
西から
5. 新しい谷流水道
X14 Y22区
西から

No.21遺跡

1. X22 Y 16区
製鉄炉と付
近の炭焼窯
跡
西から

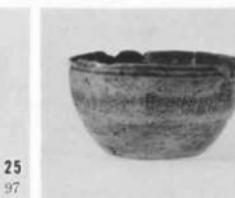


2. 第1号炭焼
窯跡
3. 同炭焼窯跡
内炭出土状
況



4. X25 Y 9区
近くの炭焼
窯跡等





No.21遺跡
出土遺物



1



2



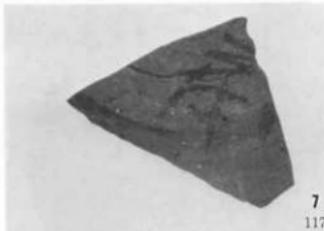
3
77



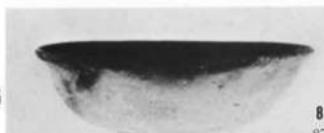
4
82



6
118



7
117

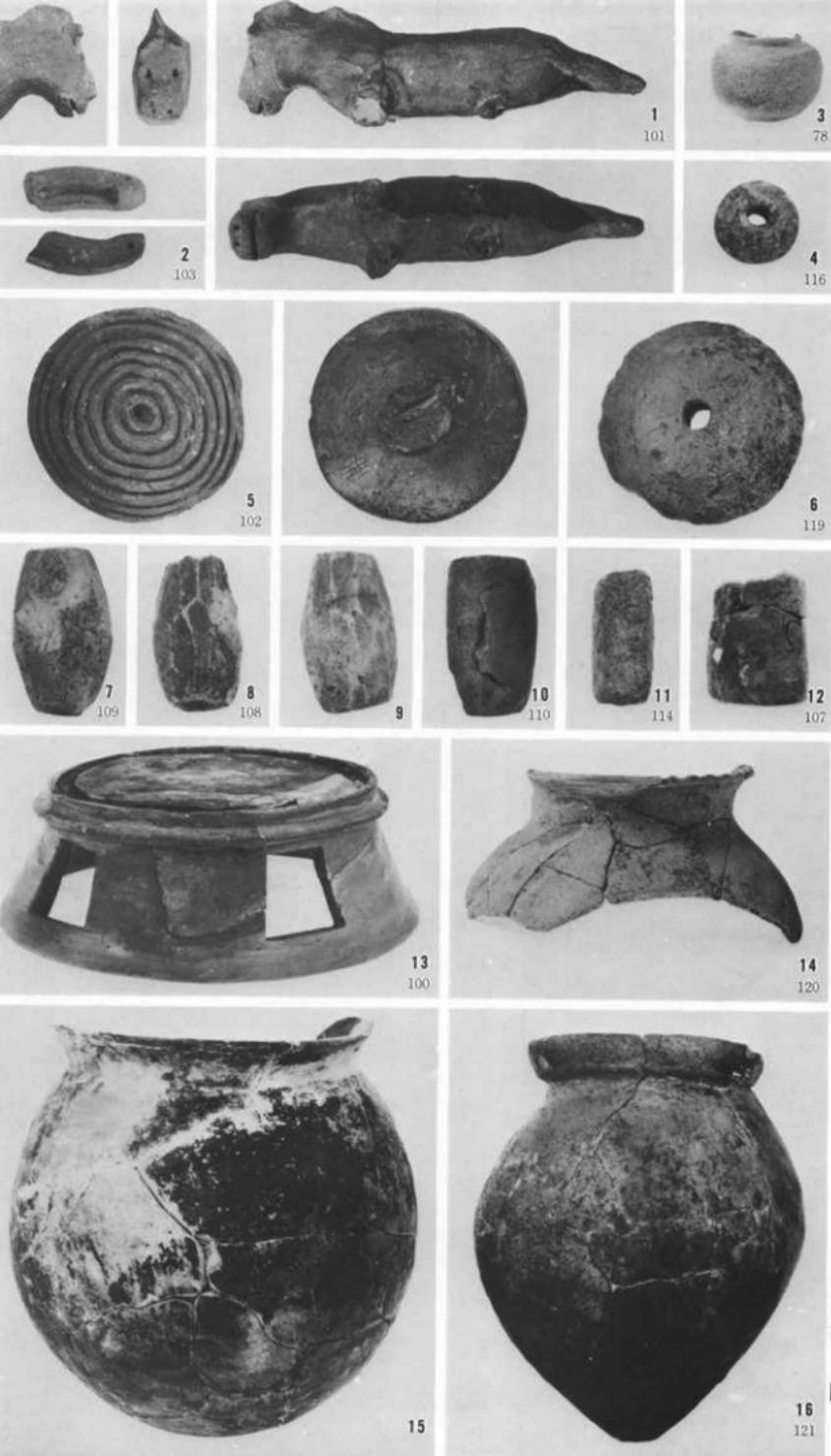


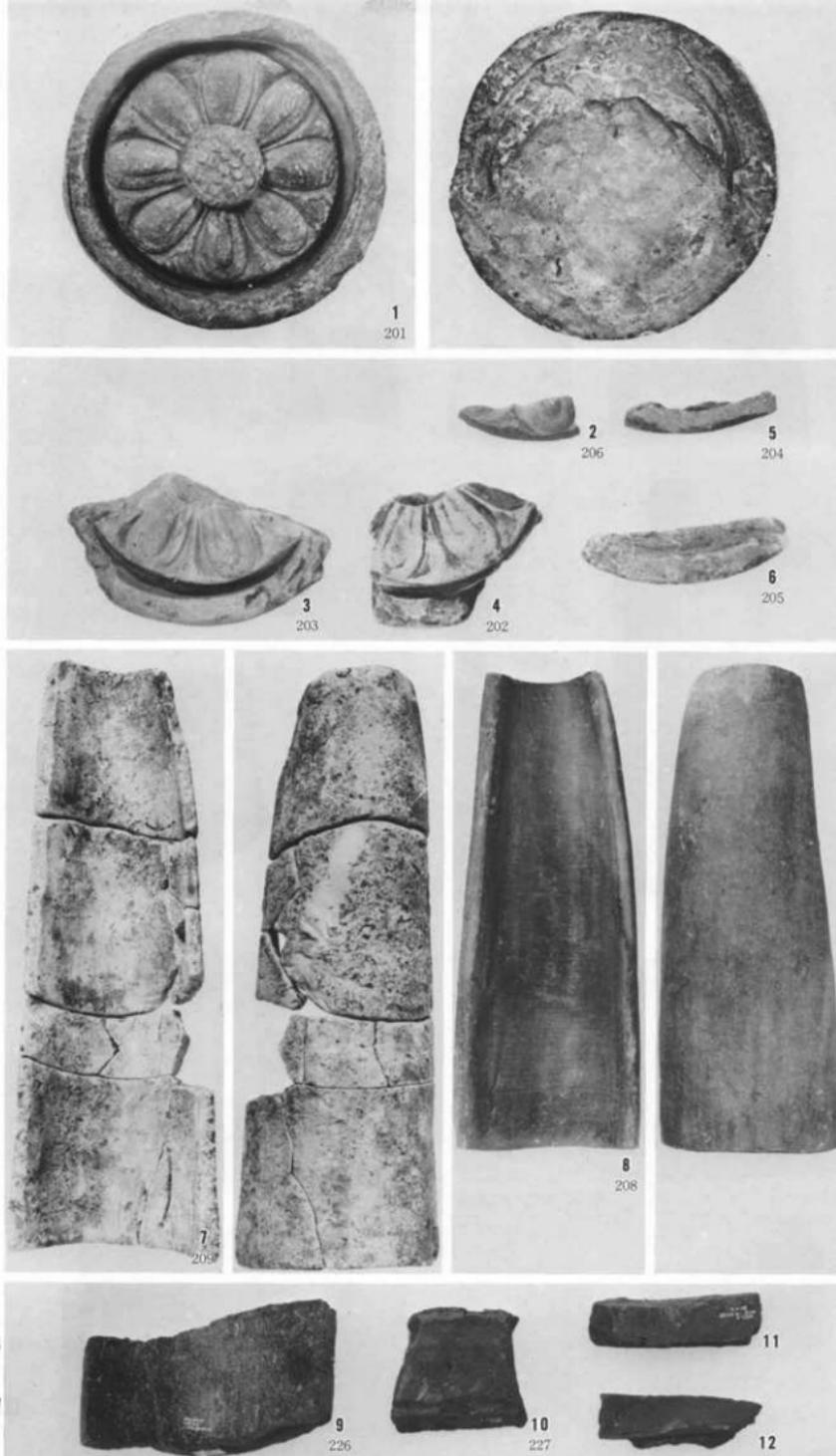
8
87

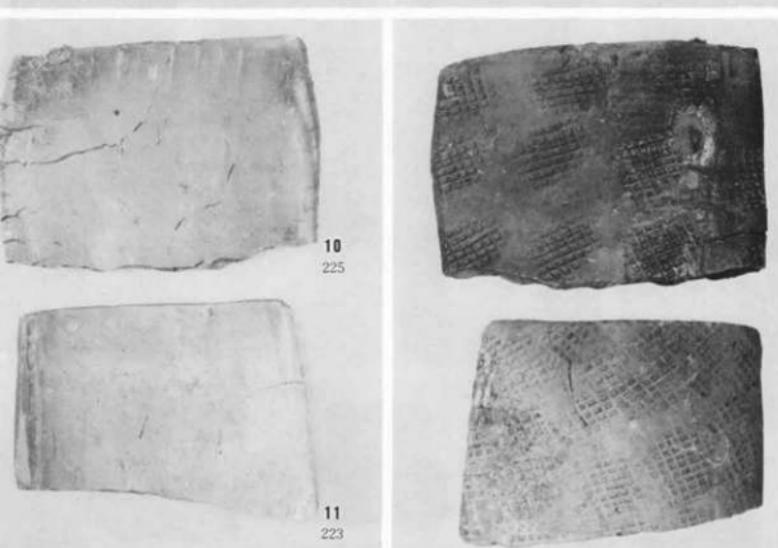
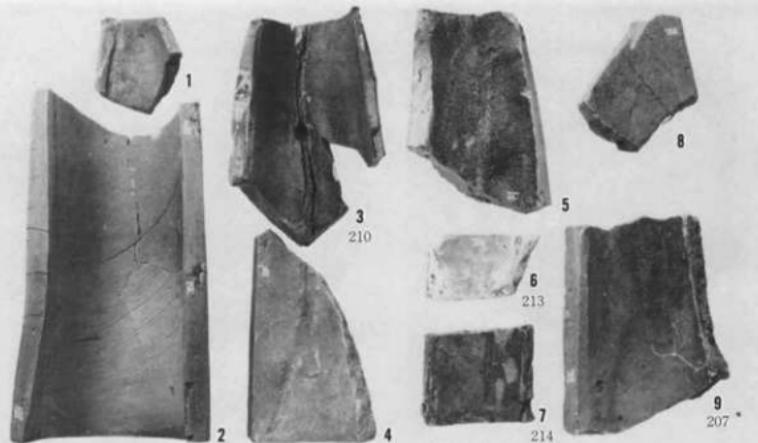


5
84

No.21遺跡
出土遺物

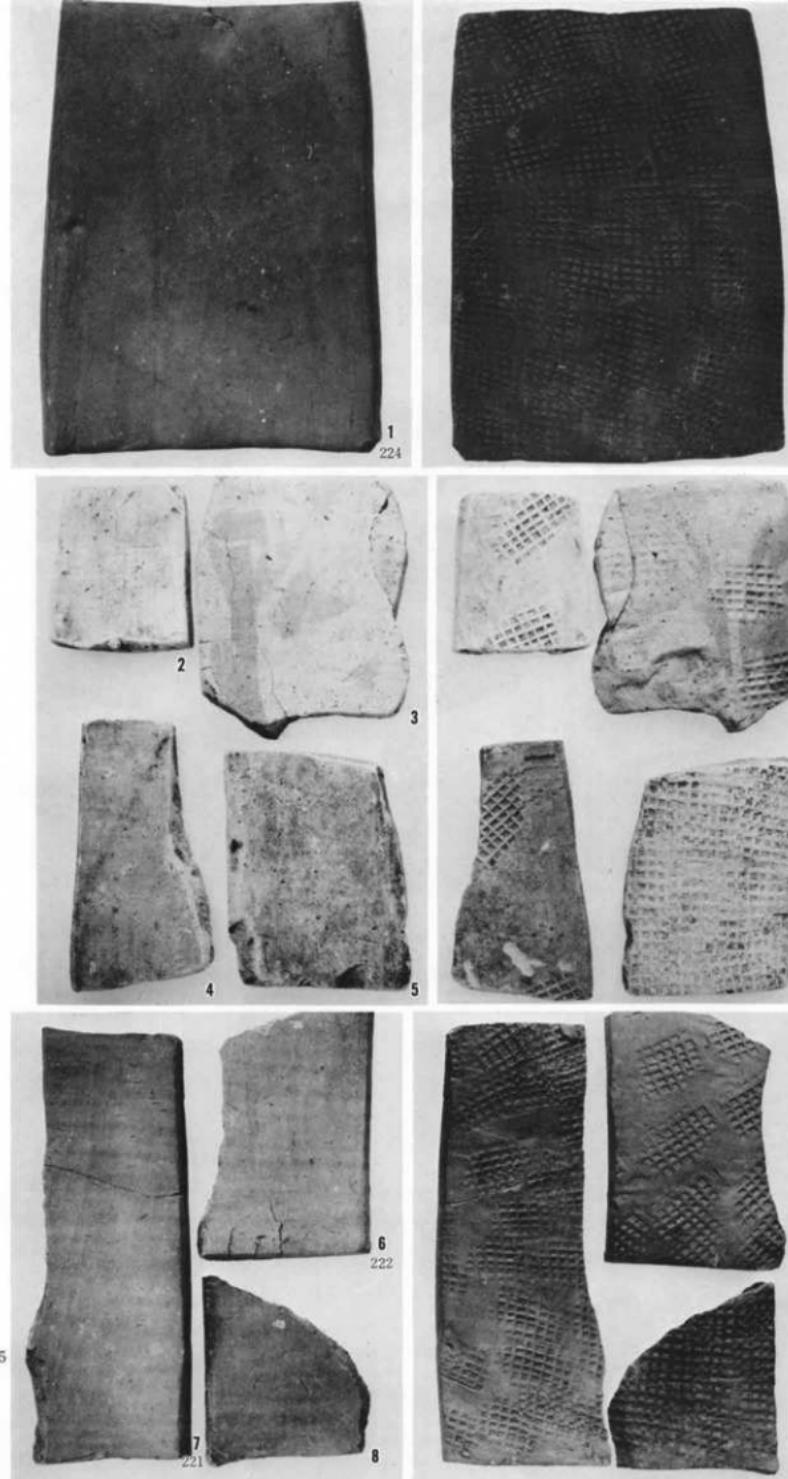




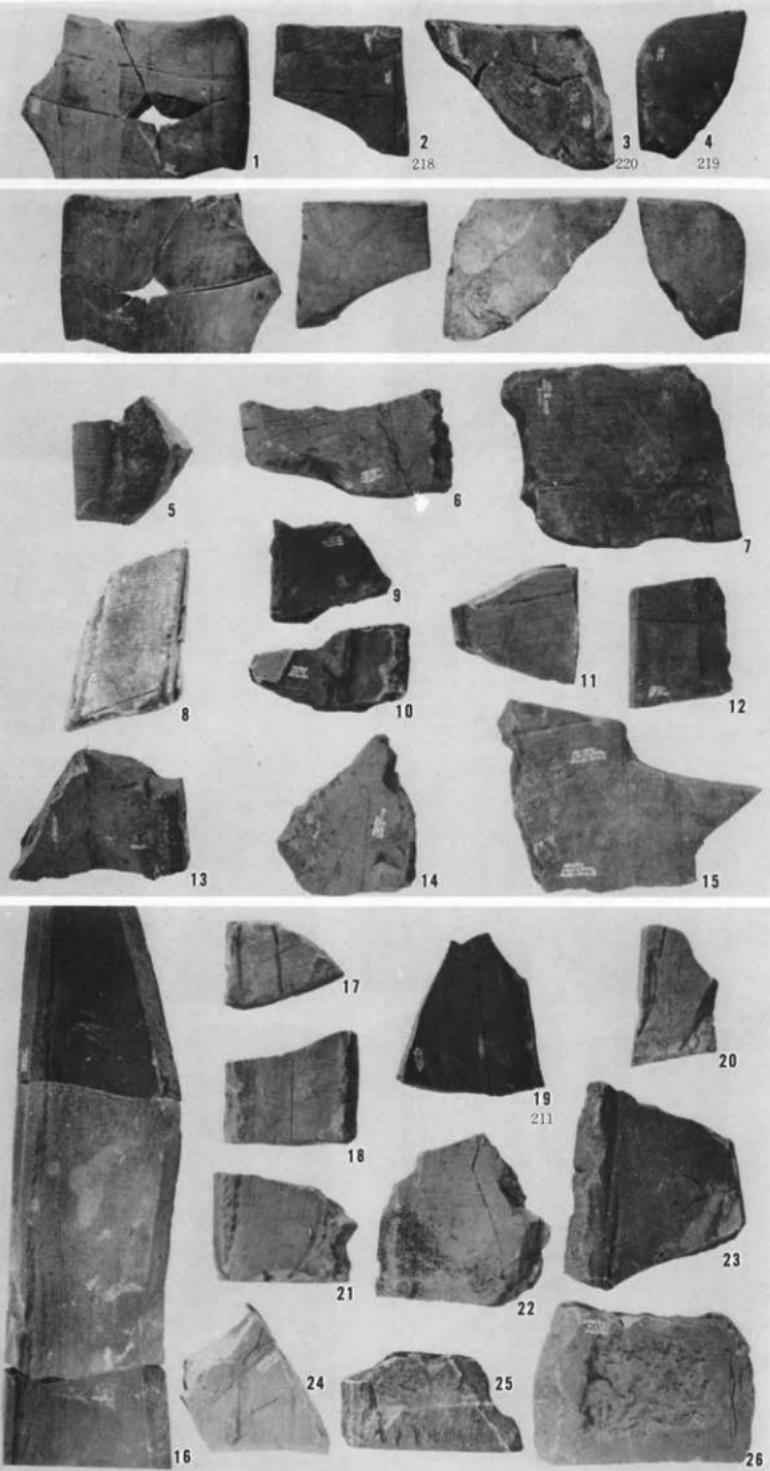


1~11: 約1:5

図版第28



1~8 ; 約1:5



1~4 ; 約1:5

小杉流通業務団地内遺跡群発掘調査参加者

丸山久一・前田春作・吉岡信雄・上谷信一・山崎正弘・山崎 弘・徳井正則・畠 正一・宇多外吉・炭谷建三・寺本右人・木原 茂・鈴木俊明・鈴木紋三郎・荒井茂一郎・南 義政・下條俊雄・浅井長作・吉岡 進・広林孝三・窪池義信・御後政志・西谷為義・水上利雄・古川保忠・川瀬重信・平川正雄・青木芳夫・林 滉則・林 利成・本松義雄・山崎信吉・広沢元成・清水友博・三好博喜・福本仁志・塚田一成・萩原昭子・北山きく子・小倉えみ子・山下ナミ・京角とみ子・京角はつい・御後利子・新屋玉子・山屋たみ子・宮林 都・野村美春・宿屋とき・宿屋はつえ・宮林かおる・上田みさを・吉岡秀子・野村敦子・徳井 昭・山口なみ子・福田芳子・大井八重子・沢 ミサ・柴田すみ子・山下アヤ子・窪池ソノエ・木村知穂子・三屋登美子・中波近江・山下たつ子・宮内百合子・明石孝子・林 峰子・針原美千代・宮林俊子・山屋美子・折坂和子・東山保子・杉谷一枝・炭谷フミ子・若杉すず子・若崎百合子・竹島静江・上谷アキ・黒崎ふじ子・市井くに子・宮本房子・盛田きのゑ・小倉道子・白石邦子・北山満子・山下金子・前坪敏子・橋爪たま子・清水ミヨシ・青木花枝・三鍋愛子・林 陽子・広川ミキイ・橋本律子・野中文子・杉本トシイ・泉ミツエ・林キクエ・沢田住子・大野スズエ・林 光枝・野村トミ・松原スズエ・本松 操・松原ミツエ・山崎栄(順不同・敬称略)

小杉流通業務団地内遺跡群出土遺物・資料整理参加者

広沢元成・清水友博・三好博喜・荒井和樹・杉崎容子・土田節子・山口チズ子・坪田和子・上田ユキ子・安部利子・光地ミヨシ・土橋裕子・久野静枝・黒田信子・小竹富佐子・須藤順子・麻柄幸子・熊本美恵子・殿邑宏美・笠倉都貴子・松田千春・古郷千佳子・竹内純子・大坪世津子・西本佐智子・山崎 栄・船道純子・藤野良子(順不同・敬称略)

富山県小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第6次緊急発掘調査概要

発行日 昭和59年3月31日

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 富山県教育委員会

印刷 日本海印刷株式会社